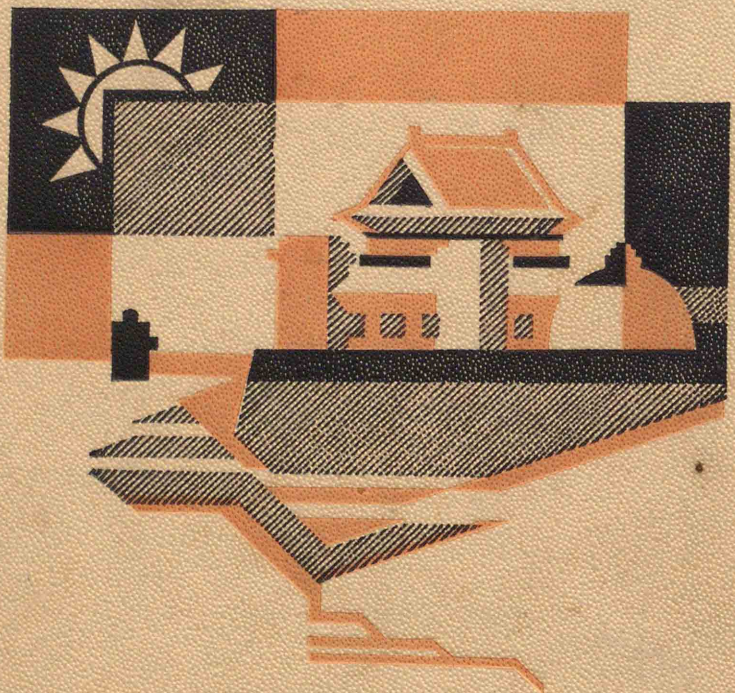


編新訂八
書科教史歷國外

著郎四久山中 士博學文



部之洋東

社 會 式 株
堂 省 三

教
4
20

43205

教科書文庫

4
230
41-1931
20000
82107

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

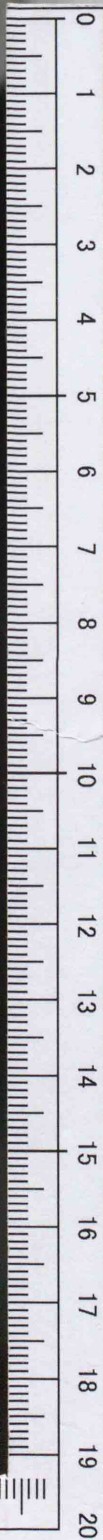


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

日二十二月一年六和昭
濟定檢省部文
用科史歷校學範師·校學中

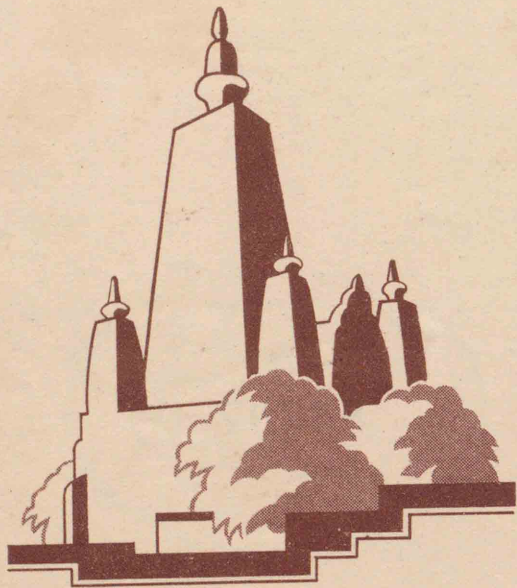
教科書文庫
4
230
41-1931
2000082107

編新訂八

書科教史歷國外

授教學大科理文京東
著郎四久山中士博學文

部之洋東



4a
220
DB6

広島大学図書
2000082107

社會式株
堂省三

昭憲皇太后
御歌

明治天皇
御製

(燈前
讀書)

今昔てらしあはせてともし火の
もとにふみ見るよはぞたのしき
ともしびのもとにふみ見ておもふかな
昔もかゝる事のありけり

(讀書)

よきをとりあしきをすて、外國とくこくに
おとらぬ國となすよしもがな

(國)

(折に
ふれて)

いそのかみ古きためしをたづねつゝ
新しき世のこともさだめむ

(讀書)

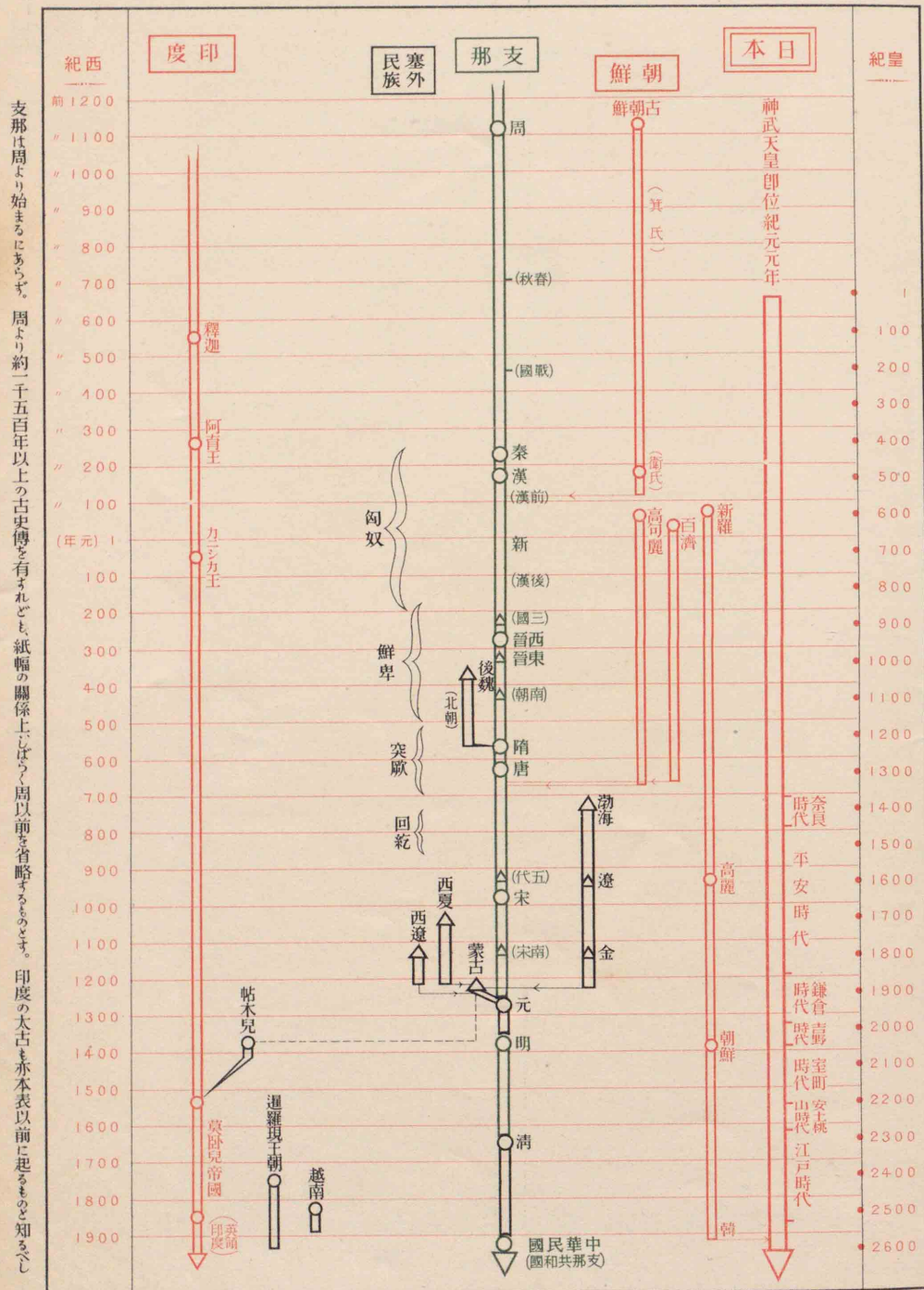
いまの世におもひくらべて石上いそのかみ
ふりにしふみを讀むぞたのしき

(子)

すゝみゆく世に生れたるうなるにも
昔のことは教へおかなむ



東洋史諸國總覽略表



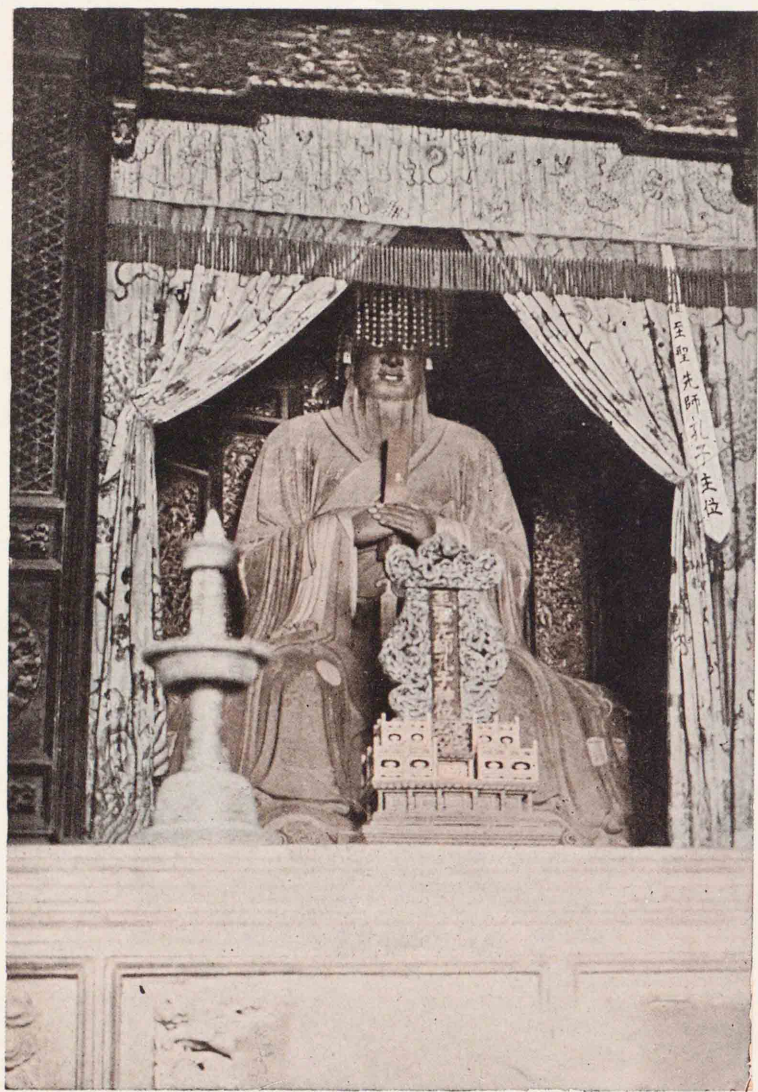
支那は周より始まるにあらず。周より約一千五百年以上の古史傳を有すれども、紙幅の關係上、はやく周以前を省略するものとす。印度の太古も亦本表以前に起るものと知るべし。



釋 加 圖

(藏寺福東都京)

(筆玄道吳の唐傳)



孔子の像

釋迦圖

支那の唐の世、文物大に興り、圖畫の術も頗る發展した。吳道玄は唐の諸大家の一人で、字は道子といひ、吳道子の名によつて知られてゐる。玄宗時代の人。人物畫に長じ、佛寺等の壁畫を作つたので名高い。本圖は、京都東福寺に藏められ、吳道玄の筆と傳へられてゐる。

孔子の像

この像は山東省曲阜縣城内にある大成殿(孔子を祭る殿堂)に安置されてあるもので、東魏の興和年中(今より大約一千四百年前)に作つたものとして傳へられて居る。

八訂新編 外國歴史教科書 東洋之部

例言

一本書は、中學校及び之と同程度の諸學校に於ける外國歴史甲(東洋の部)の教科書に充てんが爲に著述したものである。

二本書編章の目次は、文部省所定の中學校教授要目に準據したるものである。

三本書の記事は、簡明平易を主とし、事實の連絡關係に注意し、趣味ある逸話傳説及び詩歌等を附録し、欄外には簡潔なる小題目を掲げ、且つ本文中に正確有益にして趣味ある多數の圖畫を挿入し、専ら讀者の瞭解を助け、感興と趣味とを増さしむることに務めた。

四本書の紀年は、皇紀と西紀とを併記し、以て國史と西洋史との年代的關係を保たしめるやうにした。但し括弧内の紀年中、西紀と特記しないものは凡て皇紀の紀年である。又重要なる紀年には、我歷朝の御謚、又は將軍・執權等の名を併記した。但し明治以後に起りたる事實には、便宜上明治・大正及び昭和の年數を記

した。
 五本書毎編の終には、沿革摘要の年表を掲げて、學習史實の復習と概括とに充て、
 卷末には、歴代地圖を載せ、又諸章の末には諸王朝の系圖を記入した。適宜にこ
 れを利用せられんことを切望する。
 六本書の増訂は、今回で第八回である。編章の目次は凡て前の通りであるが、各章
 内の記事は、多數の中等諸學校長及び教師諸賢の輿論、並に教育雜誌の論説に
 従つて、やや詳細にして趣味あるものを加へ、且つ最近現代の事をも記すこと
 とした。
 七讀解の便利をはかり前回の訂正より口語體の文章を用ふることとした。
 八以上諸點は著者の聊か注意した所であるが、本書史料の選擇、排列及び文辭、其
 他の點については、なほ缺點あるを免れまいと思ふ。幸に大方諸賢の示教によ
 りて訂正改善することが出来たらば、ひとり著者の幸のみでないと思ふ。
 昭和五年五月本書第八回の修正増訂に際して

中山久四郎識
 (舊姓中村)

八訂編新 外國歴史教科書 東洋之部 目次

第一編 上古史 (大約五千年前より皇紀九百年代、西紀二)

第一章	上代の支那	一
第二章	夏殷周	五
第三章	春秋戰國	九
第四章	周代の文物 孔子	四
第五章	秦の統一	九
第六章	漢の統一	三
第七章	武帝の業 四夷の服屬	七
第八章	前漢の衰亂 後漢	三
第九章	西域との交通 印度 佛教の東流	三
第十章	兩漢の文物	三
第十一章	三國 晉の統一	三

第二編

中古史

(皇紀九百年代より一千八百年代、西紀一千年頃に至る迄、大約九百四十年間)

第一章	胡族の侵入	五
第二章	南北朝 隋の統一	五
第三章	唐の創業	六
第四章	玄宗 安史の亂	六
第五章	唐代の文物・宗教 南海の貿易	七
第六章	唐の衰亡 五代	七
第七章	宋の統一 渤海・遼金の興廢	八
第八章	宋代の文物	九

第三編

近古史

(皇紀一千六百四十年頃より二千三百四十年頃、西紀一十一世紀)

第一章	蒙古の勃興	九
第二章	元の世祖 宋の滅亡	一〇
第三章	東西の交通 マルコポーロ	一〇
第四章	元の衰亡 諸汗國の盛衰 帖木兒	一〇

第五章	明の統一	一一
第六章	明の衰運 滿洲の勃興	一一
第七章	莫臥兒帝國 葡萄牙人の來航 通商及宣教	一二
第八章	元明の文物	一三

第四編

近世史

(皇紀二千二百六十年頃より現代に至る迄、大約三百三十年間)

第一章	清の統一	一三
第二章	聖祖 高宗 清露の交渉	一三
第三章	邊外の征服 清の文物	一四
第四章	英國の東方經略	一五
第五章	阿片戰役	一五
第六章	長髮賊 英佛軍の侵入	一六
第七章	露國の滿洲經略	一六
第八章	露國の中亞細亞經略 伊犁事件	一七
第九章	佛國の印度支那經略 清佛戰爭	一七
第十章	清國に對する諸強國の壓迫	一八

(一) 北清事件に至るまで……………一五

(二) 北清事件以後……………一六

第十一章 支那の革命……………一六

第十二章 東洋近事……………一七

〔年表〕 附 録

〔上古史摘要年表〕……………一〇五

〔中古史摘要年表〕……………一〇九

〔近古史摘要年表〕……………一三六

〔近世史摘要年表〕……………一八

〔歷代地圖〕

第一圖

- 亞細亞地勢略圖
- 周代以前要地圖
- 春秋時代要圖

第二圖

第二圖

- 戰國時代略圖
- 古朝鮮時代略圖
- 印度古代佛教靈場並に亞歷山大王遠征行路略圖
- 漢代亞細亞圖
- 漢楚分爭圖
- 三國鼎立圖

第三圖

- 唐代亞細亞圖
- 北宋遼西夏對立圖
- 南宋金西夏對立時代圖

第四圖

- 元代亞細亞圖
- 元代版圖擴張圖

第五圖

- 明代亞細亞圖
- 清初亞細亞圖
- 清初滿洲圖

第六圖

- 列強亞細亞侵略圖
- 露國中央亞細亞侵略圖
- 露國極東侵略圖
- 佛國印度支那侵略圖

(注意) 諸地圖の中で、支那の地名に、括弧をつけ加へたものの中には、現在行はれてゐないものもあるが、それは最近まで稱へられてゐて、世人の普通熟知してゐるものである。

訂八編新
外國歴史教科書 東洋之部 目次終

訂八編新
外國歴史教科書 東洋之部

文學博士 中山久四郎著

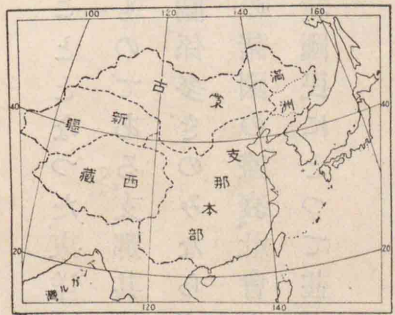
第一編 上古史 (大約五千年前より皇紀九百年代西紀二
百八十年頃に至る迄大約三千五百年間)

第一章 上代の支那

東洋歴史 我等はこれより東洋歴史を學ぶこととなつた。東洋歴史は、西洋歴史と相併んで世界史の半をなすものである。支那其他の東洋諸國は古より我國と文化上、政治上の關係多きのみならず、現代國際上の關係も亦大なるものなれば、その諸國の盛衰、社會の變遷及び文化の由來と性質とを知ること、は、我國民にとつて甚だ重要なことである。

世界最舊國の一

建國の起源 東洋史の中心ともいふべき支那は亞細亞の一大國で、世界最舊國の一である。地大に人多く、山高く水長く、古來幾多の聖賢を出し、種々の文明を生じ、その學藝思想は多く東洋諸國に傳はり、その發明技術はひろく西洋諸國の先驅となつたものもある。



支那略圖

苗族

漢人種

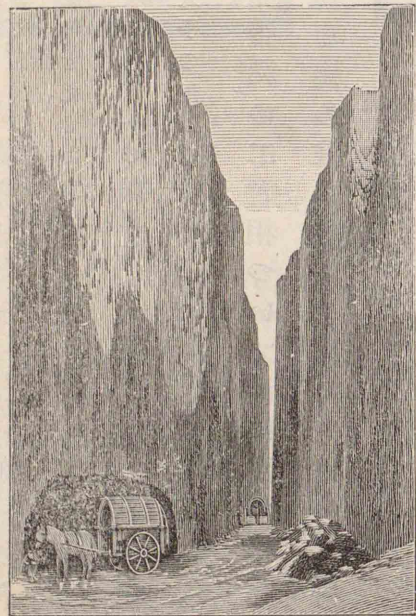


苗族の風俗

その太古には苗族といへる人種が、江(揚子)河(黃河)の間に住んで居たが、今より五千年ばかり前に、漢人種は西北方より黄河の沿岸に移住し來り、次第に苗族を東征南伐して、先づ北

黄帝
開化の次第

支那の地を占領した。太古の漢人種は、穴居野蠻の生活状態であつたが、次第に繁殖發展し、傳説によれば、今より四千五百年許り前に、黄帝といふ英雄的君主が出て、諸部落を征服し、支那帝國統一の基礎を建てた。黄帝以前に牧畜農業すてに起り、醫藥の術も始まり、交易の道も開けたが、黄帝の時には、舟車を造り、音樂を定め、文字を製し、史官の設さへあり、東亞の名産たる養蠶も、亦帝の時に始まり、其他實際生活に必要な度量衡など諸種の發明があつたと云ふ。また太古の人は石器を用ひたが、此頃から漸く銅器使用の時代に進んだ。



山西省黄土の切り通り(真寫)

支那人は黄帝を支那國の開

支那と黄色

祖とし漢人の大祖先として尊び、近くは清朝を倒した革命軍の櫛文にも黄帝紀元四千六百九年(明治四十四年)と記した。支那の建國は黄河地方で、同地方の土質は黄土(Loess)である。而して其國統一の始祖は、即ち黄帝である。黄色は實に支那人に神聖視せられ、後世天子の用ふる色として尊ばれるやうになつた。

帝堯の重農政治

堯舜二帝 黄帝の後に帝堯帝舜の二君相ついて世に出た。帝堯はよく國を治め民を愛し、曆法を定め、且つ農業を重んじた。時に舜は

帝舜の文徳武功



(刻石の代時漢後)像の堯帝

父母兄弟子の五教

帝堯放勳、其仁は天の如く、其知は神の如く、之に就けば日の如く、之を望めば雲の如し。

孝悌賢明を以て名があつたので、帝堯之を擧げて政を攝せしめ、遂に帝位を舜に禪つた。帝舜は禹契棄等の賢臣を用ひ、内は巡狩入朝の制を定めて、漸く天子の主權を固くし、又父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝の五教を明にして、人

師父の態度

二十四孝の第一

民を教へ、外は南方の苗族を征伐して北方漢人の勢力をひろめた。二帝は殆んど師父の態度を以て、人民を治め、支那の理想的二大聖天子として尊ばれ、特に帝舜は古來支那人の最も重んずる孝行を以て著はれ、所謂二十四孝の第一人として名高い。二帝の時代は今より四千餘年前で、ともに今の山西省地方に都した。

第二章 夏殷周

治水の功

夏の世 帝舜の賢臣中、禹は堯舜の時に起つた黄河の洪水を治め

禹の勤儉



禹 王

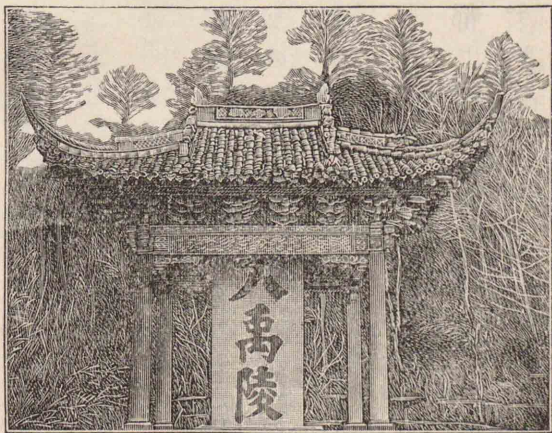
て、其父の治水に成功しなかつた汚名をすすぎ、帝舜の禪りを受けて、天子となり、國を夏と號し、安邑(西山)に都し、全國を九州に分つた。禹の勤儉は名高くて、孔子も之を稱

王位世襲の始

支那革命の始

して、禹は吾れ間然する所なし」といはれた。禹の子啓も亦賢く、父について王位につき、始めて王位世襲の制を開いた。其後桀王に至り、悪政を行ひ、殷の湯王に滅された(皇紀前一七六〇年頃)。

かしこくも君が治めし水の音は流れて末の世にひびきけり
近衛忠熙
治めえぬ水を治めてたらちねの親の恥を
もすすぎつるかな
高崎正風



浙江會稽道紹興縣東南稽山禹陵

堯舜と桀紂

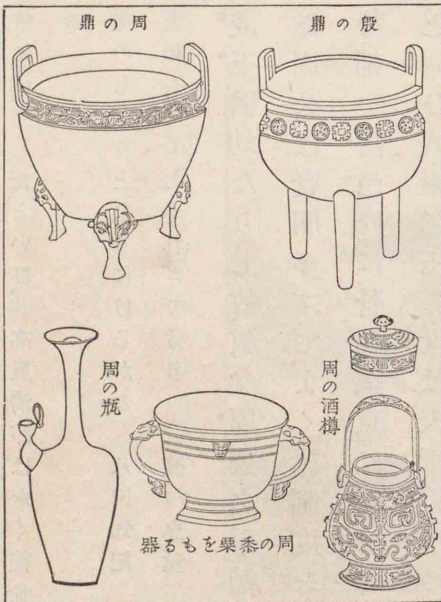
殷の世 湯王は舜の名臣契の後である。桀王を滅して天子となり、國を商と號し、亳(河内)に都した。其後紂王は暴悪の君であつたので、つひに周の武王に滅され(皇紀前一四六〇年頃)、その末路は前代に似て居る。商は中頃、都を殷(河南)に遷し、また殷とも號した。

文武二王

周の武王 武王も亦舜の名臣棄の後である。其父文王は殷の末に、大諸侯となり、仁政を施し、人望があつた。武王之につき、太公望を用ひ、紂王を伐つて殷を滅し、王位に鎬京(陝西)に即き、一族功臣を封じて、王室の藩屏とした。而して周が其國號である。

逆取順守の二王

支那の國體 湯王と武王とは、一は君を放ち、一は君を伐つて、革命を行つたが、其政治は順良であつたので、逆取順守の聖人と稱せられた。道理に逆ふて之を取り、民心に順うて之を守つたといふ義である。斯の如く古來支那には王室興亡の革命は行はれたが、其革命は純然たる民主主義の革命ではなくて、英雄主義の革命の狀を有し、英雄的



殷周時代器物

伯夷・叔齊の高風清節

權力の所在に従順して、其統治に服従するものであつた。
殷周革命の際、伯夷・叔齊の二義人あり。武王出陣の時、武王の勢に屈せず、臣として君を伐つゝの暴舉を諫めたがきかれず、天下既に周の世となるや、周の粟を食ふを恥ぢて、山に入り、蕨をとり、終に餓死したといひ、其高風清節は永く後世に傳はつた。

山深くをりし蕨は萬世の道のしをりとなりけるかな 八田知紀
蕨のみ折りし心は敷島の大和人にもおくれざりけり 渡 忠秋

周公の賢才

周初の隆盛 武王死して、子成王猶幼なりし故、叔父周公之を輔け、政を攝して王室の基を定めた。周公は賢明多才で、よく諸制度を定め、後世の模範となつた。又此時都を洛邑(河南)に營み、鎬京に對して東都と稱した。成王の子を康王といひ、成康二王の世は天下太平の時であつた。

東西兩都

六官

周の時、中央政府には六官(天官は政治を總理し、地官は民治教育、春官は祭儀禮)があつて國政を分擔し、地方には諸侯があつて、各其領地を分治し、諸侯の爵は公侯

五爵

伯子男の五等に分れた。

周の東遷 周初天下太平の後、

幽王の失政
犬戎の侵入
西周と東周

明君少くして、暗君多く、王威漸く衰へ、幽王に至り、政を怠り、終に西方の犬戎といふ蠻族に攻め殺され、其子平王は犬戎を恐れて都を洛邑に遷した(皇紀前一一〇)。之を周の東遷といひ、これ以前を西周、これ以後を東周といつた。



(會圖勝名土唐)む諫を王武の周齊叔夷伯

第三章 春秋戰國

春秋の世 周の東遷後、約三百年間を春秋の世といふ。この間、王權上に衰へ、諸侯下に争ひ、強は弱を併せ、大は小を合せ、而して夷狄は益、侵入した。周の王はもはや勢力がなくなつて、漢民族を救ふこと

覇者の二標語尊
王攘夷

春秋の五霸

齊の桓公

管仲の主義及び
友道

が出来ない。そこで有力な大諸侯は、内は周の王を尊び他の諸侯等をして勤王を誓はせ、外は夷狄の侵入者を撃ち攘つた。覇者といふのが即ちかういふ強い大諸侯である。

五霸の業 當時覇業をなした者が五人ある。之を春秋五霸といひ、其第一は今の山東省内に國せる齊の桓公である。桓公は管仲を用ひて、王室を尊び、夷狄を攘ひ、其功業盛大であつた。桓公の時は、實に我神武天皇紀元前後の頃である。



管仲

管仲はもと鮑叔と親しく、所謂管鮑の交といふ美談がある。管仲曰く、生我者、父母、知我者、鮑子也。と。管仲は富國を政治の先務とし、倉廩みちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る。といひ、又公法行はれて私曲止み、倉廩みちて困圉空し。といつた。困圉は刑務所である。唐の詩人杜甫も貧交行の詩を作つて管鮑二人の交をほめた。

晋文・楚莊及び
吳・越二王

南北戦争

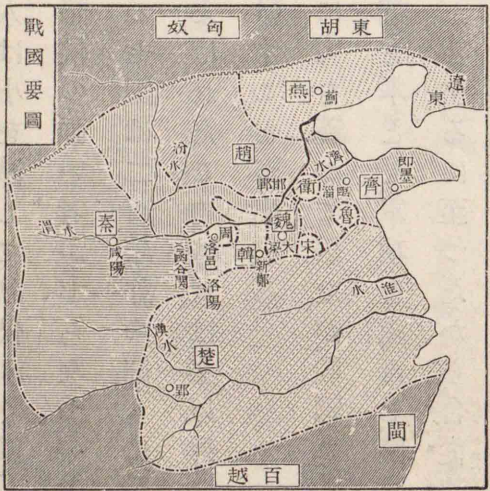
西北の文化

東南の文化

翻手作雲覆手雨。紛々輕薄何須數。君不見管鮑貧時交。此道今人棄如土。

齊の桓公の後、晋の文公は、北方に起り、楚の莊王、吳王、夫差、越王、勾踐の三人は南方に起り、各覇業に成功した。

支那の南北 春秋時代は古代支那の南北戦争時代と看做すことが出来る。その初は北部の方が強かつた。しかし、大勢は漸く南方の強盛に傾いた。蓋し北部は早く開けて、漸く文弱となり、南方は久しく蠻勇強健の風を維持して居たからである。而して又古代支那西北文化の早く開けたことは、遠く南方に優つてゐたが、春秋時代、楚、吳、越が次第に興つてから、文物始めて東南に及ぶこととなつた。



戰國要圖

戰國七雄

東西戰爭

孝公と商鞅の重
農強兵政策

蘇秦の合従説

張儀の連衡策

戰國の世 春秋の間、強は弱を併せ、大は小を滅して、諸侯漸く滅じ、平王より凡そ三百年後の支那には、諸侯の強い者が七つとなつた。秦・楚・齊・燕・韓・魏・趙が即ちそれである。この七國は二百年許の間、互に戰爭を事として居たから、戰國七雄とよばれた。この時代は秦以外の六國と秦との東西戰爭時代とも看做すことが出来る。

秦の富强 秦は春秋の時より西方に力を養つて居たが、戰國の初、孝公立つに及び、商鞅の策を用ひ、農業を本とし、軍功を重んじ、國富み兵強く、其勢は東方の六國を壓せんとするに至つたから、合従連衡の説が起つて來た。

合従連衡 合従とは六國合して秦に當るをいひ、雄辯の策士蘇秦大に之を力説し、六國に遊説して、遂に同盟の長となり、専ら秦を弱めんと謀つたが、六國が公約を重んじないと、秦が離間策を施したのによつて、合従は忽ち破れ、秦は權謀の策士張儀をして六國



蘇 秦

に説き、秦との和を全くせしめた。之を連衡の策といつた。是より後、六國は策士の言に惑ひて、其國は一定せず、國勢漸く衰へた。

蘇秦は諸侯に説くに當り、寧爲鶏口無爲牛後、といふ諺を用ひ、張儀は其最初の遊説に失敗して歸り、人に侮らるゝや、視我舌有則足矣、といひて、其辯舌を自信すること甚だ強かつた。

遠交近攻策

猛虎と群羊

秦の統一 秦は六國と異なり、進略の方針を一定し、遠交近攻の策を用ひて、益諸侯を弱め、先づ周王を滅し、秦の始皇帝は破竹の勢を以て終に六國を滅して、天下を統一した(皇紀四四〇孝靈天皇)。秦の六國に對するは、恰も猛虎の群羊を驅るが如き有様であつた、而して周は武王より三十八世、八百七十四年にしてつひに滅びたのである。

周(八百七十四年) 西周(東遷前の周 三百五十二年) 春秋の世(約三百年間)
 東周(東遷後の周 五百二十二年) 戦國の世(約二百年間)

第四章 周代の文物 孔子

教育學術 支那教育の始は、帝舜時代の五教(四頁参照)で、夏殷以來すでに學校の制があつた。周に至つて、學制漸く備はり、大學、小學を設けて、禮、樂、射、御、書、數の六藝を教科とし、大學では修身、治國、平天下の大道を教へ、小學では、應對などの小事を教へ、専ら實用教育を重んじたのである。次に學術發展の狀を考へると、堯舜の時其根を植ゑ、夏殷の世其芽を發し、周代に至つては、花を開きて、其美を競うの狀となつた。特に春秋戰國時代は、社會の變動と共に、思想、言論、自由となり、立身榮達の途の開けたため、學者論客競ひ起り、各自修養の學術を以て、世を救ひ身を立てんことを力めた。

六藝

大道と小事

上古學術發展の根と芽と花

人文の活動

世界の大聖人

孔子 孔子は、周代學者中の偉人たるのみならず、世界の人類中に於ても、最も偉大なる人格を有する大聖人の一人である。孔子名は丘キウ、字は仲尼アザナ、春秋時代の末、今の山東省内の魯國に生れた(皇紀一〇九五、西紀前)。元來魯國は周初の元勳で、周一代の制度禮法を定めた周公の封地であつて、春秋に至つても、なほ其餘風を存し、禮義の盛な國であつた。孔子は此國に生長し、幼より禮儀を習ひ、十五にして學に志し、三十にして學成り、四十にして徳義の信念益々堅くして惑はず、七十に至つては、心の欲するままに行ひて、一々道理にかなふやうになつた。かくて其學徳の高きと共に、多藝多才、音樂の趣味も人に優り、又其意思極めて強く、義を見て爲さざるは勇なきなり。といひ、或は身を殺して以て仁を成す。といひ、道の爲には身命も亦惜まなかつた様である。而して孔子の志は經國實用を主とし、その人を教ふるや、道德を重んじ、また事功を輕んぜず、ことに人倫を明か

一生の進境

義勇

孔子の志

人倫道德の教

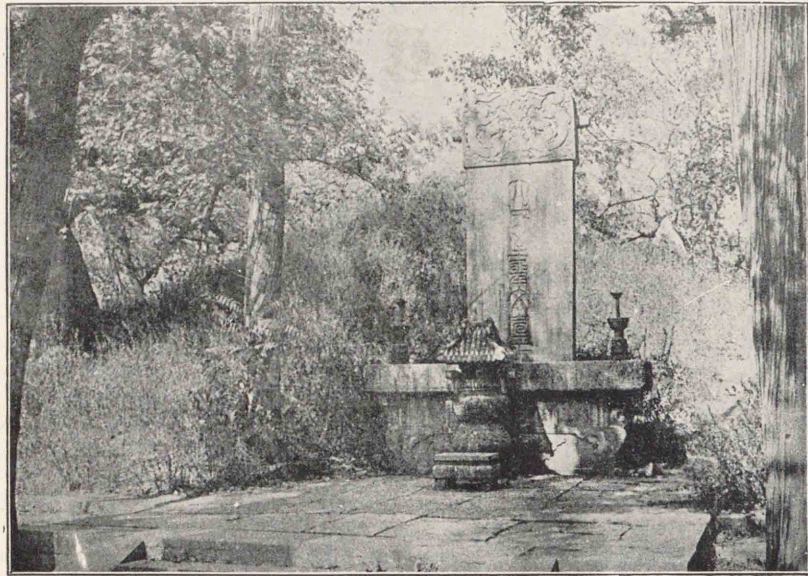
論語

儒教の大成

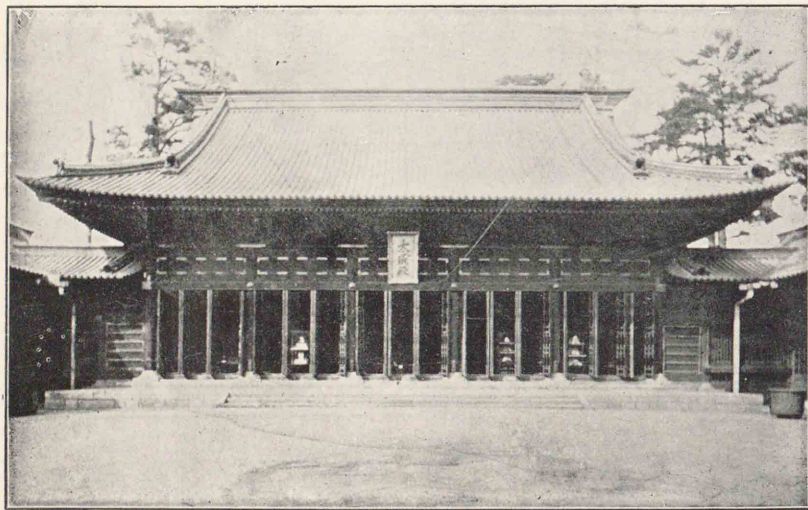
孔子の孫子思
孟子と荀子

にした。孔子も一時魯に仕へて司寇（大體今の司法大臣）となつたが、惜いことに長く用ひられなかつた。そこで四方に週遊して、其道を諸侯に説いたけれども、志を得ず教育及び著述に従事し、七十四歳を以て歿した。論語は孔子及び門弟子等の談論を編輯したものである。孔子の遠孫は今日に連綿して、山東省の曲阜に住し、政府及び國民より非常の尊敬を受けて居る。

儒教は實に孔子の大成した徳教である。孔子は身を修め國を治むるには人々の親愛する仁により、仁の最上徳に達するには、家族制度の中心道德たる孝悌の道より始むべしと教へ、又君臣の名分を明にした。其孫子思は誠の道を説き、その後孟子は性善説を唱へ、又王を尊び覇を卑し、仁義を重んじて、功利を輕んじ、且つ人々皆聖人たることを得べしと説き、その後に出た荀子は性惡説を唱へ、孟子と相反した。しかも皆孔子の流を汲んだものである。

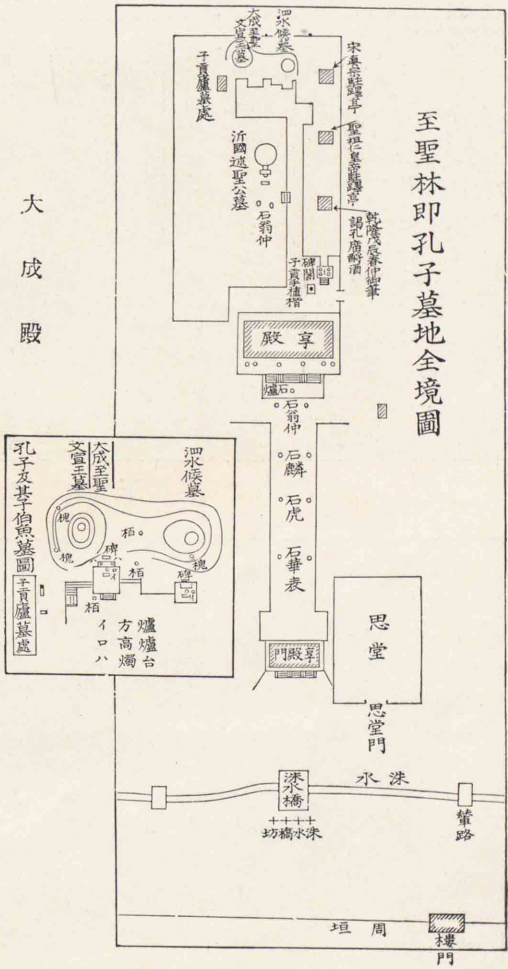


大成至聖文宣王墓 (孔子の子墓)



大成殿 (東京湯島)

至聖林即孔子墓地全境圖



大成殿一名聖堂は東京市本郷區湯島三丁目東京教育博物館所在地にあつた。徳川時代毎年孔子をここに祭り、今また孔子祭典の式場である。寫眞の殿堂は寛政十一年の建築に修理を加へたもので、既に一百二十餘年の星霜を経て尙壯麗であつたが大正十二年九月一日の大震災の爲に焼失したのは惜いことである。本邦で初めて孔子を祭つた事の歴史上に明文のあるは、今より一千二百餘年前の文武天皇の大寶元年である。

要は實行にあり

論語と清正



(孔子を教く説の圖)

論語知らずといふ諺のやうになつてはならぬと思ふ。

日のもとに仰げど高しから國のおほき聖の道（じじ）の光は 清水濱臣
 豊臣秀吉の薨じた年、前田利家は加藤清正・浮田・淺野の諸將を招き、論語のことを談じた。『曾子曰く、以テ六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべし。大節に臨みて奪ふべからざるは、君子の人なり。』といへる一章を擧げて、清正等に示していふには、今日に在りて此語を忘るるものは、之を忠臣といふべからず。

聖賢の書は、よく讀み、なほよく行ふことが肝要である。讀むだけで行はなければ、徒に光陰を費し、精神を勞するのみである。要は實行にある。論語讀みの

と清正等の忠節を堅からしめたのは、利家の言與りて力あつたといふ。因みにいふ、周代の一尺は大體今の曲尺七寸六分である。



老子と孔子

諸子百家 孔子と同時代に、楚の人老子あり。自然無爲の道を説き、列子・莊子其説を傳へた。此一派の學者を道家といひ、また老莊の學ともいふ。儒道二家の外、諸學者競ひ起り、楊子は自愛説を立て、墨子は兼愛説を唱へ、商鞅・韓非等は法家として名高く、孫子・吳子は兵法を講じた。凡て是等

を總稱して諸子百家といふ。

武田信玄、孫子の語を以て其旗に書して曰く、不動如山、侵掠如火、其靜如林、其疾如風。と。信玄の如きは、實に孫子の名言の神味を悟つたものである。

諸子百家
信玄と孫子の語

老莊の學

第五章 秦の統一

政體改革

始皇帝の内政 秦の始皇帝六國を滅して、天下を統一してから、大に政體を改め、中央政府には、丞相・太尉・御史大夫を置いて、全國を直轄し、地方には新に郡縣の制を



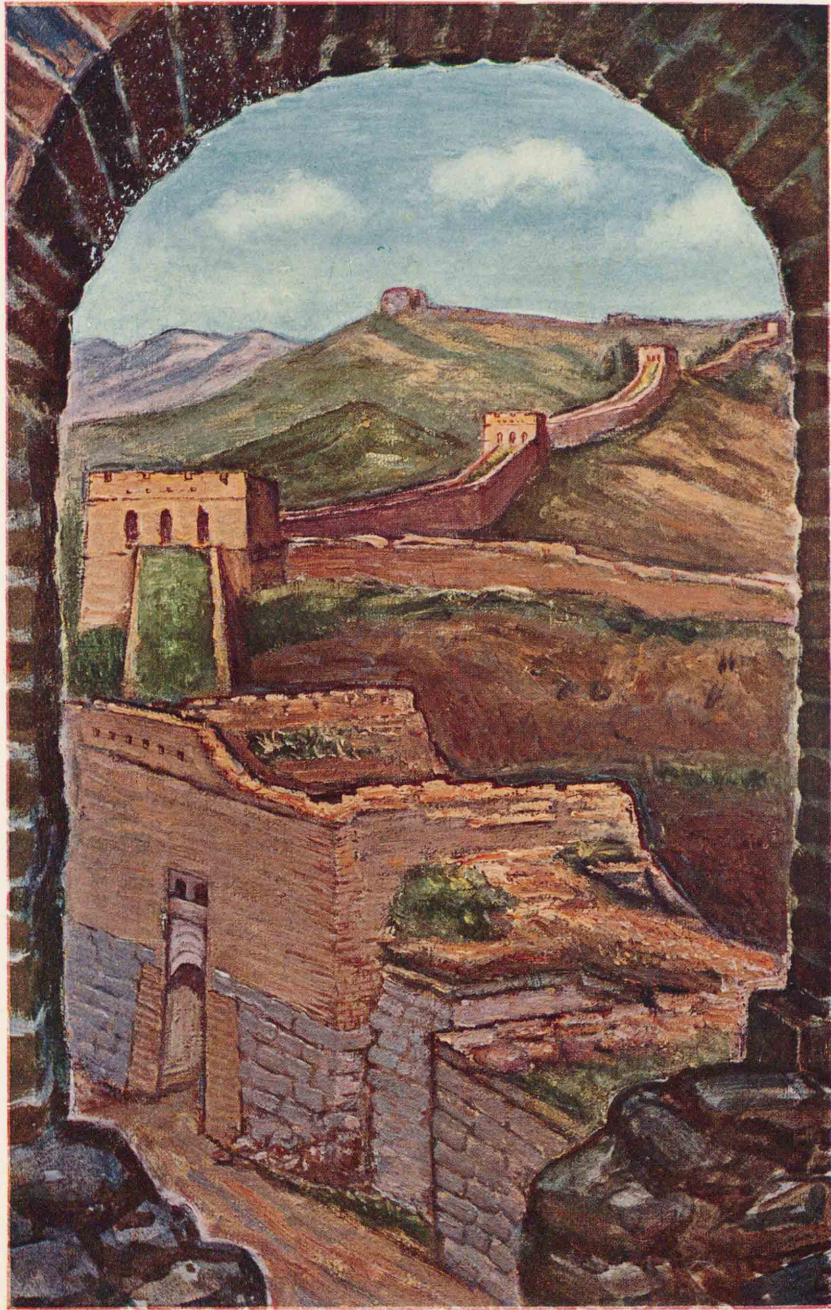
秦始皇帝

定め、全國を三十六郡に分ち、各郡に守尉・監を置いて之を治めた。また民心を一にし、叛亂の源を塞ぐ爲に、文字を改め、度量衡

文字の改定
兵器の沒收

を一にし、民間の兵器を沒收し、且つ地方の富豪を帝都咸陽(周都北)に集めた上に、大に宮殿を築き、屢、地方に巡幸して皇帝の尊嚴を示し、盛に中央集權の政を行つた。

文字の起源は、堯舜以前であつて、上古の文字を古文と稱し、周の世まで用ひ來



城 長 の 里 萬

匈奴

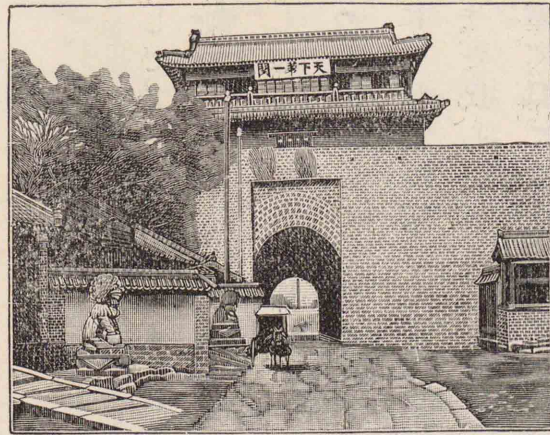
かした。時に戦國時代から匈奴（Hsiung-nu/Huns）といふ北狄が屢々侵入を企てゝゐたので、帝は將軍蒙恬をして之を撃退せしめ、且つ

草 行 楷 隸 篆 文 古

日	日	日	日	日	日	日	日
月	月	月	月	月	月	月	月
魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥

（史 通 那 支）表 字 文 今 古

威を輝 大に國 外に向 とも 外に 向 示す 始皇帝の外征 始皇帝は内に帝威



（端 一 の 城 長 里 萬）關 海 山

つたが、周の時篆書の發明があり、秦に至り、篆書を改良して隸書をつくり、其後楷行三草の體が起つた。

萬里の長城

南越

支那といふ國號

國民新政を厭ふ

過激手段

世界有名の大工事たる萬里の長城を北邊に修築して、其侵入を防ぎ、また南越を征して今の安南地方まで定めた。是に於て秦の天下は大に擴張し、其威名遠近に振ひ、諸外國は秦の名を訛つて支那と呼び、遂に國名となすやうになつた。

燒書坑儒 時に戰國時代に行はれた遊説論難の風なほ存し、學者の新政を非難するものがあつた。そこで、帝は丞相李斯の議を用ひ、醫藥卜筮農業以外の民間の書を燒き、遂に儒生四百六十餘人を坑に埋めて、以て異論を抑壓せんとした。

秦の滅亡 秦の政治は、民を愚にし、民を虐げたため、國民は漸く不平を生じ、かつ秦に滅されたる六國の遺臣の隙を窺ふ者ある時に際し、創業の英主始皇帝は統一後僅に十二年にして死し、少子二世皇帝が立つたが、暗愚にして、始皇帝の時の如き權威勢力なく、楚人陳勝まづ叛き、群雄相ついで起つた。

項劉二雄

大言は空言

中にも江東(蘇江)に起つた楚人項羽と沛(蘇江)に起つた劉邦とは、最も有力なる英雄であつた。劉邦は項羽に先ちて咸陽の都に迫り、二世皇帝の次ぎの秦王子嬰は、出て劉邦に降つた。始皇帝が二世三世とかぞへて萬世に至り、之を無窮に傳へん」と大言した秦の天下も、始皇帝の死後僅に三年にして滅びたのである。(四五五孝元天皇御。代西紀前二〇六)

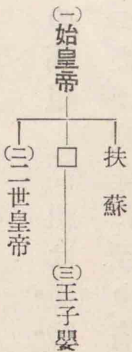
是より先、戦國の末に楚の亡びた時、楚の人は大に秦を怨み、楚は三戸といへども、秦を亡ぼすものは必ず楚ならん」と

いつた。秦の滅亡に當り楚人最もよく奮闘したのは、三戸云々の言の實現したものと云ふべきである。

我應神天皇の御代秦の後と稱するものが朝鮮より歸化し、秦氏といひ、蠶織の功があつた。秦氏は今も猶少くない。



秦の系圖



第六章 漢の統一

鴻門の會
漢王
西楚の霸王

漢楚の争 劉邦既に秦を滅し、政を寛にして民心を収めた。項羽後れて至り、その謀臣范增の言によつて劉邦を鴻門(咸陽の東)に撃たんとしたが、これを實行しなかつた。項羽は遂に其勢力をたのんで、擅(ホシイ)に群雄を分封し、劉邦には巴蜀(四)漢中(西陝)の僻地を與へて、漢王と稱せしめ、自ら彭城(蘇江)に都して、西楚の霸王と稱した。是に於て劉邦大に怒り、項羽を攻めんとし、秦の滅後の天下は、つひに漢楚の争となつた。劉邦は其武勇項羽に及ばなかつたが、よく民

漢の三傑

長安の都

心を收め、且つ蕭何、張良、韓信の三傑等を善用した結果、漢楚相戦ふこと四年に及んで、項羽の勢漸く衰へ、終に垓下(安徽)に敗れ、烏江(揚子江下流)に自殺し、劉邦は天下を一統して帝位に即き、長安(古の鎬京)に都した。これ即ち漢の高祖である。(四五九孝元天皇御。代西紀前二〇二)

明治天皇の御製

山をぬく人の力も敷島の心和心ぞもとるなるべき

項羽が垓下に圍まれた時、慷慨悲歌し、力拔山、兮氣蓋世。時不利兮、兮不逝、不逝。今可奈何、虞兮、虞兮、奈若何。といふや、左右の人泣きて能く仰ぎ視る者がなかつたといふ。騅は羽の駿馬にして、虞氏は其寵姫である。太田蜀山人項羽の歌を意譯して曰く、山を抜くべき刀も折れぬ。世を蓋ふべき袂も朽ちぬ。あはれ手弱女あわれ我が駒。

項羽の慷慨悲歌

子弟の分封

漢の高祖 高祖は微賤より起り、善く文武の人材を用ひて、天下を取つたが、晩年に至り、有爲の功臣を忌み憚つて、多く之を誅した。帝はまた秦の孤立して早く滅びたのに鑒み、子弟同姓を諸方に封じ

漢土・漢人

高祖の得意



(傳畫堂笑晚)王霸の楚西

傳はり、漢土及び漢人の名は支那及び支那人の別名となつた。て、帝室の藩屏とした。然るに諸王の地廣大に過ぎ、遂に諸王反抗の原因となつた。高祖の創めた漢朝は、多年支那を支配して、益々支那帝國成立の基を定め、其威名内外に振ひ、後世に

漢の高祖は天下一統の後故郷に歸り、故舊及び青年を招集して祝宴を開き、大



(傳畫堂笑晚)祖高の漢

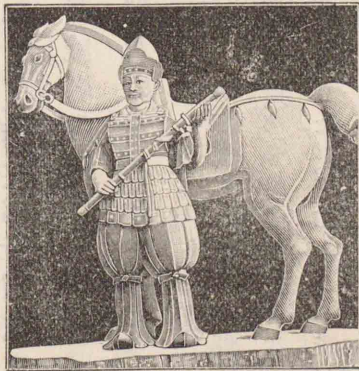
風起兮雲飛揚、威加海内兮歸故郷。安得猛士兮守四方。といふ歌をうたひ、百二十人の青年をして、之に和して合唱せしめた。得意の中に凛然たる元氣を存し、勝利に油断しないで、勝つて胄の緒をしめるの趣がある。之を前の項羽の「虞や虞や」の歌に比べると、彼は悲哀、此は雄壯、項羽は失意、高祖は得意、其對照は實に著し

兩雄の對照

い。更に兩雄を比較するに、項は其才を恃み劉は其才を恃まず、項の才氣は銳に過ぎ、劉の才氣は銳からず、項は一己の智勇に任じ、劉は天下の智勇を用ひ、項の度量の廣からず、劉の度量の廣かりしことは、兩雄成敗の分れた所である。

文・景二帝
仁君文帝

文帝・景帝 高祖死して、惠帝を経て、文帝及び其子景帝の世となつた。特に文帝は賢明の仁君で、深く民治に注意し、刑罰を寛にし、儉約を行ひ、農業を勵まし、屢の租稅輕減によつて、吏民安樂し、國庫も富裕となつた。ついで景帝の世には、當時既に漸く疎遠となり、且つ、漸く慢心するやうになつた。同族諸王の反抗を平定したから、漢朝統一の基礎は固く、中央政府の權力はいよいよ強くなつた。



彫木るせ寓を意の歌風大
(彫葉宗木三品出院術美國帝岡三第)

諸王反抗の平定

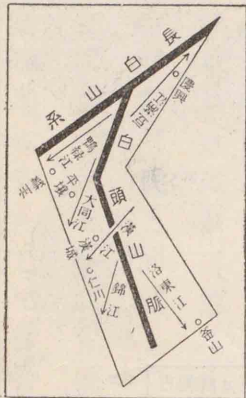
年號の始
在位五十四年

第七章 武帝の業 四夷の服屬

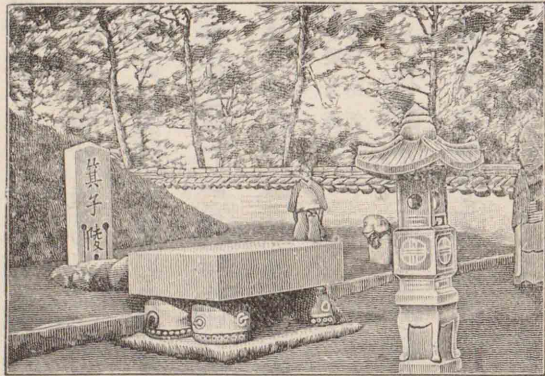
文武の功業 景帝死して、その子武帝嗣ぎ、始めて建元といふ年號を建てた(五二一開化)。帝は文景二帝の國家富裕時代の後をうけ、在位五十四年、文武の功業甚だ多い。文教の事は之を後の章に譲り、まづ漢人の武威を輝したる四方征服の事を述べやう。

箕氏と古朝鮮

古朝鮮征服 漢の東には古朝鮮がある。古朝鮮は周の初め殷の王族箕子の封ぜられた國で、今の大同江と遼河との間の地を占め、箕氏は

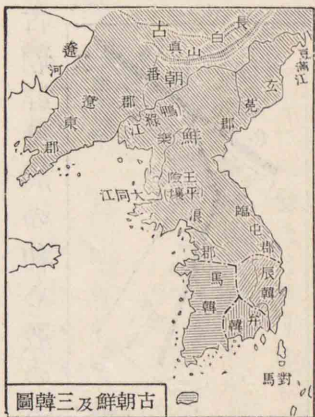


を占め、箕氏は



(眞寫)(壤平鮮朝) 陵の子箕

武帝の古朝鮮征服



三韓

和・韓・漢の交通

南方發展

つひに今の平壤に都したが、漢の初に至り、燕人衛滿來りて其國を奪つた(四六)武帝の時、その孫右渠は漢の吏將を殺せしにより、武帝は之を征服して(五五三開化)其地に漢の四郡を置いた。時に半島の南部には、馬韓(京畿忠清南北全羅の五道地方)、辰韓(慶尙南北二道地方)、弁韓(慶尙南部道)の三韓があつて、漢と三韓との關係漸く起り、三韓と交通した我國人と漢との交通も亦従つて開けた。かくて朝鮮の土地は我國と支那との中間にあつて、日支關係の事件頗る多く、文物の傳播も亦少くなかつた。

南越征伐 曩に秦の始皇帝に征服せられた南越は、秦末の亂に際して獨立したが、武帝は其内訌に乗じて之を征服し、漢の勢力を南方に擴めた。

匈奴征伐 北方の匈奴は漢の大敵である。是より先き匈奴は秦の

匈奴の冒頓單于

武帝の雪耻

衛・霍二將軍

武帝の遠交近攻策

勢を避けて、一時遠く北方に退いたが、漢の初、匈奴の單于(王號)の冒頓バクツンといふ豪傑があつて、支那北邊一帶の地を併せ、屢、漢に入寇した。高祖嘗て之を親征して敗れ、屈辱的の和親を結んでから、匈奴は益、漢を侮るやうになつた。武帝は之を慨き、匈奴を撃ち攘つて、祖先と國民の耻を雪がんと欲し、屢、大軍を發して之を伐ち、終に内蒙古の地を取つた。衛・青・霍・去・病は時の二大將軍で、霍去病の如きは、匈奴滅びずんば、家を以て爲すことなかれ。といひ其意氣特に盛であつた。

張騫の遠使 是より先き、漢の西北に月氏といふ種族があつて、匈奴に攻め逐はれて、遠く中央亞細亞に走り、新に大月氏國を建てた。武帝は大月氏と同盟して、匈奴を挾撃せんことを圖り、堅忍寛大にして又探險に長ぜる張騫をして大月氏に使せしめた。時に大月氏は新領地に安んじて、復讐の志なきを以て、張騫は目的を達せずし

民力休養

中興の良主

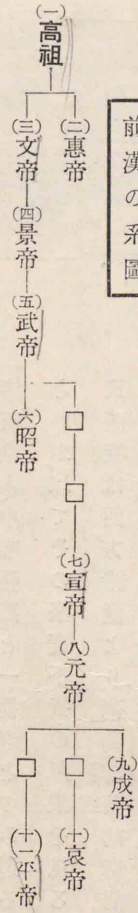
西域都護の初任

漢の勢力範圍

とて、英主の名に負かないものである。帝死して昭帝、宣帝相嗣ぎ、ともに民力の休養を力めた。特に宣帝は賢相良吏を選び用ひて善く國を治め、中興の良主と稱せられた。

宣帝は又武帝の業をつぎ、烏孫を援けて、大に匈奴を破つた。是より匈奴大に衰へ、匈奴の衰へるに従ひ、西域諸國の多くは漢に服したから、鄭吉を西域都護に任じ、烏壘城(天山南路)に於て、之を監督せしめた。(六)而して匈奴も後つひに漢に降つた。武帝以來の征伐によつて、漢の勢力範圍は大に擴張し、東は朝鮮より西は天山南路に達し、北は内蒙古より南は安南地方に及び、四夷の服屬甚だ多くなつた。

前漢の系圖



第八章 前漢の衰亂 後漢

王莽の偽善
漢の中絶

王莽の篡奪 宣帝以後の天子は、概ね平凡であつて、漢の國威は衰へた。第十一世の平帝の時、外戚王氏の一族が專横となり、中にも王莽は奸才に富み、巧に恭儉を装つて、人望を收め、つひに平帝を弑して、自ら帝位に即き、國を新と號し、漢は一旦中絶することとなつた。(六六八垂仁天。皇御代、西紀八)

劉秀の威望
洛陽の都

漢の再興 されども人心は未だ漢を去らず、王莽は即位の後、急に諸制度を變更し、租税を重くしたから、不平の群雄四方に起り、王莽は忽ち敗死した。新の國運は僅に十五年である。時に群雄中、漢の皇族劉秀の威望最も高く、遂に推されて帝位に即き、都を洛陽(古の洛陽の都)に奠め(五六八)、群雄を平定して、天下を一統した(六九六垂仁。天皇御代)。これが即ち後漢の光武帝である。

我國の九州と後漢

光武帝の政治

漢運再盛



漢の委奴國王の印

の章に述べる。

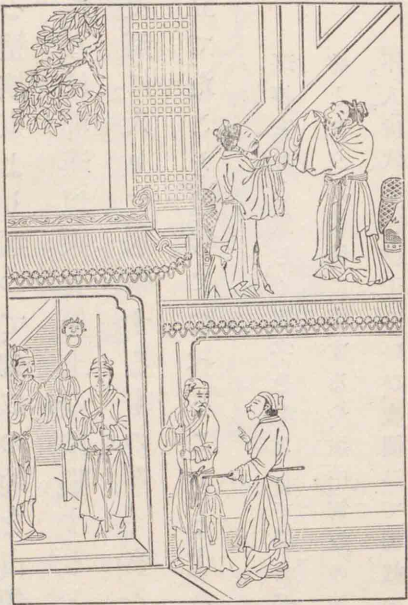
然れども第四世の和帝以後の諸帝、多くは幼弱で、又平凡であつたことは、ちやうど前漢の末路のやうであつた。而して宮中の宦官の専横となるや、節義を重んずる名士等は、盛に之を攻撃したので、宦官を信任したる天子は怒つて此等の士人を獄にいれたり、又官吏に採用せぬやうにした。かやうにして、漢の政治は亂れ、國威は漸く

今より約百五十年前(天明四年)筑前國博多灣頭の志賀島に於て漢委奴國王の金印(方八分弱)を發掘した。これは我九州地方の酋長が後漢の光武帝より受けたものであらうと言はれて居る。此印今は黒田侯爵家に保存せられてゐる。

後漢の盛衰 光武帝は天下平定後は、専ら内治に注意し、節義を勵まし、人民を休ませた。明帝、章帝も、亦よく其遺業をつぎ、漢の國運また盛となり、漢と諸外國との交渉事件相ついで起つたが、それは次

衰へた。

楊震は後漢の名士である。其性極めて廉直、かつて郡守となるや、ある夜、人あり金を贈り、暮夜知る者なしといひて、金を受けんことを勸めた。楊震は、天知、地知、子知、我知、何謂無知といひて、之を却けた。楊



楊震賂却の像(聖像)

震の四知といつて名高い。

をろかなる身を天地に耻ぢもせで心の知るを何かくすらん

宗 祇

第九章 西域との交通 印度 佛教の東流

後漢の外征 さきに、漢に歸服した匈奴は、王莽の時また叛いて北邊に入寇した。當時匈奴は南北二部に分れ、南匈奴は早く後漢に降つたが、北匈奴は西域諸國を従へて漢に反抗したので、明帝は遂に

楊震の四知

南北匈奴

西域都護の適任

匈奴の西方移轉

班超の奮發

寶固等をして之を征伐させ、又武帝時代の政策を用ひ、智勇兼備にして、眞實の情に富める班超を遣して、西域諸國を經略させた。班超の遠征匈奴の衰微 班超西域に遠征し、漢の恩威を示して、西域諸國を漢に歸服せしめ、やがて西域都護となつて、龜茲(天山南路)に在任した。是より北匈奴の勢衰へ、つひに遠く西亞のカスピ海方面に逃れ去り、匈奴の患こゝに止んだけれども、鮮卑(蒙古滿洲兩種の混合種なるべし)と稱する蠻族東より遷つて、匈奴の地を占領し、亦漸く北邊の強國となつた。なほ前漢以來其領土の擴張するとともに、西北二方面異民族の支那に入りて、居留するもの漸く多く、つひに其住地によつて國を立てたことは、後にのべることとする。

班超家もと貧しく、寫字を業として居たが、一旦奮發して筆を投じて寶固の部將となり、其西域に使用するや、途中、匈奴の使者の所在を聞知し、部下を激勵して「不入虎穴、不得虎子」といひ、夜襲ひて匈奴の使者を攻め殺した。この大膽冒險の

班超の兄妹

世界の二大帝國

羅馬の使者
西洋人の東洋通商
支那の輸出入品



班超(無雙譜)

勇氣に恐れて、西域諸國は、たやすく彼に服従した。而して彼は西域にあること三十餘年、其武功甚だ大であつたが、班超の兄班固は文章と修史に長じ、妹班昭は婦徳と文學を以て有名であつた。

東洋と西洋との交通 この頃、西洋に於ては、羅馬帝國は勢力を振ひ、東洋の漢と相對して、世界の二大帝國であつた。班超は羅馬の強大を聞き、部將の甘英をその國に派遣した。甘英は波斯灣のほとりまで往つたけれども、航海の困難なるに恐れて中止した。されども後漢の末に至り、羅馬帝安敦(Antonine)の使者は、海路より支那に來り(八二六成務天皇御代、西紀)、その後、西洋の商人は今の東京地方に來りて、貿易を行つた。

當時支那人の輸入品には、珠玉、瑠璃、琥珀等があり、其輸出品の主なるものは絹であつた。西方の人は支那の絹を變製して輕紗、薄羅となし、大に羅馬の富民に嗜好珍重せられ、一時は絹と黄金と同一の重量を以て貿易され、羅馬に於ては、

印度の古今

古代の印度 印度は亞細亞大陸南方の一大半島で、支那とともに世界の最舊國の一である。

今や印度は英國主權の下にあつて、その統治をうけて居るけれども、その歴史にさかのぼれば、むかしは世界文明の一方の巨頭で、四方に文化の光を放ち、東西の諸國より崇敬された先進國の一であつた。

支那と印度

今より四千年前にアリア人種一派は、中央亞細亞より南して印度に入り、土人を征服して國を建てたことは、支那の上古漢人が苗族を逐つて國を建てたと同じ様である。かくて古代印度には優勝のアリア人と劣敗の土人混住し、婆羅門教と稱する宗教行はれ、國民は僧族、王族、平民、奴隸の四種姓に分れ、種姓の階級區別が嚴重で、最高の僧族は自ら尊び人を卑しめ、宗教と學術とを掌つて、專横貪

印度の四種姓

衆生の希望

慾を極め、他の三種姓は其壓制に苦しみ、世を救ふ聖人の出て、宗教を革新せんことを希望して居た。

世界三聖の一

釋迦牟尼佛 この時、世界三聖の一人たる釋

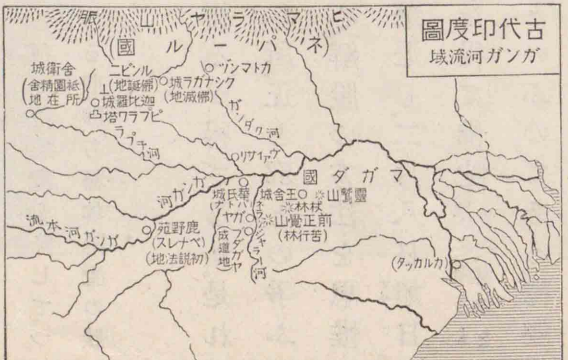
迦が生れた(代、西紀前五六四頃)其本姓名を喬答摩Cautama悉達Siddhartaといひ、もと中印度迦毘羅城(今のネパール地方)主の王子である。深く社會の腐敗と人生の無常と

に感じて、衆生濟度の念を起し、つひに王宮を出て山に入り、難行苦學すること六年、さらに山を出て、中印度の摩揭陀國に至り、眞正の解脱ダツクに到達するは必ずしも苦行に由らざることを自覺し、今の佛陀迦耶Buddha Gayaに來つて、菩提樹

出家の釋迦

下の金剛座に靜坐して念を凝らし、若し正覺シヤクガクを得ねば、誓つて此座

を去らずと決心した。



光と闇の分るる所

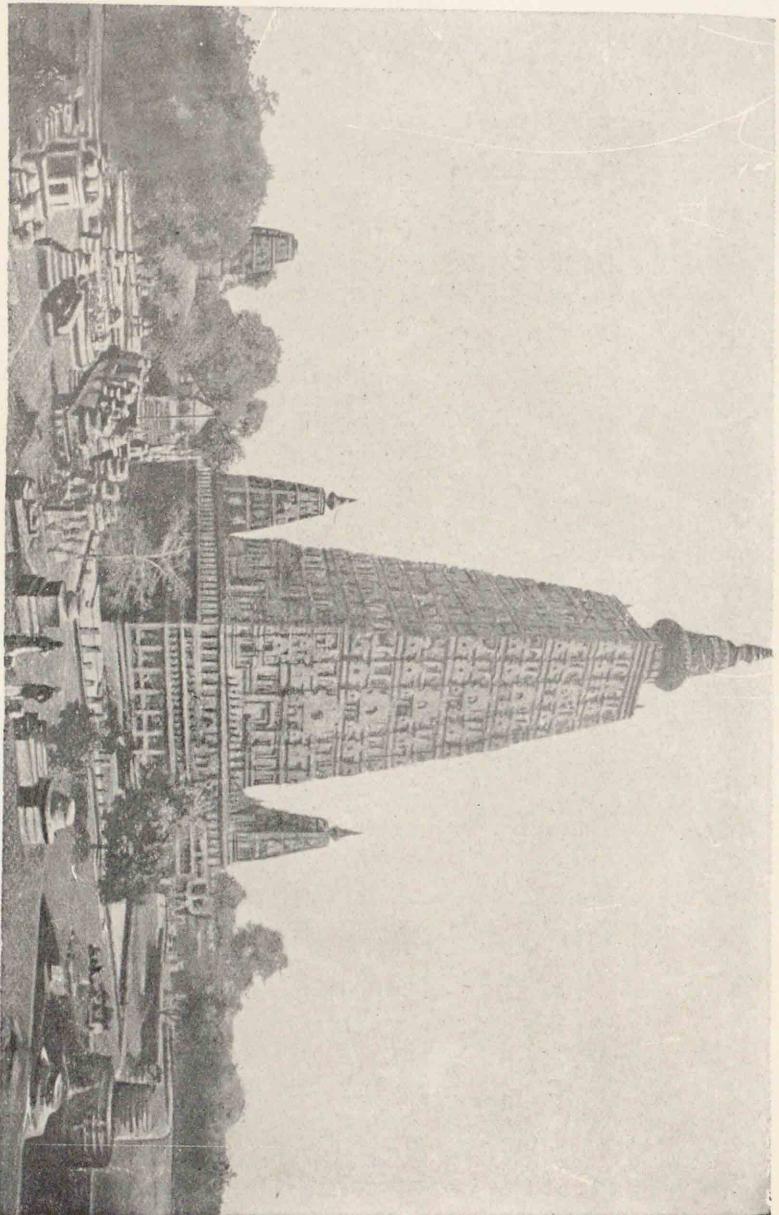


釋尊成道圖

印度ボンベイの東北約三百五十哩のアジャンタ(Ajanta)に洞窟の精舎がある。西紀前第二世紀頃より西紀後第七八世紀に至るまでの築造であるといふ。本圖は其一洞窟の壁畫で釋尊がその成道を妨げんとする種々の惡魔を降して、つひに大悟成道せんとする狀、即ち釋尊降魔の狀を畫いたものである。

あゝ釋迦は正覺を得るか得ざるか。是れ即ち善と惡との戦ふ所、正と邪との争ふ所、光と闇との分るる所である。釋迦は一意専心、解脱の方法を思惟し、精神上の鐵鎚をもつて、一切煩惱の惡魔を撃退し、二月八日旭日の光彩のほのめく頃、つひに廓然大悟し、正覺を得て佛陀(單に佛ともいふ、眞理をも悟つた)となられた。之を成道(シヤダウ)といひ、其教を佛教といふのである。釋迦

成道又は成佛



塔高の場靈の佛成悟大尊釋

釋尊大悟成佛の靈場

この靈場は、今の印度のベンガル州のガヤ市の南方三里許の佛陀迦耶 (Buddha-Gaya) にある。釋尊の靈場は印度に多いが、第一はこれである。釋尊は此靈場の菩提樹下の金剛座に端坐し、沈思默念の末、廓然として大悟し、佛陀となられた。圖中の高塔は此古蹟に建立したもので、其起源は遠く二千一百餘年前の阿育王(釋尊死後二百年許)の時にあるが、近世緬甸王及び英國人はこれを修復再興した。高さ百七十尺許、基址の一邊五十尺許である。
釋尊大悟の時は、其年三十五歳の二月八日、四月八日は釋尊の誕生日である。傳へられて居る。

一切平等

釋迦も人なり
我も人なり

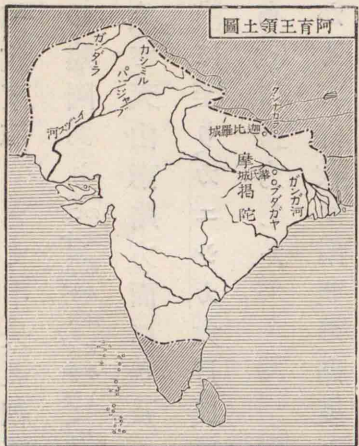
阿育王と佛教の
傳播

は成道の後、四十餘年諸國を巡つて説教したが、一切平等を唱へ、種姓の差別なく、正道を行へば、皆成佛することを得べしと説いた故、從來僧族の壓制に苦しめられた諸種姓は、喜んで佛教に歸依した。

釋迦の歿したのは、皇紀一七七年頃(西紀前四八四年頃)で、孔子の歿した年より僅に五年前であるから、釋迦と孔子とは、殆ど同時の二大聖人であつた。

釋迦もまたあみだもとは人ぞかし

我もかたちは人にあらずや 一休和尚



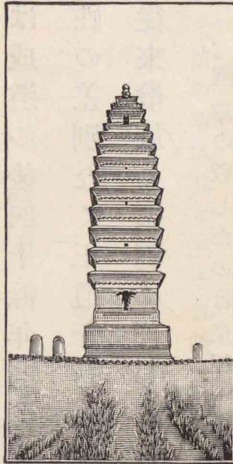
所、北は中央亞細亞より、南は錫蘭島に至り、西はシリアより、東は緬

大月氏のカニシカ王

後漢の明帝佛敎を大月氏に求む

白馬寺

匈奴に達するやうになつた。
佛敎東傳 さて中央亞細亞には、阿育王より約一百年の後、大月氏の建國あり(二十九ベリ前漢の武帝の條をみよ)、其領土つひに中亞より西北印度に連り、兼て天山南路方面にも及んだ。阿育王以後佛敎漸く行はれたが、後漢に至り、カニシカ大月氏に王たるや、また大に佛敎を信仰し、その布敎に盡力した。
かくて佛敎は南亞の印度より中亞へ、中亞より東亞に傳はるやうになつた。



洛陽白馬寺の雲塔

時に後漢の明帝は大月氏國に於ける佛敎の事を傳聞し、**蔡愔**を遣して佛敎を求めしめた。蔡愔大月氏より高僧を伴ひ、佛像經論を携へ歸り、明帝は白馬寺をたてた。七二七垂仁天皇御代西紀六。是より佛敎は漸く支那に流行

印度僧の譯經

武帝の儒敎文學の獎勵

し、また本邦にも傳來して東洋の**大宗敎**となつた。

蔡愔とともに支那に來た中印度人迦葉摩騰と竺法蘭は、白馬寺に於て佛經を漢譯した。これが支那に於ける譯經の始である。

第十章 兩漢の文物

前漢の文物 秦の燒書坑儒の暴政、及び其後の戰亂により、古典大に散亡して、學術の發達は、大に妨害されたが、漢の統一後、文教漸く再興した。特に武帝は、儒敎を好み、大學を興し、五經博士を置き、儒敎を以て國家政敎の標準とした。帝また文學を好み、之を獎勵した。

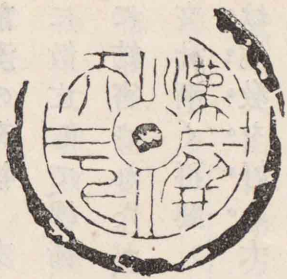


武帝の經典表彰(欽定華事略)

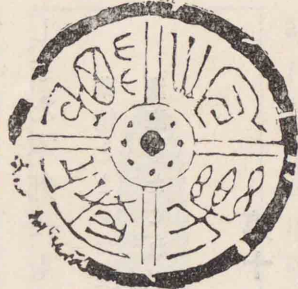
司馬遷の史才

當時の文豪司馬遷の著はしたる史記は、後世歴史の模範となつた。又高祖の時以來諸宮殿を建て、建築の術も漸く發達した。後漢の文物 光武帝は武功を以て漢朝を再興したが、國既に定つては、妄に武功を貪らず、學校を起し、特に名節を勵ました。明帝、章帝も亦儒を尊び學を重んじたから、後漢の學術は頗るすすみ、清節の士も亦多かつた。

名節獎勵



漢宮の瓦文 (右) 漢并天下 (左) 長樂萬歲



筆紙の改良發明

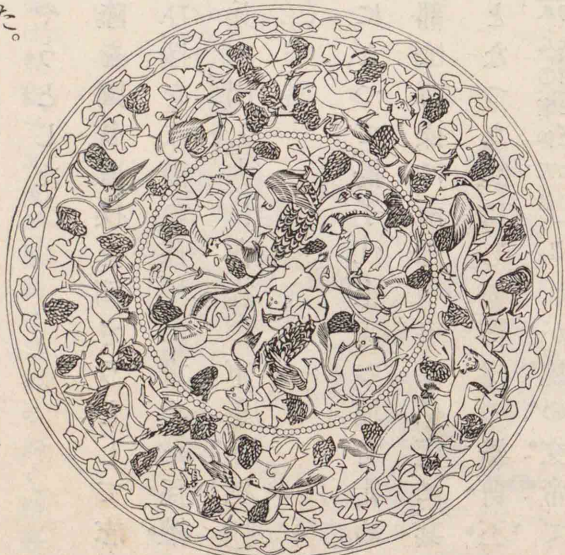
是れより先き秦以前既に墨があり、秦の蒙恬始めて毛筆を精製したが、後漢に至つて蔡倫は工藝思想に長じ、古來寫字の用に供した木板竹簡及び絹帛の類を不便不廉なりとし、始めて紙を製した。是に於て文房具漸く備はり、文化の普及を助くることとなつた。

漢人の忠孝一致説

章帝の時詔して人材貢舉を議せしめた。章帝は議して「求忠臣必於孝子之門」といひ、帝に納れられた。

三文明の近接 次に漢代には

佛教の東流があり、且つ前漢の武帝以來、支那と西方諸國との交通があり、後漢に至つては、支那と西洋との交渉が起つたから、ここに支那、印度、西洋三文明接近の一端を見るやうになつた。



(鑑古清西)鏡銅青の代漢の草唐葡萄の響影的臘希

第十一章 三國 晉の統一

後漢の滅亡 第八章にのべた如く(三四頁参照)後漢の國威は漸く衰へ、後

曹操の智略

劉備の大志

諸葛亮の忠武
孫權の意氣
赤壁の戰

天下三分

漢復興より約百八十年後の中央政府は、益、亂れて、國內の人心大に動搖し、賊徒諸方に起つた。是に於てか、或は賊をうち、或は宦官を誅するを名として、群雄相ついで起り、天下又亂世となつた。中にも曹操は奸雄の智略に富み、後漢最終の獻帝を擁して、黄河の南北を征服し、ついで江南の地を併呑しやうとした。

時に漢の王族劉備は、漢室の興隆を圖り、曹操を倒さうとして志を得ず、遂に忠臣諸葛亮の策に従ひ、援を江南の孫權に求めた。孫權意氣を以て相感じ、これに應じて兵を出し、大に曹操の軍を赤壁(北湖)に破つた(八六八應神天皇御代)。

かくて劉備は更に孫權の後援によつて、揚子江上流の地を定めて之に據つた。是に於て支那の北部は曹操に、南部の東は孫權に、其西は劉備に屬して、天下三分の勢となつた。既にして曹操の子曹丕は、終に獻帝を廢し、洛陽に都した(八八〇應神天皇御代、西紀二二〇)。これが魏の文帝であ

三國鼎立

關帝廟

る。漢は前後併せて四百六年にして滅びたのである。

ついで劉備は成都(四)に都して、帝位についた。即ち蜀漢の昭烈帝となつたのである。やがて孫權も建業(江蘇、今南京)に都し、吳の大帝と號した。此三國の立國は、鼎(カネ)の足に似たるによつて、歷史上三國鼎立といふて居る。



(開紀俗清) 像帝聖關

●劉備は關羽及び張飛を親友とし、名は君臣であるが、恩義は兄弟の如く、始終苦樂を共にした。關羽は特に忠誠を以てあらはれ、後世武運の守護神として感靈著しく、又幸福の神として崇拜され、これを祭れる關帝廟は支那全國到る處にあり、朝鮮人も亦之を信仰した。

三國の鼎立 蜀漢・吳・魏の三國相争ふこと五十年ばかり、人材頗る

鼎立の形勢

司馬懿の防戦

草廬三顧

水魚の交

出師の表

多く出た。蜀漢の地は最も小であつたが、諸葛亮の忠武によつて、能く魏・吳の二國と並び立ち、よく鼎立の勢を作つた。而して昭烈帝はつひに其志を得ずして死し、諸葛亮は遺詔を奉じて、後主劉禪を輔け、必ず漢室を恢復せんとして、魏を伐つたが、魏は依然として最も強く、其將司馬懿よく防ぎしによつて、諸葛亮もまた其志を達せずして終つた。



諸葛亮 (像畫堂笑晚)

○諸葛亮字は孔明、もと今の山東省の人である。臥龍の名は天下識者の間に高かつた。劉備は其草廬の中に三顧して之を臣とし、君臣の情誼極めて親密、所謂水魚の交の關係であつた。征魏の軍に臨んで上表した前後二回の出師の表は誠忠懇切の文にして、之を讀んで泣かない者は忠臣に非ず。との評がある。孔明は又兵法に長じ、

諸葛もまた書生

司馬氏の勢

西晉の武帝

忠武侯の諡あるは偶然でない。其陣中に歿するや、魏の兵は退却の蜀軍を追撃したるに、蜀軍は少しもさわがず、將に之に向はうとした。魏兵は恐れて敢て迫らなかつた。よつて時の百姓は「死諸葛走生仲達」といふ諺を作つた。仲達とは魏の將司馬懿の字である。

明治天皇御製 龍の臥す岡の白雪ふみわけて草の廬を訪ふ人や誰
驚も雪の古巢をいでめやも聲をきゝする人のとはずば 加藤千浪

諸葛武侯

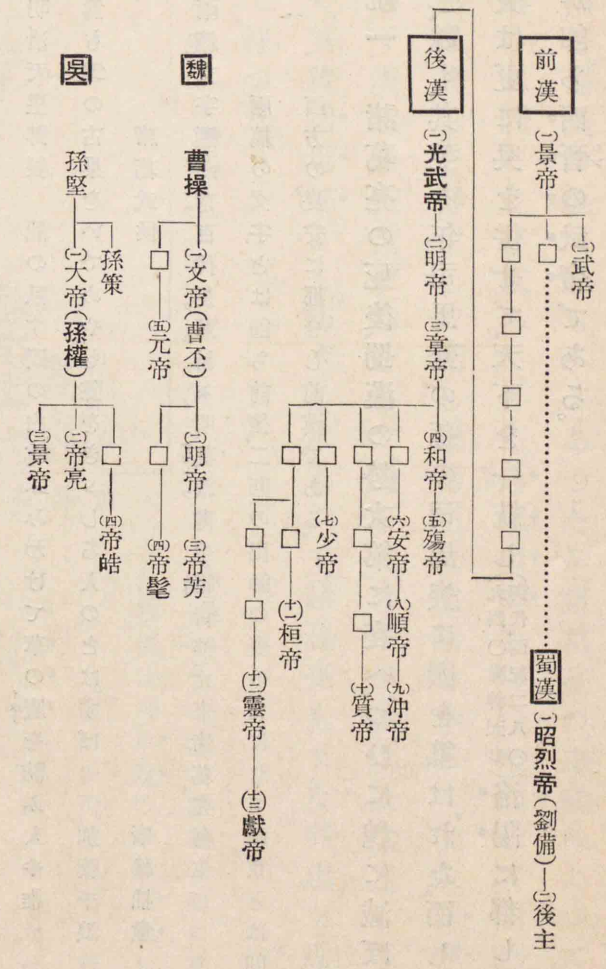
齋藤拙堂

兩篇、文字壓西京、百代長懸、赫々明莫、謂書生暗時務、元來諸葛亦書生。

兩篇の文字とは即ち前後二回の出師の表の文にして、西京とは即ち西方の長安に都せし前漢である。

晉の統一 諸葛亮の死後、蜀漢の勢次第に衰へ、つひに魏に滅ぼされ、魏も、其翌々年司馬懿の孫の司馬炎に國を篡はれた。而して司馬炎は更に吳を併せて、天下を一統し、洛陽に都した。これが即ち西晉の武帝である。

後漢と三国の系圖



同	同	孝元	同	同	同	孝靈	孝安	同	懿德	同	綏靖	同
四六七	四五九	四五五	四四六	四四〇	四〇五	三九三	二九〇	一八三	一七七	一〇九	九七	
一四九	二〇三	二〇六	二二五	二二二	二五六	二六八	三七二	四一九	四四四	五五三	五五四	
衛滿古朝鮮王となる	項羽自殺、漢の高祖の天下統一	秦の精製あり	秦の蒙恬匈奴を征す、長城増築起工	秦の天下統一	周亡ぶ	阿育王マガダ國王となる	孟子生まる	孔子死す	釋迦死す	孔子生まる	釋迦生まる	
同	同	同	同	同	同	同	應神	景行	同	同	同	同
九四〇	九三五	九三三	八九四	八九九	八八一	八八〇	八六八	七五二	七三七	七〇〇	六八五	
西晋の武帝(司馬炎)の天下統一	蜀漢亡ぶ	蜀漢亡ぶ	諸葛亮(孔明)死す	吳の孫權帝を稱す	蜀漢の劉備帝を稱す	魏の時紙の發明あり	魏の曹丕篡立して後漢亡ぶ	赤壁の戰	班超西域都護となる	佛教始めて支那に傳來す	大月氏のカニシカ王即位	後漢の光武帝即位元年

上古史摘要年表

(本系の左傍に括弧を附して、匈奴及び鮮卑と記せるは、匈奴は秦より後漢に互り、鮮卑は後漢の末より西晉に互りて、史上にあらはれたる事を示すものである。)

太古…黄帝…帝堯…帝舜…夏…殷…周…秦…前漢…新…後漢…三國(應神天皇御代)

匈奴 鮮卑

年	代	重要事蹟
皇紀	西紀	
前二四〇頃	前二七〇頃	黄帝君臨
一六〇頃	二三四頃	帝堯即位
一六〇頃	三三六頃	帝舜即位
一五四頃	三三〇頃	夏興る
一一〇頃	一七六頃	夏亡び殷興る
四六〇頃	一一二〇頃	殷亡び周興る
同	同	殷の箕子古朝鮮の王となる
同	同	周の東遷春秋時代始まる
二〇	七〇	齊の桓公の覇業全盛
後	後	
一〇	六五	釋迦生まる
九七	五三	孔子生まる
一七	四四	釋迦死す
同	同	孔子死す
同	同	孟子生まる
孝安	三七	阿育王マガダ國王となる
孝靈	二六	阿育王マガダ國王となる
同	四五	周亡ぶ
皇紀	西紀	
四八二	一七	漢文帝元年
五二	一四	漢武帝即位元年
五五	一三	張騫西域より還る、東西文物の交換漸く起る
五五三	一〇	武帝古朝鮮を平ぐ
五七〇頃	九	司馬遷の史記成る
同	同	新羅の建國
六〇四	五	高句麗の建國
同	同	百濟の建國
六四三	一	王莽の篡立
同	同	後漢の光武帝即位元年
六六八	八	大月氏のカニシカ王即位
同	同	佛敎始めて支那に傳來す
同	同	班超西域都護となる
同	同	赤壁の戦
同	同	魏の曹丕篡立して後漢亡ぶ、後漢の時紙の發明あり
同	同	蜀漢の劉備帝を稱す

上古史摘要年表

(本系の左傍に括弧を附して、匈奴及び鮮卑と記せるは、匈奴は秦より後漢に互り、鮮卑は後漢の末より西晉に互りて、史上にあらはれたる事を示すものである。)

太古…黄帝…帝堯…帝舜…夏…殷…周…秦…前漢…新…後漢…三國(應神天皇御代)

匈奴 鮮卑

年	代	重要事蹟	年	代	重要事蹟
皇紀	西紀	黄帝君臨	皇紀	西紀	漢文帝元年
前二〇四頃	前二七〇頃	帝堯即位	四八二	一七九	漢武帝即位元年
一六〇頃	二三四頃	帝舜即位	五一	一四〇	漢武帝即位元年
一六〇頃	二六〇頃	夏興る	五三五	二二	張騫西域より還る、東西文物の交換漸く起る
一五四頃	二〇〇頃	夏亡び殷興る	五五三	一〇八	武帝古朝鮮を平ぐ
一〇〇頃	一七六頃	殷亡び周興る	五七〇頃	九一頃	司馬遷の史記成る
四六〇頃	一二〇頃	殷の箕子古朝鮮の王となる	六〇四	五七	新羅の建國
同	同	周の東遷(春秋時代始まる)	六四	五七	高句麗の建國
一一〇	七〇	齊の桓公の覇業全盛	六四三	三	百濟の建國
九七頃	六五一頃	釋迦生まる	六六八	八	王莽の篡立
一〇九	五五三	孔子生まる	六八五	三五	後漢の光武帝即位元年
一七七頃	五四四頃	釋迦死す	七〇〇頃	四〇頃	大月氏のカニシカ王即位
一八二	四七九	孔子死す	七三七	六	佛教始めて支那に傳來す
二九〇頃	四七一頃	孟子生まる	七五一	九	班超西域都護となる
三九三頃	三七一頃	阿育王マガダ國王となる	八六八	二〇八	赤壁の戰
四〇五	二六八頃	周亡ぶ	八八〇	三〇	魏の曹丕篡立して後漢亡ぶ、後漢の時紙の發明あり
同	二五六	秦の天下統一	八八一	三二	蜀漢の劉備帝を稱す
同	三三一	秦の蒙恬匈奴を征す、長城増築起工	八八九	三三	吳の孫權帝を稱す
同	四四〇	秦亡ぶ、秦の時文字の改良及び筆の精製あり	八九四	三三	諸葛亮(孔明)死す
孝元	四五五	項羽自殺、漢の高祖の天下統一	九三三	二六	蜀漢亡ぶ
同	四五九	衛滿古朝鮮王となる	九三五	二六	司馬炎篡立して魏亡ぶ
同	四六七		九四〇	二八〇	西晉の武帝(司馬炎)の天下統一

第二編 中古史

(皇紀九百年代より一千八百九十年代西紀)

第一章 胡族の侵入

東西同様

上古の末に當り、東に後漢あり、西には羅馬ありて、世界東西の二大帝國であつたが、其末路はともに分裂の非運に陥つた。支那に於ては晉はよく天下を統一したが、畢竟一時の事に過ぎず、分裂の形勢は依然として存し、彼の西洋中古史の初には諸蠻族の移轉があり、我東洋中古史の初にも胡族の侵入ありて、東西殆んど同様である。

五胡十六國

晉の武帝は天下統一の後、魏の早く亡びたことに鑒み、子弟を封じて、帝室の藩屏としたが、其子惠帝の愚なるに乗じ、諸王八人政權を争ひて、骨肉互に相害した。然るに當時の士人は漢末名士の災難に懲り、所謂清談に耽り、名教を卑み、世務を輕んじて、眞

天下分裂の形勢

八王の争

清談の流行

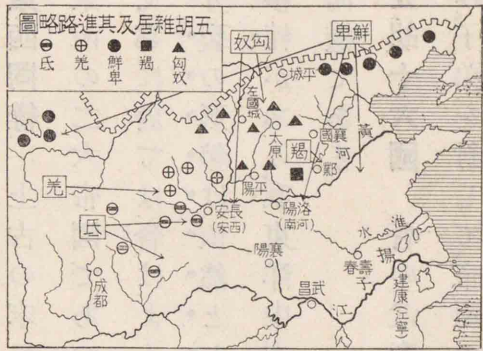
異人種の侵入

匈奴の再興

東晉の興起

北西二方面の嵐

五胡十六國



に國事を憂ふる者少かつた上に、晉初地方の武備を弛めたから、晉の國威漸く衰へ、漢魏以來支那内地に雜居した異人種は、漸く侵略の野心を起した。中にも南匈奴は早く北支那に移り、漢の姓の劉を稱して居たが、晉の衰ふるや、其酋長劉淵は兵を起し、平陽(山西)に據りて、國を漢と號し、其子劉聰に至り、晉を攻めて之を滅した。是に於てか、司馬懿の曾孫司馬睿は位に建康(建業)に即き、僅に江南の地を保つた。これが東晉の元帝である。東晉の初名臣王導等熱心に恢復を圖つたが、内亂等の爲に成功しなかつた。これより支那の北部と西邊は、異人種の侵略益甚しく、西晉の末から支那に侵入した異人種は五種(匈奴、羯、鮮卑、氐、羌)にして、列國の興亡したものの十六ありしによつて、五胡十六

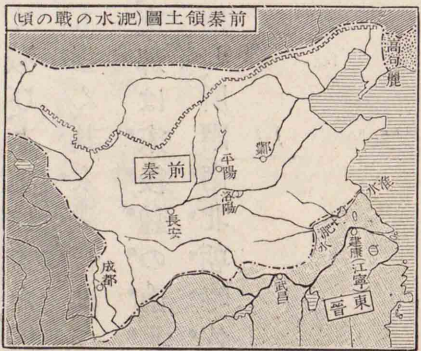
國といつた。

前秦の苻堅の大望
謝玄の奇勝
人和の有無



(像畫堂笑晚) 安 謝

淝水の戰 晉の南遷より五十年許の後、苻堅は長安に都せる前秦(種)の君主であつた。五胡中の雄傑にして、王猛を重用し、江北諸國を併せ、東夷西域の諸國をも征服したから、更に進んで江南の東晉を滅して、天下を一統しやうと思ひ、九十萬の大軍を擧げて、東晉に侵入した。東晉の名相謝安の姪、謝玄等は、之を淝水(徽)に逆へ撃つて、大勝利を得た(四三)。當時の東晉の兵は少かつたが、上下一致して、人和を得て居たのに反して、前秦の苻堅は自國内部の完全なる統一を圖らず、九十萬の大軍であつたけれども、人和を缺きしが上に、敵を輕んじ、



宋の武帝

後魏の太武帝

南北對立

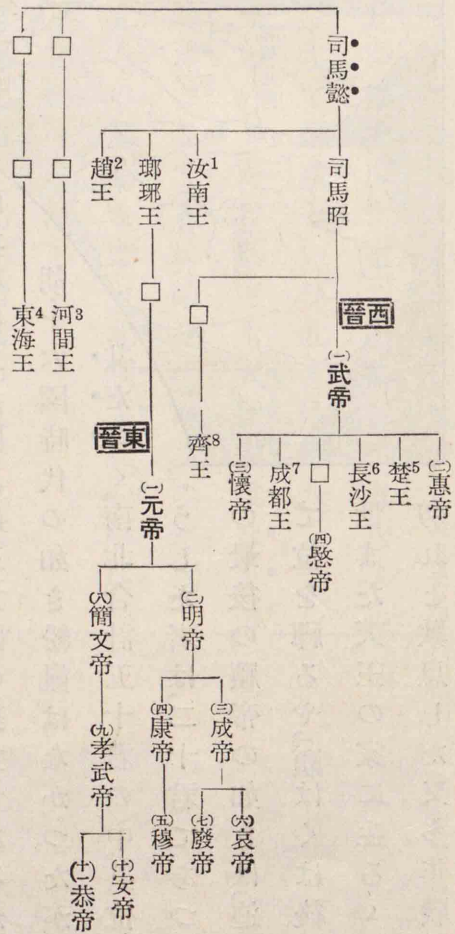
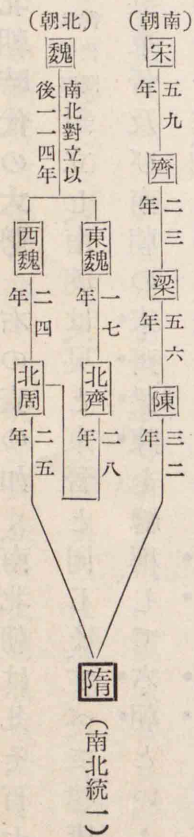
つひに意外の大敗を招いたのである。
東晉の滅亡後魏の勃興 東晉は淝水の戦に勝つたが、年來の衰弱は、到底之を恢復し難く、且つ内亂相ついで起り、劉裕は之を平定し、また外征の功があつたので、遂に自立して帝位に即き、又建康に都した(紀一〇八〇、西、紀四二〇〇)。これが宋の武帝である。晉は凡そ十五帝、百五十六年にして亡びた。

次に江北に於ては、淝水の戦後、前秦は間もなく滅び、其地はまた四分五裂したが、今の山西地方の後魏(鮮卑)の勢最も強く、其太武帝は、つひに江北諸國を一統した(紀一〇九九、西、紀四三九九)。是に於て、支那は宋、後魏の南北二國に分れ、江南を南朝といひ、江北を北朝と稱し、所謂南北朝時代ここにあらはれた(允恭天、皇御代)。

晉の系圖

(1より8は所謂八王なり)

第二章 南北朝 隋の統一

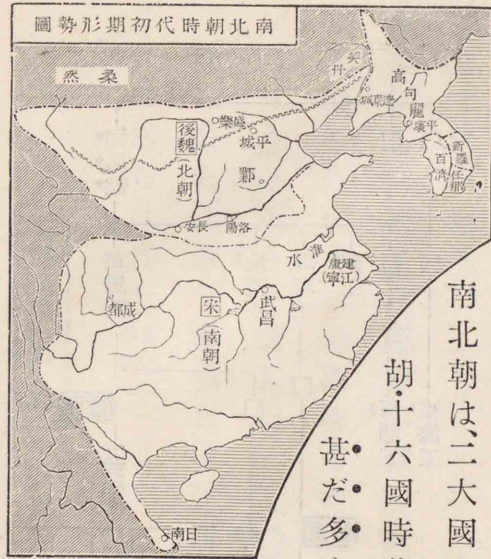


六朝

南北朝帝王の不幸

天子の歎息

南北朝時代の**大勢** 右の表の如く、南北朝は凡そ百七十年間（允恭天皇御代間）對立し、南朝は、吳と東晉と同じく、すべて建康に都したから、**吳・東晉**及び南朝の**宋・齊・梁・陳**を總稱して**六朝**といふ。北朝の後魏は初め平城（山西）に都し、後洛陽に遷り、東魏と北齊は鄴（河南）に、西魏と北周は長安に都した。



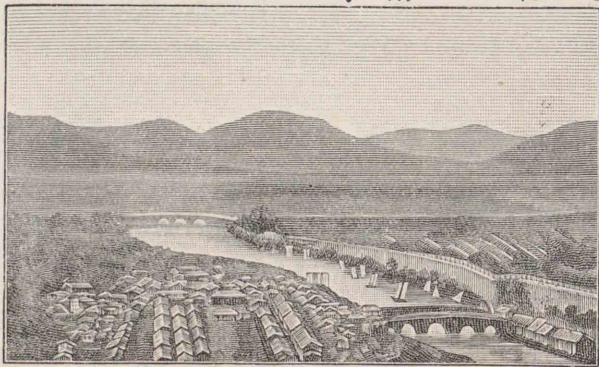
南北朝は、二大國又は三大國の對立であるから、五胡十六國時代の如き紛亂はなかつたが、廢弒甚だ多く、南北合計五十君の中、其位を全うした者は、二十君であつた。宋の最後の順帝の如きは、迫られて位を禪るや、願はくは後身世また天王の家に生るゝこと勿れと歎息した。又多年戰亂の

南柔北剛
北人の勝利

後魏の孝文帝の漢風模倣
國粹輕蔑の弊

結果として、全國の戸口頗る減少した。また南北互に相排斥すること甚しく、南人は北人を呼んで醜虜といひ、北人は南人を呼んで島夷といつた。けれども、大體優柔なる南人は、剛健なる北人に敵せず、南北の對抗は、漸く北人の勝利となり、北朝系統の隋は、終に天下を統一した。

漢人の同化力 北朝諸國の風俗は概して粗野剛健であつた。後魏の孝文帝（太武帝の玄孫帝）は國風の粗野なるを厭ひ、洛陽に遷都し、祖國の衣服言語を禁じ、風俗言語等皆漢人に模倣せしめたから、其國人頗る開化した。けれども、その王族貴人は、遷都以後やうやく奢侈にならひ、國勢次第に衰へた。野蠻民族の文明地方にうつるや、文化を



(眞寫の世近) 景風の康建

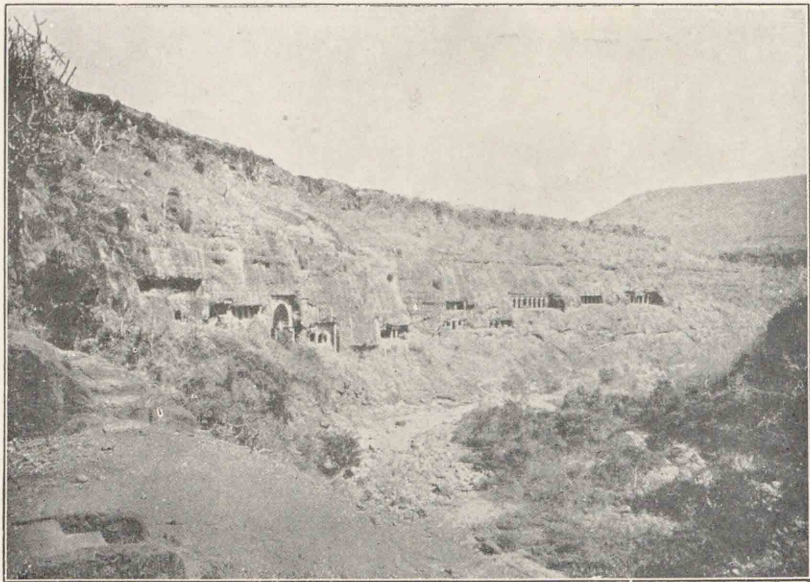
漢人の同化力
梁の武帝の佛教
信仰



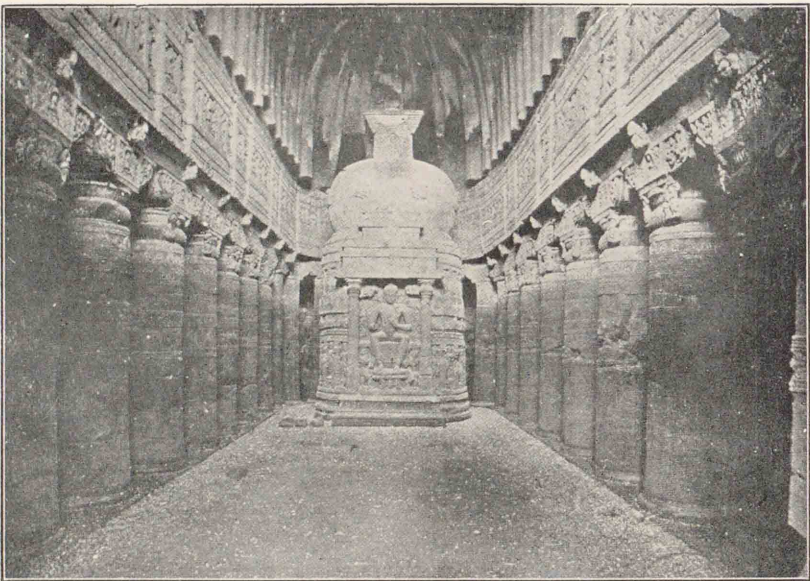
後魏時代の石佛刻像(河南洛陽南龍門)

善用することは難くして、物質上の奢侈シキに流るゝことは易い。是れは古來北方蠻族の支那に侵入したものの通例である。これはまた以て漢人の同化力が大きかつたことを證すべきものである。佛教の流行は、晉と南北朝時代に共通なる現象である。

梁の武帝(武烈繼體安開宣化)も篤く佛教を信じ、自ら三寶奴と稱した程である。又此時代には、支那印度等の東西名僧の往來が少くない。後魏の都洛陽には、僧侶の西域諸國よ



大體の觀外院洞窟石タナヰジア



部内院洞窟石タナヰジア

アジャンタ (Ajanta) は印度のボンベイ (Bombay) より東北のハイデラバド (Hyderabad) 州内にある有名な佛教史蹟である。其丘陵の中腹に穿たれた二十九箇の石窟洞院の開創年代は、支那ならば前漢時代より隋唐の際に至る時代に亙つて居る。

外僧三千人
佛教の流行と諸
藝術の進歩

朝鮮の佛教



(縣同大省西山)像佛刻石の代時魏後

念として名高きは、今の山西省大同及び河南省龍門の石佛である。この流行の勢は獨り支那に止まらないで、尙更に東に傳はつた。朝鮮は、前漢の武帝より後、多少の變遷を経て高句麗、百濟、新羅の三國鼎立の時代となり、前秦(五胡十六國の一)の時、佛教始めて高句麗に入り、



(佛石の寺月滿粹白縣分大) [考參]

り來るもの三千人の多きに及び、繪畫、彫刻、建築等の藝術も、佛教の流行に伴ひ、次第に進歩し、建康(南朝の首府)には、七百餘寺、洛陽には、一千三百六十七寺もあつたといふ。當時の佛教藝術の記

三二仁徳天皇御、高句麗は之を新羅に傳へ、百濟は別に東晉より之を傳へた。而して百濟が更に之を本邦に傳へたのは、實に梁の武帝の子の時である。その外、古代我國の所謂吳即ち江南の國より種々の文物を求めたことは、國史によつてすでに學んだことであらう。

法顯の西行

達磨の東來

東晉の末、支那の僧法顯は陸路を経て印度に往き、海路より支那に歸つた。往復十二年、初め同行十餘人、歸るに及んで、法顯一人のみであつた。これ支那僧が印度に入るの始である。又彼の南天竺の達磨が、海路支那に來りて、支那禪宗の第一祖となつたのは、梁の武帝の時である。
Bodhidharma

隋の文帝の勤儉

隋の統一 南北朝の末、北朝最後の北周の外戚で、好運なる楊堅は、丞相の職に在ること僅に九月、安坐して周室を篡ひ、帝位に長安に即いて(四一三)、隋の文帝となり、ついで南朝の陳を滅して、南北を併せたから、西晉以後、天下分裂、三百年許にして、支那はまた統一された(一二四九崇峻天皇御代、西紀五八九)。
文帝は性勤儉、多年の亂世に疲れたる國民の休養につとめ、即位の

初、民戸僅に四百萬弱であつたが、其末年には八百萬を踰え、國力恢

復し、漢族雄飛の曙光があらはれた。

煬帝の豪華遠征及び外交 然るに文帝の

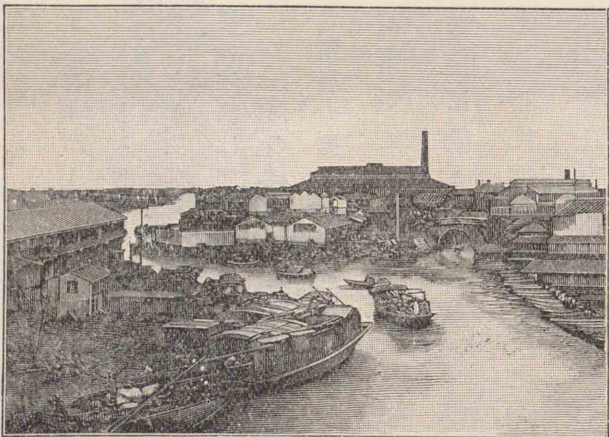


子煬帝は性豪華を好み、宮苑を營み、運河を

四方の遠征

煬帝の失敗

開き、又遠征を好み、東は今の臺灣を征し、南は今の佛領交趾支那地方を平げ、西は今の青海地方を降し、西域諸國を招き、更に遠く西洋の東羅馬帝國と交通せんと欲するに至り、又北方の突厥(トル)を破つたけれども、朝鮮三國の一たる高句麗を攻めて、再び失敗するに



(真寫) 河運の方地州蘇省蘇江

及び、騒亂忽ち起り群雄四方に立つた。

○ 煬天子いでもす道の柳かげ江都の春に千三百里

白岩艶子

運河の利益

運河は萬里の長城とともに支那の世界的二大工事と稱せらるるもので、其開通工事に服役したる隋の民は苦しかつたけれども、支那南北の交通を助け、後世支那人は、其利益をうけた。右の歌にいふ所の江都は即ち今の江蘇省江都縣にして煬帝の好んで遊幸した所である。而して運河の堤には黄河より淮水方面に至るまで、一千三百支那里の間、柳を植ゑ、隋堤の柳とよばれた。

此時李淵は其次子李世民と共に兵を太原(山西)に擧げて長安を陥れ、一時恭帝を立て、やがて其禪を受けて帝位に即き(御代、西紀六一八、推古天皇)また長安に都した。これが唐の高祖である。時に煬帝はすでに南方に於て弑せられた。かくて隋は僅に三世三十七年、盛りの短いこと、猶約八百年前の秦の如くにして亡び、而して隋の次の唐の盛大にして、また國運の長いことは恰も秦の次の漢に似て居る。

日・支國交の始

推古天皇十五年(煬帝即位の三年)小野妹子を隋に派遣した。これが日支國交の始である。

秦・漢と隋・唐との比較

る。

隋の系圖

○高祖文帝 ○煬帝 □恭帝

第三章 唐の創業

李世民の力

英主と名臣

太宗の功業 唐は國を保つこと、大約三百年(一、二七八—一、五六一、推古天皇—醍醐天皇御代、西紀六一—〇七九)。漢とともに支那人の建てた世界的大帝國である。この唐の高祖、建國の事業は、次子李世民の力によるもの多大であつたから、高祖は在位久しからずして位を李世民に譲つた。これが唐の太宗である。太宗は文武兼備の英主にして、房玄齡・杜如晦・魏徵・李靖・李勣等の名臣を



(圖臣功閣烟凌) 齡玄房

太宗貞觀の治



李勣(凌烟閣功臣圖)

濟世安民の相
三鏡の教訓

の人相ありといひしによつて、世民と名附けたといふ。帝常に修身治國に注意し、曰く銅を以て鏡とせば、衣冠を正すべし。古を以て鏡とせば、興替を見るべし。人を以て鏡とせば、得失を知るべし。と又曰く、土城竹馬は兒童の樂なり。珠玉絹帛は婦人の樂なり。有無を貿易するは商賈の樂なり。大官厚祿は士人の樂なり。戰ふて敵なきは將軍の樂なり。四海安寧なるは帝王の樂なり。と快樂の種類は一でない。概していへば、衰世の樂は飲食歌舞に集中し、興國の樂は事業に集中する。太宗の

用ひ、よく天下を治め、國威を四方に輝かした。後世之を貞觀の治といふ。貞觀は太宗の年號である。太宗は、其幼時、一書生之を見て「濟世安民」



太宗宋帝範(聖像解)

太宗の樂しみ

帝範

樂は眞に帝王の樂といふべきである。また帝は親ら「帝範」四卷を撰し、以て太子に賜はつた。

則天武后

武韋の禍 太宗の子高宗も、初めは名臣の輔佐によつて、よく父の業をついだが、常に多病、政を皇后武氏に委ねるに及び、政權は自然武氏に歸し、高宗の死後、二帝ついて立つたが、武氏自ら即位した。即ち則天武后である。武后權略あり、善く人を用ひ、國權を落さなかつた。既にして張柬之等武后に迫り、高宗の子中宗を立てて復位せしめたが、中宗も柔弱の君で、皇后韋氏に

玄宗の即位



則天武后(百美新詠)

弒せられた。中宗の姪李隆基、韋氏を誅して、父睿宗を立て、後自ら帝位に即いた(御代西紀七一ニ)。これが唐の第六世の玄宗である。唐初の武功 太宗及び高宗の時、外征

突厥の降服

の武功また甚だ多い。突厥は、阿爾泰山附近より起つて、南北朝の末より、漸く勢を増し、今の内外蒙古、新疆、中央亞細亞等を併せたが、隋末、唐初に至つて内亂の爲に漸く衰へたのに乘じて、太宗及び高宗は之を伐ち滅し、なほまた西域諸國を征服して、唐の領土は中亞地方にまで延長した。

西藏の來聘

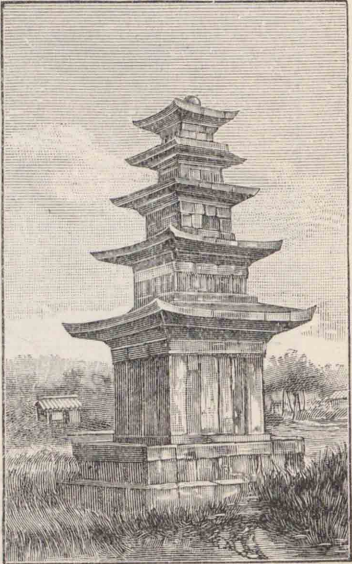
西藏は重疊せる山岳を以て、久しく支那と隔離して居たが、太宗の時、初めて支那と交通し、其南隣ネパール及び印度も、亦唐に來聘した。今の後印度及び南洋諸島も、亦唐の威風を望んで來朝した。蓋し支那の帝國主義は遠く前漢の武帝の時にも行はれ、唐の太宗の時にも實現されたものといふべきである。

支那の帝國主義

高句麗遠征の失敗

然れども太宗も高句麗の遠征には失敗した。是より先き朝鮮の三國は互に相争つたが、太宗の時に及び、高句麗は百濟と聯合して新羅に當り、新羅は孤立し、保護を唐に乞ふた。太宗乃ち親征して遼東

百濟と高句麗の滅亡



大 唐 平 百 濟 國 碑 塔 (真 寫) (近 附 餘 扶 道 南 清 忠 鮮 朝)

紀六、ついで高句麗を併せた。新羅はよく唐に事へて國を保ち、且つ漸次、百濟の故地などを占領して、殆んど半島を統一し、約二百年間之を支配した。

新羅の太宗武烈王

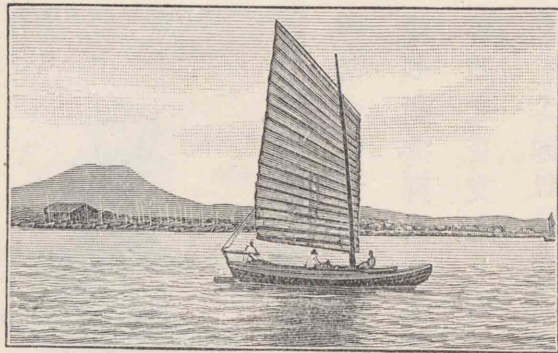
當時の新羅王武烈王は半島史上の一英主で、其廟號は唐の英主と同じく太宗といふ。其即位前本邦にも來朝した。其唐に至るや、唐の太宗も其威儀堂々たるを見て、厚く之を遇した。

六都護府

かくて唐の國威は四方に輝き、其勢力の及ぶ所非常に

漢族最盛と六都護府

廣く、東は朝鮮半島より、西は中亞地方に至り、南は南洋諸島より、北は外蒙古に達し、漢族の最も盛なる時代となつた。こゝに於て唐は六都護府を置いて之を統治した。



鴨綠江より安東縣を望む

府名	統治區域	府名	統治區域
一、安東都護府	(遼東及び朝鮮)	二、安北都護府	(外蒙、古)
三、單于都護府	(内蒙、古)	四、北庭都護府	(天山北路)
五、安西都護府	(天山南路及中亞地方)	六、安南都護府	(南海諸國)

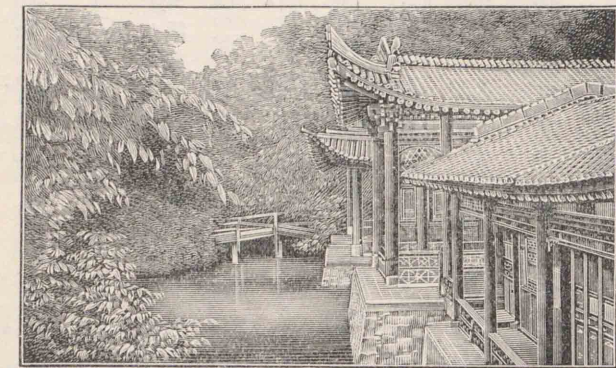
右の中、安東都護府は初め平壤にあつたが、後に遼東に遷つた。

この唐の盛時に於ても、漢人の勢力は、主として大陸の内にとゞまり、海外に振ふことは少かつた。但し漢代に比すれば、唐の國威は、やゝ遠く南海方面にも輝いた。

陸主海従の漢人及び漢代と唐代

第四章 玄宗 安史の亂

開元の治



玄宗の宴遊山宮(陝西關中道臨潼縣東南)(寫真)

開元の治

楊貴妃の寵愛

安祿山の叛旗

玄宗は宮中の禍を定めて位につき、大に政治に勉勵したから、天下泰平であつて、文學藝術も亦發達した。後世之を貞觀時代と並稱して、開元の治といふ。開元は玄宗の年號である。玄宗は又意を邊境に用ひ、四邊の要地に十節度使を置いて、四方を守らしめた。安史の亂 玄宗在位四十三年、晩年には驕奢に耽り、楊貴妃を寵して、國政を怠つた。この時東北方面の三節度使を兼ねたる安祿山之に乗じて叛旗を擧げ、直に洛陽を陥れ、長安に迫つた。玄宗は蜀に出奔

勤王の諸將

前後別人の如し

二顔・張・許の忠烈

し、子・肅宗位をつぎ、郭子儀、李光弼等の勤王の諸將善く戦ひ、且つ回紇（突厥の滅後其故地を占領したトルコ種族）及び大食（アラビヤ人）の援兵をかりて、賊軍を伐ち、子代宗の世に至り、賊の餘黨史朝義を滅して、前後九年の大亂を平定した。之を始むる難きに非ずとは、開元の時代の善政を評すべく、終りを善くするを難しとなすとは、天寶（玄宗年號）の時代の惡政を評すべく、前後の良否より見れば、同一人の玄宗にして殆んど別人のやうである。



唐代の陶俑胡人と駝

安祿山の叛したのは、我遣唐使吉備眞備の歸朝した孝謙天皇天平勝寶六年の翌年で、當時我太宰府は此亂に因りて邊備を修めた。此亂の初に於ける顔眞卿、顔杲卿の忠節は、二顔の忠と稱して名高く、又張巡と許遠も忠烈にして、二人の

、睢陽の籠城は、一萬の城兵、餘す所僅に病傷の四百人に至るも、終に叛く者なく、力盡きて國難に殉じた。

顔眞卿

人ありてふたたび國をおこししも思へば君が勳なりけり 渡 忠秋

第五章 唐代の文物・宗教 南海の貿易

唐代文學の美

李白及び杜甫 諸藝術の發達

文藝の美 五胡侵入以來、支那の社會は久しく分裂混亂して、文教發達の勢微々であつたが、隋より唐に至り、文藝燦然として興つた。之を譬ふれば、五胡以來隋に至る迄は、寒冬風雪の下、百草俱に萎み、唐に至つて、始めて一陽來復し、春光方に麗はしくして、千紫萬紅の美を競ふやうである。

唐は支那歷代中文學隆盛の時であつて、詩文の中、詩は特に發達して、中にも玄宗の頃は、李白と杜甫の二大詩人が出た。又此時代前後は、他の藝術も發達し、書には張旭あり、顏眞卿あり、畫には李思訓あ



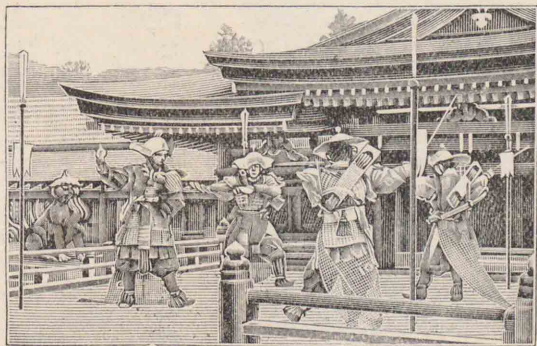
(傳畫堂笑晚) (左)甫杜 (右)白李

り、王維ありて、ともに善く山水を畫き、
吳道玄は佛畫に長じた。又玄宗の世に
は雅俗の音樂共に流行し、中古時代の
我國に傳來した者が多い。又玄宗より
數十年を経て、
韓愈と柳宗元

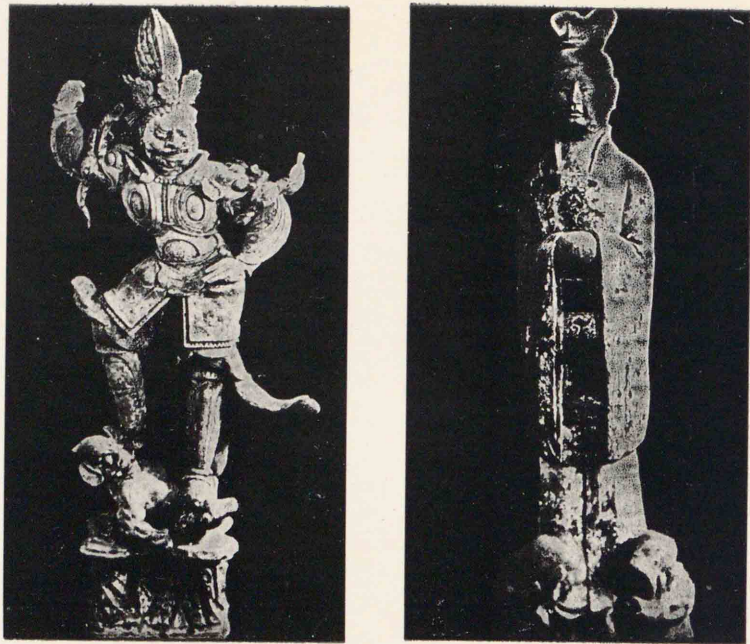
韓愈及び柳宗元
白氏文集の作者

の二大文章家が出た。又古來我國人に愛讀
せられて居る白氏文集を作つた白居易も
其頃に出たのである。

國破山河在、城春草木深。(杜甫)
國破れて山河あり、城春にして草青みたり。(芭蕉)
奥の細道、平泉懷古の條
人皆有癖、我癖在章句。(白居易)



(樂邦) 樂平太



右上、唐代文官陶製人形
左上、唐代武官陶製人形
右下、唐代女子奏樂

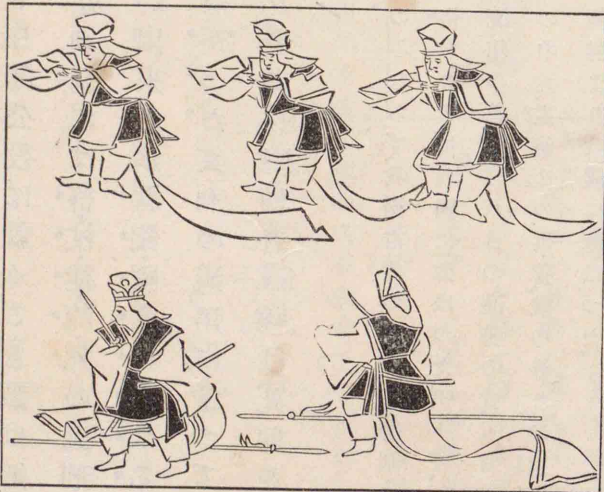
三省六部

道・州・縣

租・庸・調

人ごとに一つの癖はあるものを我にはゆるせ敷島の道 (慈鎮和尚)

制度の備 唐の制度は、大體其最盛時たる太宗・高宗二代の世に成つたものである。官制中央・政府には三省・六部等があり、三省は尙書・中書・門下といひ、其中尙書省の權力最も重く、六部は此尙書省に屬し、政務を分擔するもので、即ち吏部・戸部・禮部・兵部・刑部・工部である。地方制度は全國を十道に分ち、道の下に州あり、州の下に縣あり、州に刺史、縣に令を置いて、民政を掌らしめ、各道に巡察使あり、州縣を監督した。税法唐代歳入財源の大本は租・庸・調の三である。租は田地



(說圖樂舞)(樂邦)(下)(人四圖原)部一の樂昌武(樂邦)(上)(人六圖原)部一の樂歲黃

五刑

に課するもの、庸は丁男が毎歳二十日間公役に就くこと、調は郷土の産物を上納することである。刑法刑罰には笞杖徒流死の五刑があり、皆金を納めて罪を贖ふことが出来たが、君父國家に對する大惡(謀反不類)は之を贖ふことを許さなかつた。又刑の適用に當つても、主從尊卑の別によつて輕重があり、老者(九十)幼者(七歳)は死罪を犯すも、其罪を論じなかつた。

唐の風俗

唐の制度は、支那後世の模範となつたのみならず、我國古代の制度も唐制による所が多い。之と同じく唐代前後の風俗も亦大に我國に傳はつた。例へば、正月元旦の屠蘇酒の祝杯、三月三日の曲水流觴の遊、四月八日の灌佛の式、五月五日の菖蒲湯、七月七日の七夕祭、同十五日の中元、孟蘭盆の供養、歳の終りの追儺の禳ひなどである。又種々の舞樂が唐と朝鮮より我國に傳はつた。

八宗

宗教の盛 唐の宗教も前代に比して特色がある。佛教、佛教は南北朝流行の勢をうけ、唐に至つて更に盛となり、當時流行した佛教の分派には、三論法相華嚴律成實俱舍天台眞言の八大宗派がある。是

等の宗派は我奈良朝より平安朝にかけて、概ね我國にも傳はつた。

玄奘及び義淨の渡天



玄奘の渡天 (宋代又は元の代原圖)

唐の太宗の時、玄奘は天山南路、中亞を経て天竺に入り、往復十七年間に百三十餘國を遊歴し、經論六百五十餘部を得て還り、又經論を翻譯して、支那佛教史上に功績をたてた。又高宗の時、義淨は海路より天竺に入り、往復廿四年を費し、經論四百餘部をもたらした。

唐の正教

景教及び回教

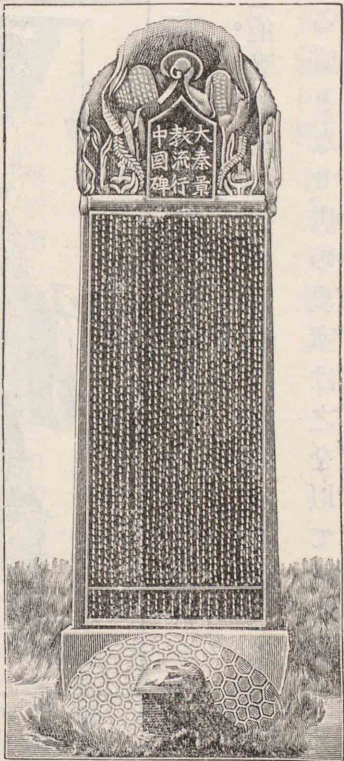
〔道教〕神仙の術に老莊道家の説を混合した道教も、亦唐に至つて頗る盛となり、唐の皇室は之を以て正教とし、老子を以て祖先として崇めた。〔西教〕佛道二教の外、唐代には、其勢力範圍の西方に擴まつた影響として、當時中亞地方に流行して居た諸宗教は漸次支那に傳はつた。中にも、景教及び回教最も注意すべきである。景教は即ち

基督教の一派たるネストル教にして、回教は即ち阿剌比亞のムハメッドの唱へしイスラム教である。

阿羅本

景教の支那に傳はつたのは、太宗の時シリヤ人阿羅本が支那に來り、太宗の尊

大秦寺



大秦景教流行中國碑 (碑念紀行流教景秦大) (縣安長道中關省西陝)

信を受けたのに始まり、玄宗等も之を信仰した。其寺を大秦寺といつた。この圖は唐より八百餘年後に、唐の首府長安即ち今の長安縣

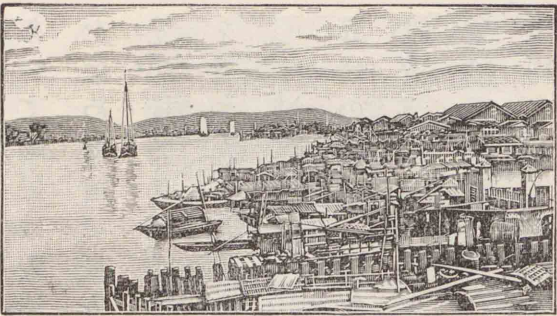
弘法大師と景淨

より發掘した當時の景教流行の碑で、大に西洋人の注意をひいた。此景教碑を建てた者は、大秦寺の僧、景淨といふシリヤ人であるが、我國の弘法大師は入唐中に此景淨と關係があつたといふ緣故によつて、明治四十四年高野山に模形の景教碑が建立された。

日唐交通 我日本は既に隋と修交したが、唐に至り、其關係益、密接

遣唐使及び留學生

唐と阿剌比亞



廣東支那船集り

し、我國よりは、屢、遣唐使を派遣し、また僧侶學生の入唐した者が多い。弘法傳教の兩大師、吉備眞備、阿倍仲麿等は最も名高い者である。南海の貿易 唐の對外勢力の盛大になれると共に、通商も頗る發展し、特に其中世以後は、當時東西の二大國たる唐と阿剌比亞との間には、通商盛に行はれ、阿剌比亞人は、遙に支那南海の廣州(東廣)泉州(建福)に來航して貿易を行つた。

第六章 唐の衰亡 五代

安史亂後の唐朝 唐は高祖より玄宗に至る迄、既に百四十年ばかりを経過し、玄宗以後なほ百五十年ほど繼續したが、安史亂後の國

外患内憂

勢は、前の如く盛ならず、外國人も唐を侮つて入寇し、内には一種の軍閥たる節度使の專横及び宦官の横暴相ついで起り、財政の難また之に加はつた。

賊徒黄巢

唐の滅亡 かくて唐末の政治は漸く悪化せる上に、水旱の災などあつて、國民は安堵せず、賊徒四方に起つた。中にも賊將黄巢は諸方を掠めて、遂に長安に入つた。この賊は一時平定したが、賊の降將朱

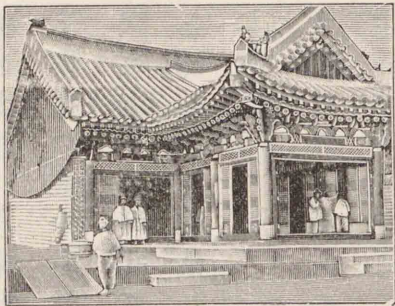
朱全忠篡立

全忠、權略あり、悉く宦臣を誅し、功を以て梁王となり、ついに唐の位を篡つた。これが後梁の太祖である。かくて唐は廿世二百九十年にして滅びた。(一五六七醍醐天皇、御代、西紀九〇七)

五十年十三君

五代の興亡 後梁の太祖既に帝と稱したが、其勢力の及ぶ所は大體黃河流域に過ぎず。且つ後梁は僅に二世にして亡び、其後、後唐、後晉、後漢、後周の四代忽ち興り、忽ち亡び、共に天下を統一せず、唐の滅後約五十年間に五代の興亡、十三君の更迭があつた。而して五代の

王氏高麗朝



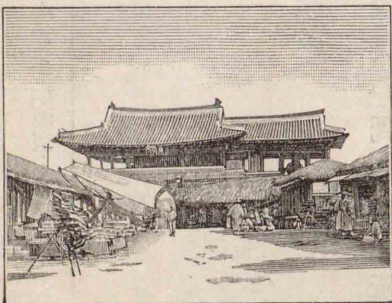
高麗太祖廟

あつて、其半島統一の年は五代の中頃である。(一五九六朱雀天皇、御代、西紀九三六)他の東方諸國の事は、便宜上之を次章にのべやう。

都は多く、(汗南河)にあつた。

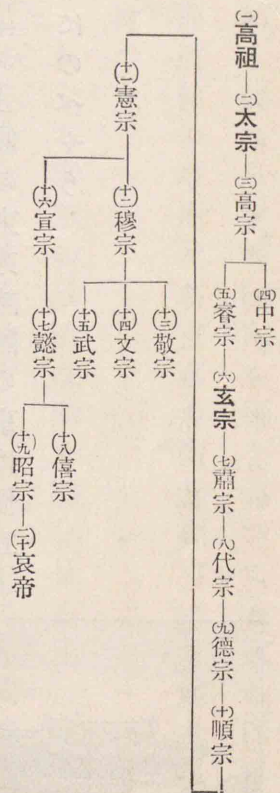
高麗の統一 五代の頃、東方諸國も亦頗る多事を極めたのである。

新羅はさきに朝鮮半島を統一したが、唐の末に至り、其政治亂れて、半島また分裂した。王建はつひに新羅を滅し、松嶽(京畿道開城)に都した。これが即ち高麗の太祖で



松嶽南大門

唐の系圖



第七章 宋の統一 渤海・遼・金の興廢

國民の希望

宋の太祖 唐末及び五代八十餘年の紛亂は、國民の既に厭ふ所、早く英主の統一政治に歸せんことを望むは國民自然の情である。かくて後周(五代の最後)の末に至り、諸將は節度使趙匡胤を以て有爲の君と爲し、之を推戴して汴(河南)に即位せしめた。これが宋の太祖である。(上六二〇村。天皇御代)

宋の太祖の政治 宋代武力の弱

太祖は深く武人の專横を憂ひ、宰相趙普と謀り、文臣を任用し、文治主義の政治を行つた。是より國民休息することが出來たが、宋代武

漢・唐と宋以後

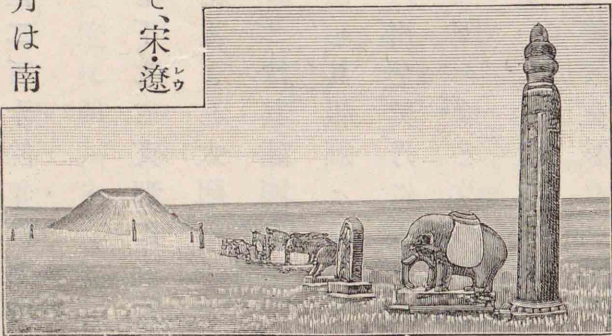
力の弱も亦こゝに原因した。支那は古來文武並重の方針を執り、漢唐の國勢は上述の如く強盛であつたが、宋に至つて、武臣を輕んずるやうになり、其餘弊は後世にも及んだ。而して宋の初めの頃はなほ獨立の數小國があつたが、太祖及弟太宗は、次第に之を征服して、全く天下を一統した。(一六三九圓融天皇御代、西紀九七)時に宋の東北に興つた遼の勢盛にして、宋遼

契丹人の遼

遼と渤海 遼は即ち契丹人の國である。契丹は南

契丹の太祖

北朝の頃より、今の遼河の上流地方に居た滿洲族である。唐の末、其酋長耶律阿保機雄略あり、遂に皇帝と稱し(七五五臨潢上流河)に都した。これが契丹の太祖である。太祖は附近の諸種族を降し、更に東して



(真寫) (南西縣鞏道洛省南河) 陵の祖太の宋

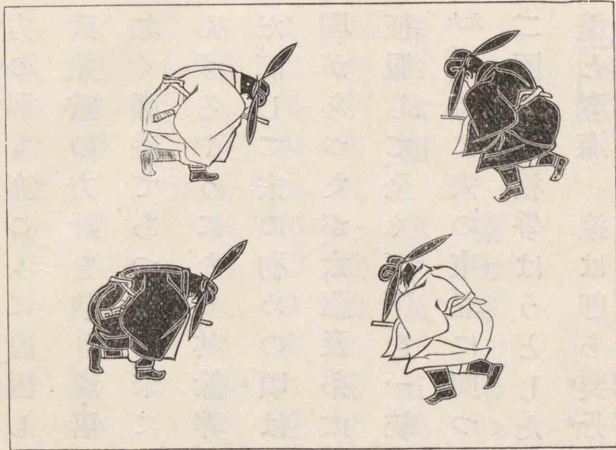
靺鞨族の渤海

渤海を伐つた。

渤海も今の満洲族たる靺鞨族が唐の中世(明一三三七三、元)に建てた國で、一時東方の強國であつたが、契丹の太祖は其國都忽汗城(吉林)を陥れ、

渤海は十四世二百十餘年にして滅びた(八五、八六)。

十六州の割與
遼の國號



(新靺鞨)靺鞨(靺鞨俗舞其腰屈して舞ふは拜禮踏の體なり)
(樂邦舞圖說)

契丹は更に南下して支那に侵入しやうとした。恰もよし、太祖の子太宗の時、後晉(五代の第三)は其建國に當り、契丹の後援を要し、其報酬として、支那東北部の十六州を契丹に與へた。既にして太宗は國を遼と改め號し、後晉の契丹に對して無禮なるを怒り、大舉南征して後晉を滅し、其國都汴

契丹の侵入

に據つたが、支那人の反抗に堪へないで、忽ち北に還つた。

キタイ又はカタ
イ

契丹盛時の領地は、支那北部滿洲及び蒙古等に互り、其勢甚だ強く、且つ後には其一族中央亞細亞に建國したから、其名遠く西人に傳はり、露西亞人及び中亞等の人は契丹の名を訛り、北支那をさしてキタイ又はカタイといひ、其名今も猶西洋に存して居る。次に渤海は我聖武天皇以後二百年許本邦と交通し、屢、貂皮、虎皮及び人参等を買獻した。

澶州の役
宋の屈辱

宋遼の和戰と遼の全盛 さて宋の太祖の時には、宋遼二國の間平和であつたが、宋の太宗は天下一統の勢に乗じて、遼をうちて、志を得ず、其子眞宗も遼の軍を澶州(直隸)に防いだ、勝利の望なきによつて、和議の結果、遂に歲幣として多額の銀絹を遼に與ふることとなつた(六一、六四)。時に遼は太祖の玄孫聖宗位に在り、實に遼の全盛時代であつた。

宋の仁宗 眞宗の子仁宗に至り、西藏族の趙元昊の建てた西夏も、屢、宋の西邊に侵入して、宋は又一外患を加へた。遼は之に乗じて、又

宋の外交軟

宋に迫つたから、宋は歳幣を増額して、和約を繼續し、更に西夏にも歳賜を與へ、宋の臣下たる禮を執らしむるやうにして、戦争を避けた。

宋代第一の仁君

かくて對外の勢は振はなかつたが、仁宗は恭儉の君にして、人を愛

先天下之憂而憂
後天下之樂而樂
錄范希文語 藤田虎

言名の淹仲范の書湖東田藤

し、民をあはれみ、宋代第一の仁君として、漢の文帝と並べ稱せられ、また名臣大儒頗る多く、中にも范仲淹は宋朝の

人物第一の名があつた。

范仲淹の名言

范仲淹字は希文曰く、士は當に天下の憂に先だちて憂ひ、天下の樂に後れて樂むべし。と、其天下の事に熱誠なるを想ふべく、先憂後樂の語は實に名言である。

東湖の書は、先天下之憂而憂、後天下之樂而樂なり。

西三條季知

神宗と王安石

新・舊兩黨の争

司馬溫公

新法と舊法 仁宗より英宗を経て神宗に至るや、多年不振の國勢を振ひ興さうと思ひ、王安石を擧げて宰相とした。王安石は舊法を改めて、新法を發布し、富國強兵の策を建て、富國策としては、青苗均輸・市易などの諸法を、強兵策としては、保甲・保馬の法を行つた。然るに司馬光等の保守的政治家は、之に反對したから、こゝに新法・舊法兩黨の争は三十餘年に亙り、其間國家を主眼とした政論に加ふるに、個人的の私怨を以てするやうになつた。



(像畫堂笑晚) 光馬司

司馬光は、即ち幼時より英敏にして、嘗て水をいれたる甕を撃ち破つて、其中に陥つた小兒を救ひ出したと傳へらるる司馬溫公である。其の長ずるや益賢明、其在官中は、遼の人も、西夏の人も之を畏敬した。溫公嘗て曰く、平生爲す所、人に對して言ふべからざるものなし。と、また或人溫公に一言以て終身之行ふべきものを問ひしに、溫公は「それ誠か」といひ、其人重ね

て修養の法を問ひしに「妄語せざるより入る」と答へた。

石とりて碎きしかめの水よりや惠の波は世にあふれけん

高崎正風

徽宗の不徳

宋・遼の衰運と金の勃興 神宗の後哲宗を経て徽宗に至り、多藝の

天祚帝の暗弱

君であつたが、治國の徳に乏しくして、宋の國運漸く衰へた。又遼に於ても、全盛時代は既に過ぎ去つて、徽宗と同時代の天祚帝に至り、

女真人の金

其國運の衰へたる時に當つて、金といふ強國が遼の北方にあらはれた。金はもと女真(滿洲族)と號し、黒龍江地方に居り、遼に屬して居た

が、阿骨打(Akuta)其酋長となるや、遼の衰へたのに乘じ、其軍を破つて獨立し、都を會寧(吉林)に奠(サズ)め、國を金と號した(七五)。これが金の太祖である。

宋の徽宗は金の勃興を聞き、之と協力し、遼を挾撃して其地を分割しやうとして、金は東北より、宋は南より遼を攻めて、之を滅した(七八)。遼は九世二百十年にして滅びた。時に遼の王族耶律大石は、餘衆

と共に中央亞細亞に走りて、西遼國を建てた。

遼の滅亡

西遼の建國

西遼の建國

と共に中央亞細亞に走りて、西遼國を建てた。

狼と虎

宋の失策と實力の有無と外交の成敗

この役、金軍は連勝し、宋は連敗したから、金は殆んど遼の舊領全部を取り、宋は僅に今の北平附近の地を得たるのみである。而して宋は遼よりも更に強大なる金と其境を接するやうになつたのは、之を譬ふれば、狼を拒いて、虎を引き入れたやうなものである。

自己の實力なき外交のつひに失敗に歸することは、これを見ても知ることが出来る。

宋の南渡 金はすでに宋の弱點を看破し、太祖の弟太宗は長驅南下して宋を攻めた。徽宗急に位を子欽宗に譲り、之を防いだ、金は

つひに宋の都を陥れ、徽宗・欽宗並に后妃等を執へて北に還つた(七八)

是に於てか欽宗の弟高宗位に即いたが、金の勢を避け、遂に江南に退却して、都を臨安(江浙)に遷した(八九)。之を宋の南渡と稱し、高宗以後

を南宋といふ。

南宋

宋の二帝執へらる

八七 崇徳天皇御代、西紀一一二七

宋の宿題
討つた方々か
悪いか

宋金の和戦

南宋の初、岳飛、胡銓等、軍人學者の主戦論者少からず、



岳飛 (像畫堂笑晚)

若し上下一致したならば、恢復の業

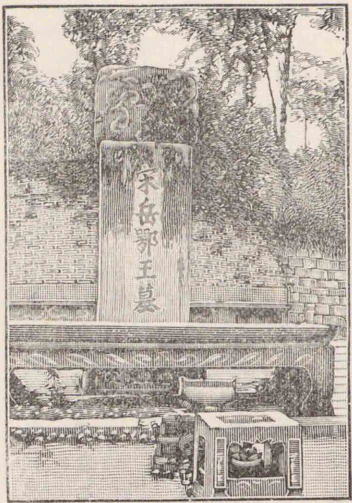
また難くなかつたであらうが、元來高宗は性怯懦なるが上に、二帝及び生母章太后の擒となつて金に在るを以て、和議を希望せるにより、宰相秦檜は巧に和議を唱へ、忠勇なる岳飛を獄に下し、歳貢を納めて金と和

宋の屈辱

岳飛の忠勇

し、且つ金の封冊を受け(紀一八〇一、西一)、後つひに岳飛を殺した。

支那人の兵力を以て蠻族と戦ひ、勝利の望のあつたのは蓋し岳飛を以て支那史上の最後といつてよいほどである。岳飛の忠勇は、金人も之を畏れて、「撼山易、撼岳家軍難」といひ、其死を聞くや、酒を酌みて相賀した。又かつて「盡忠報國」の四大字を其背に入墨した。或人嘗て「天下何時太平」と問ひしに、「文臣不愛錢、武臣



宋岳飛王鄂墓

この後、金主亮(金の太孫)は國都會寧

不_レ惜_レ死_レ。天下太平_ナ矣。と答へた。岳飛又曰く「運用之妙、存於一心」と。活用を貴ぶは、戰略のみでないのである。

君がせにしるしおきけん一言を
誰も心にきざむべきかな

井上文雄

金の遷都

金・宋の衰弱と
蒙古の勃興

の邊鄙なるを厭ひて、今の北平に遷都し、ついで大軍を以て宋を攻めたが、利あらず、且つ軍中に弑せられ、其從弟の賢明なる世宗が位に即いた。時に南宋の孝宗位に在り、また賢明にして、宋金の間事なきこと、三十餘年に及んだ。然れども、兩國の元氣漸く衰へて、其餘命長くない時に當つて、蒙古人新に北方に興り、遂に世界無比の大帝國を作り、東洋史上の一大變局をなせることは、之を次編に説くこととする。

宋の退守と秦・漢・唐の進攻

進退攻守の勢

北宋と南宋、ともに外敵に對する國威武力は甚だ弱かつた。畢竟退きて守るといふに執着して振はなかつたのである。二回は勝算あつたが、邊境の外まで長驅して進出するの元氣がなかつたから遼金の爲に苦しめられたのである。秦の始皇、漢の武帝及び唐の太宗など、支那の儒者、或はその用兵過多をそしめるものもあるが、攻勢を以て外敵を撃退したことは、守勢の宋とは天地の別がある。進退攻守の勢、國民の注意すべきことである。

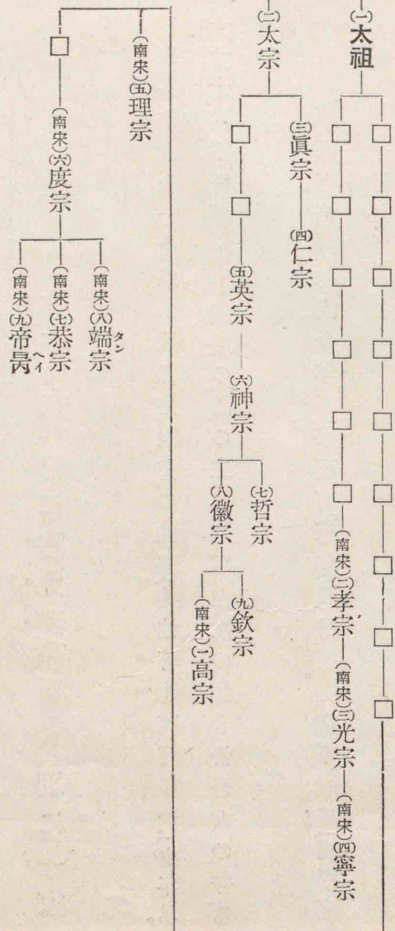


西湖の風景

金主亮は江南併呑の大望を起し、畫工をして宋の都臨安及び附近の西湖・吳山の景を寫さしめ自ら詩を題して「萬里車書盡混同。江南豈有別封疆。提兵百萬西湖上。立馬吳山第一峰」といつた。

美しき西湖の春の船のごと卓にならべしいろくの貝 與謝野 寛

宋の系圖



西湖吳山の美景は南宋の人をして山水歌舞の遊樂に安んぜしめ、遂に北方回復の雄志を消磨せしめたものともいひ得るやうである。

第八章 宋代の文物

漢・唐の學風と宋の學風

儒學の新學風 宋代の特色は、武にあらずして、文にある。特に其儒學の研究法を一新したのは、支那學術史に光彩を添へたものである。漢唐の儒者は、多く經書の字句註釋に苦心したが、宋の儒者は之

朱子の宋學大成

陸象山

朱子の教訓



(像畫堂笑晚)

に満足しないで、儒學の哲理を研究した。即ち北宋には周敦頤及び二程即ち程顥程頤等あつて、此新學風を起し、南宋に至り、朱熹出でて之を大成し、爾來儒學の正統となつた。是れ即ち我國にも傳はつた朱子學である。朱子と同時に陸九淵(象山)あり、別に一家の

説を立てた。

朱子即ち朱熹は七十一を以て歿した。四書の註釋、其他著述甚だ多い。少年易老學難成、一寸光陰不可輕。朱子偶成の詩の二句及び左記の如き、皆吾人の守るべき金言である。

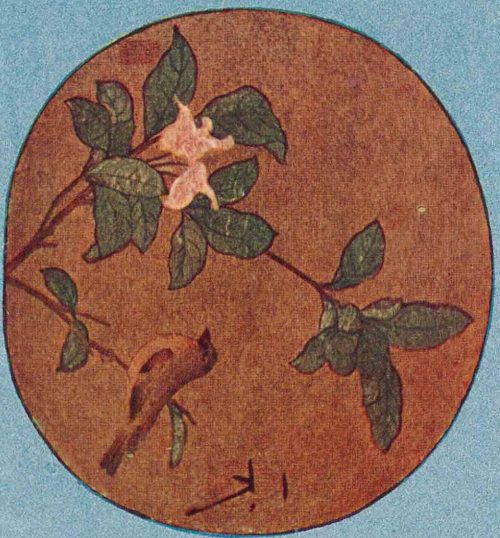
勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣。歲不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。(朱子勸學文)

朱熹曰、陽氣發處金石亦透。精神一到何事不成。(朱子格言)

宋代文章の特長

文藝

唐に美觀を極めた文章も、唐末五代の亂に衰へたが、宋に至



鳥 花 筆 宗 徽

唐・宋の八大家

【圖解】

- 1 總門 2 山門
- 3 天王殿 4 大雄殿
- 5 厨下 6 方丈
- 7 客殿 8 役寮
- 9 鐘樓 10 浴室
- 11 禪堂 12 齋堂
- 13 鼓樓 14 開山堂

資治通鑑

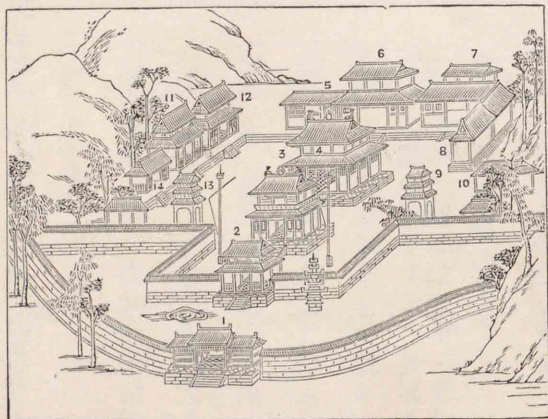
美術獎勵

禪宗の流行

つて再興し、特に議論文の妙は、唐の人にも優つた。唐宋二代の八大家の文章を編輯したものを唐宋八大家文讀本といひ、徳川氏以來、漢文教科書として、弘く我國にも行はれた。この八大家の中、唐人は二人（韓愈と柳宗元）にして、宋人は六人（歐陽修・蘇洵・蘇軾・曾鞏・王安石）である。次に宋代の修史も頗る發達し、中にも司馬光の資治通鑑は最も有名である。

宋の畫も亦發達し、徽宗は特に美術の發達を獎勵した。

佛教 宋代最も盛に行はれたる佛教は、禪宗であつて、また我國に傳はり、我僧榮西・道元の入宋及び宋の僧道隆の歸化等ありて、禪宗は鎌倉時代以後盛に流行した。



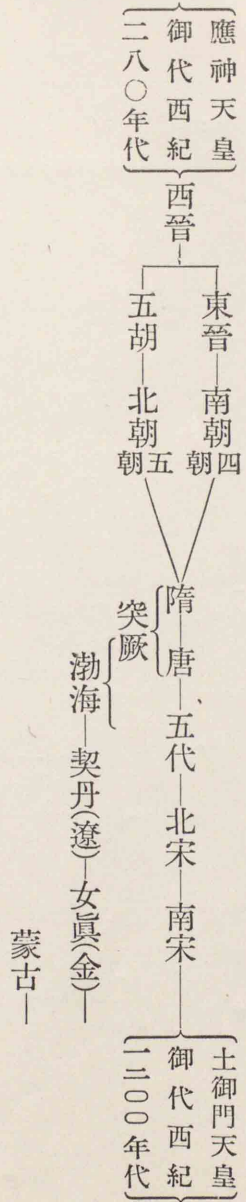
（那支世近）造構の院寺宗禪

印刷と陶器 文化の普及宣傳に必要な印刷術も宋に至つて發達し、北宋の初め、始めて大藏經の刊本といつて、一切の佛典を集めて印刷し、其本版は十三萬枚もあつたといふ。其他支那の經典文學書なども、多く印刷された。又宋は支那の工藝美術として世界に名高い陶器の製造についても、一段の進歩をなした時代である。

欽明	同	崇峻	推古	同	同	同	同	舒明	同	同	同	同	齊明	天智
一三三	一三三	一四九	一三五	一三七	一三七	一三七	一三七	一八九	二九〇	二九五	二九五	二九五	一三七	一三三
五三	五二	五九	六五	六七	六七	六七	六七	六九	六〇	六三	六三	六三	六三	六三
百濟佛教を我國に傳ふ	ムハメットアラビヤに生る	隋の天下一統	隋の煬帝即位元年	小野妹子隋に使す、日本支那交通の始	隋亡び唐興る	唐の太宗貞觀元年	唐の僧玄奘印度にゆく	日本遣唐使の始	唐の太宗東突厥を滅す	景教唐に入る	唐の高宗西突厥を破る	唐の高宗百濟を滅す	唐の高宗百濟を滅す	唐の高宗百濟を滅す
醍醐	同	同	村上	圓融	後三條	鳥羽	崇徳	同	同	二條	土御門源賴家	同	同	同
一五七	一五六	一五六	一六〇	一六九	一七五	一七五	一七五	一七五	一七五	一八三	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇
九七	九六	九六	九六	九七	一〇九	一一五	一二五	一二七	一二七	一二三	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇
唐亡ぶ	契丹の太祖即位す	契丹、渤海國を滅す	宋の太祖即位元年、宋初以後印刷の術ます、發展す	宋の太宗天下を一統す	宋の王安石新法を行ふ	金(女眞)の太祖の元年	金・宋連合して遼を滅す	北宋亡び、南宋の高宗即位す	宋・金の和	蒙古の鐵木眞(成吉思汗)生る	南宋の朱熹卒す	南宋の朱熹卒す	南宋の朱熹卒す	南宋の朱熹卒す

中古史摘要年表

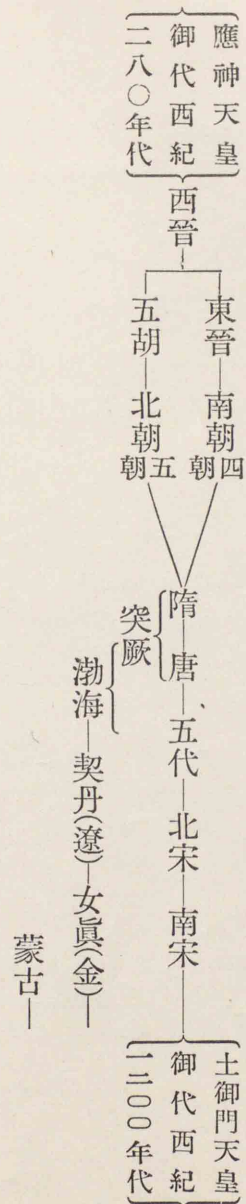
(本系の左傍に括弧を附して、突厥及び渤海などと記せ
るは、是等の諸種族の史上にあらはれた時代を示すも
のであること上古史年表に記した通りである。)



年	皇紀	西紀	重要事蹟	年	皇紀	西紀	重要事蹟
應神	九四〇	二八〇	西晉の統一	天智	一三六	六六	唐の高宗高句麗を滅す
仁徳	九七六	三六	西晉亡ぶ	持統	一五〇	六〇	則天武后の篡立
同	九七七	三七	東晉興る	元明	一七三	七三	唐の玄宗開元元年
同	一〇四三	三三	淝水の戦	同	同	同	渤海建國の始
允恭	一〇九九	四九	天下宋・魏の南北兩朝となる	孝謙	一四一	七五	安祿山反す
武烈	一二三	五三	梁の武帝即位元年	宇多	一五四	八四	日本遣唐使の廢止
欽明	一二三	五三	百濟佛敎を我國に傳ふ	醍醐	一五六	九七	唐亡ぶ
同	一三三	五二	ムハメットアラビヤに生る	同	一五六	九六	契丹の太祖即位す
崇峻	一四九	五九	隋の天下一統	同	一五六	九六	契丹、渤海國を滅す
推古	一六五	六五	隋の煬帝即位元年	村上市	一六〇	九六	宋の太祖即位元年、宋初以後印刷の術ますく發展す
同	一六七	六七	小野妹子隋に使す、日本支那交通の始	圓融	一六九	九七	宋の太宗天下を一統す
同	一七八	六八	隋亡び唐興る	後三條	一七二	一〇六	宋の王安石新法を行ふ
同	一八七	六七	唐の太宗貞觀元年	鳥羽	一七五	一二五	金(女真)の太祖の元年
同	二〇九	六九	唐の僧玄奘印度にゆく	崇徳	一八五	一二五	金・宋連合して遼を滅す

中古史摘要年表

(本系の左傍に括弧を附して、突厥及び渤海などと記せるは、是等の諸種族の史上にあらはれた時代を示すものであること上古史年表に記した通りである。)



年	皇紀	西紀	重	要	事	蹟	年	皇紀	西紀	重	要	事	蹟	
應神	九四〇	二八〇	西	晉	の	統	天智	一三八	六六八	唐	の	高	宗	
仁德	九七六	三三六	西	晉	亡	ぶ	持統	一三五〇	六九〇	則	天	武	后	
同	九七七	三七	東	晉	興	る	元明	一三七三	七三三	唐	の	玄	宗	
同	一〇四三	三三三	淝	水	の	戰	同	同	同	渤海	建	國	の	
允恭	一〇九九	四九九	天	下	宋	・	孝謙	一四四五	七五五	安	祿	山	反	
武烈	一一六二	五〇三	梁	の	武	帝	即	位	宇多	一五五四	八九四	日	本	
欽明	一二三三	五五三	百	濟	佛	教	を	我	國	に	傳	ふ	唐	
同	一三三三	五七一	ム	ハ	メ	ット	ア	ラ	ビ	ヤ	に	生	る	
崇峻	一二四九	五九九	隋	の	天	下	一	統	同	一五七六	九六	契	丹	
推古	一二六五	六〇五	隋	の	煬	帝	即	位	村	上	一六三〇	九六〇	宋	
同	一二六七	六〇七	小	野	妹	子	隋	に	使	す	日	本	支	
同	一二七八	六〇八	隋	亡	び	唐	興	る	後	三	條	一七三九	一〇六九	宋
同	一二八七	六〇七	唐	の	太	宗	貞	觀	元	年	一七五五	一一五	金	
舒明	一二八九	六〇九	唐	の	僧	玄	奘	印	度	に	ゆ	く	金	
同	一二九〇	六一〇	日	本	遣	唐	使	の	始	同	一七五五	一一五	金	
同	同	同	唐	の	太	宗	東	突	厥	を	滅	す	北	
同	一二九五	六一五	景	教	唐	に	入	る	同	一八〇一	一二四	宋		
齊明	一三七七	六五七	唐	の	高	宗	西	突	厥	を	破	る	蒙	
天智	一三三三	六三三	唐	の	高	宗	百	濟	を	滅	す	南		

第三編 近古史

(皇紀一千八百六十年頃より二千三百四十年頃西紀一千六百四十年頃に至る迄大約四百年間)

第一章 蒙古の勃興

成吉思汗即位 今や蒙古人の大部分は、支那に屬し、其一部分は露西亞に屬し、政治上大なる勢力はないけれども、其過去を顧みると、大に人意を強うするものがある。六七百年前、古今無比の大帝國を建て、其名は世界に鳴り渡り、蒙古の名は、遂に所謂黃人種の總稱となるやうになつた。

蒙古の過去と其名稱は世界的なり

英雄鐵木眞

成吉思汗の尊號

蒙古部は、もと外蒙古の黑龍江の上流、オノンケルレン兩河の地方に遊牧し、遼と金に屬して居たが、宋末に至り鐵木眞なる者あり、幼にして孤となり、逆境の間に成長して英雄となり、蒙古部の長となつてナイマン等の諸部を併せ、略内外蒙古の地を占領して、つひに、諸酋長をオノン河上に會して、大汗(大)の位に即き、成吉思汗(強盛なる大)

といふ尊號を受けた(一八六六源實朝の時、西紀一二〇六)。

蒙古人は當時開化柔弱の弊を受けず、粗剛の蠻勇を保存し、簡單なる生活に甘んじ、騎射に長じ、軍紀特に嚴であつたから、其戦闘力最も強い上に、蒙古勃興の際は、金人も漸く弱く、其他の支那塞外の諸民族にも強い者がなかつたから、大に建國の好機を得た。成吉思汗より十餘世の先祖にアラン媛あり、五子を



矢の教訓

西夏の降服
金人の屈服

成 子に不和の事があつた。其母一日五子を列べ、一條の矢を與へて之を折らしめ、皆容易に之を折つた。又吉 思 五條の矢を一束して折らしめたが、皆折ることが出来なかつた。母汗 は因りて不和孤立の害と、共同一致の利を教へたといふ。

成吉思汗遠征 劉邦と項羽との兩雄を合せて一としたやうな成吉思汗は、先づ支那西北部の西夏を降し、尋いて金を攻めた。金人も

中亞の二大國

四子の從軍

之を防ぐに術なく、和を請ひ、黄河以北の地を失つた。時に蒙古の西方、天山北路及び中亞地方には遼の王族耶後大石の建てた西遼(七ハ頁參)並にホラズムといふトルコ族の國があつた。而して成吉思汗の征服したナイマン部の餘衆は、西に走りて西遼を滅ぼし、勢に乗じて蒙古に復讐しやうとしたから、成吉思汗は金の征伐を止め、鋒を轉じて西方遠征を企て、先づ其將を遣してナイマンの餘衆を征服せしめた。

ここに於て蒙古の領土は中亞のホラズムと其境を接した。既にして蒙古の隊商がホラズムに入つて殺されたのを理由として、成吉思汗は自ら其四子ヂューチ、チャガタイ、オゴタイ、ツルイと共にホラズムに侵入して、忽ち之を征服し、敗走せるホラズム王を追撃せる一隊は、更に進みて、阿羅思(今の露西)に侵入したが、印度方面に進入せる本軍の東歸と共に、亦軍を收めて東に歸つた。

西征七年

西夏滅亡

太祖の遠逝

西征七年にして凱旋した成吉思汗は、又西夏を攻めて之を滅し、更に金を攻めやうとしたが、六盤山(甘肅)南の軍中に病歿した(一八八七、西紀一二二七)。彼は即ち蒙古の太祖である。

太祖の人物

太祖用兵神の如く、その一生征服の地は内外蒙古天山南北路及び、中・西亞細亞等に互り、滅國四十。その雄圖は古來稀である。その訓言も亦少くない。例へば「一言にして善たるを見れば、必ず其言を行ひ、不善たるを見れば、必ず其言を行はず」といひ、臨民之道、如乳牛、臨敵之道、如鷲鳥」といふの類である。



蒙・露兩國民族カルク河邊の戦

クリルタイ

喀喇和林の奠都

金の滅亡

高麗の降服

歐洲諸國を蹂躪す

ヴールスタットの役

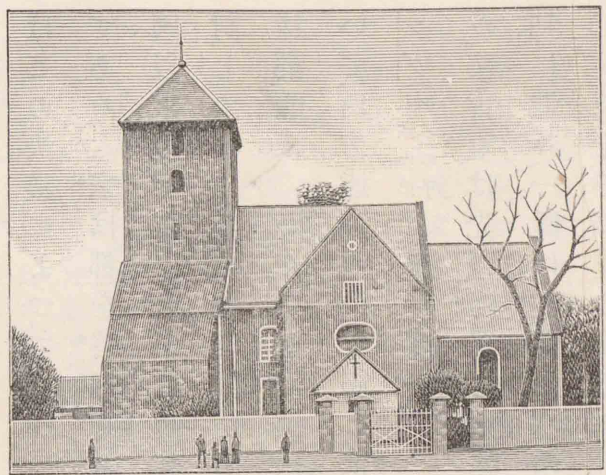
太宗南征 蒙古のならひとして、大汗(カガ)の推戴及び和戰の大事にはクリルタイ(王族功臣の大會議)の議決を要した。太祖の死後、第三王子オゴタイはこの決議によつて大汗の位に即いた。これが蒙古第二世の太宗である。太宗は都を喀喇和林(外蒙古オルゴエ)に奠め、また父の志を継ぎ、建國以來百廿年の金を攻めて之を滅し、更に從來宋・遼・金の三大國に對して、巧に其國運を維持して居た高麗を威壓して之を降した。拔都西征 かくて東方稍無事となつたので、太宗は又父の志をついで、西方遠征の役を起し、拔都(太宗の兄チグレイの子)を元帥とし、クユク(太宗の子)、マング(太宗の弟)及び老将スブタイ等を副として、歐洲に侵入せしめた。蒙古軍は先づ阿羅思を蹂躪し、遂に中部歐洲に迫り、一隊は匈牙利に進み、一隊は波蘭を攻め、シレジアに入りて、波蘭及び獨逸の諸王侯騎士等の聯合軍をヴールスタットの野に破り(一九〇一、北條泰時、大に全歐洲を震ひ驚かせたが、太宗が死んだため、遠征をやめて東に

蒙古宗室の不和

忽必烈の南征

旭烈兀の西征

シレジア公ヘンリー二世戦死の跡の教會堂
(獨逸ワールスタット)



境を直接するやうになつた宋をうつたが、軍中に死んだ。而してまた憲宗の弟フラーグは波斯小亞細亞の回教諸國を遠征し、將に埃及

歸つた(一九)。
蒙古宗室の不和 太宗の後、其子定宗(クニ)立つたが、在位三年にして死するや、クリルタイ會議は、太宗の孫を立てないで、マングを推して大汗とした。これが憲宗である。是より後太宗の子孫は、不平を抱き、後年蒙古大帝國分裂の一遠因となつた。

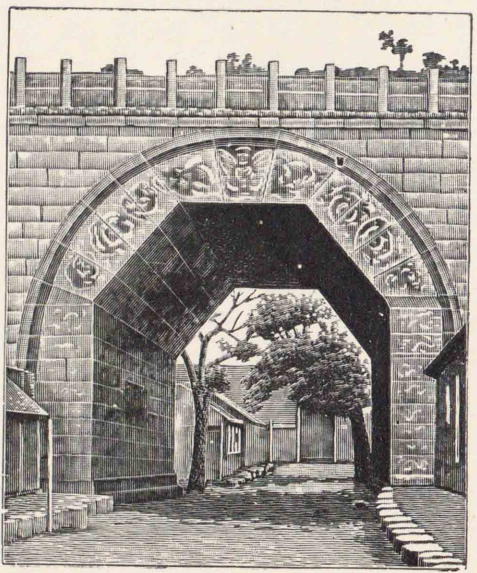
憲宗時代の征伐 憲宗は又征伐を企て、弟忽必烈をして雲南の方面を征せしめ、自ら將として、金の滅後蒙古と其



祖世の元(一)



祥天文の宋(三)
(像畫堂笑晩)



關 庸 居(二)



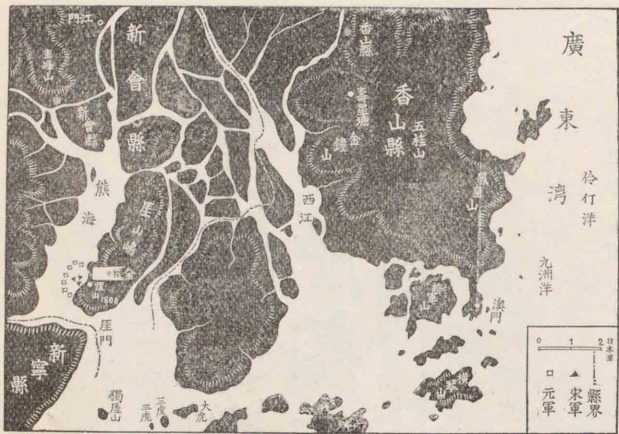
字二孝忠の意筆祥天文(四)

- (一) 元の世祖が祖父成吉思汗以來の遺業を大成して、大帝國を建てた事の大要は、本文に載せてある。
- (二) 居庸關は、北平の北の昌平の西四里許にある。京張鐵道の南口停車場よりは二里許である。此關門は元の世祖の創築にかかり、關の長さ二十二尺、高さ四間、廣さ四間、佛像を彫刻し、且つ漢字・蒙古字・梵字・西藏字・西夏字・ホルイク字(西藏語の一種)の六種の文字を以て、喇嘛教禮讚の文が刻されてある。印度・西藏・支那及び蒙古の藝術趣味を混合加味した建築は宏壯雄大で、彫刻の精巧活躍してゐる状態は、當時の元氣充實せる時代精神を發揮したものである。
- (三) は文天祥の像。(四) 圖に示す所の忠孝の二字は文天祥の筆意を模したもので、唐崎常陸介が廣島縣賀茂郡竹原町磯宮八幡社内の手引殿に刻したものである。

及に攻め入らうとしたが、兄の死を聞いて軍をかへした。

第二章 元の世祖 宋の滅亡

大都燕京
國節新定
宋の滅亡



圖の近附其び及山厓

世祖の統一 忽必烈は兄につぎて大汗となつた(一九二〇北條時宗の時に西紀一二六〇)。これが蒙古第五世の世祖である。世祖は都を今の北平に遷し、之を大都と名け、國號を立てて元とした。時に南宋は前編の末に記した孝宗の後、國勢は次第に衰へた。世祖は父祖の遺志を繼ぎ、大舉南征した。宋の文天祥等勤王の師を起したが、衰弱の宋は連勝の元に敵しかねて皆敗れ、國都臨安終に陥つて、益、南方に追

文天祥の忠義

はれ、厓山(東廣)に戦ふに及んで、宋の君臣皆海に没し、宋は十八世三百年にして滅び(一九三九北條時宗の時、西紀一二七九)、世祖は全く支那を統一した。

文天祥は博學能文で、官は丞相に至り、忠義の心極めて厚く、切に宋の回復を圖

風簷展書讀
古さ照顔色
藤田歌湖東田藤
の書後最の二句

(風簷書をひらきて讀めば古道顔色を照す)

作つた。正氣とは即ち權勢威武に屈せずして我守るべき所を守る正大の氣である。
身はかくてひとやのうちに朽ちぬとも心ばかりはいかでけがさん

佐々木弘綱

高麗の臣服

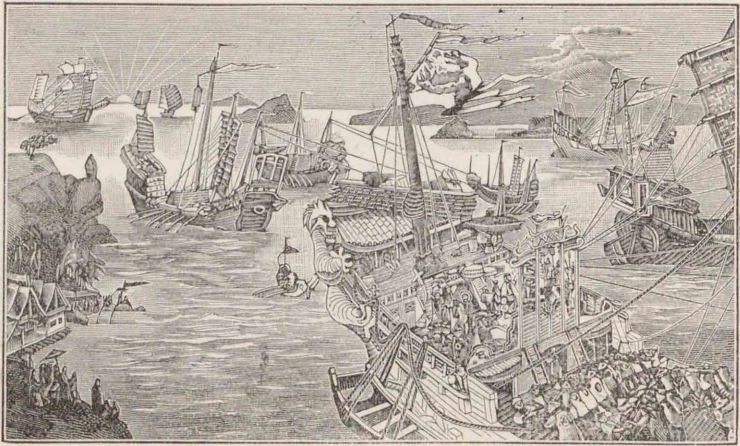
高麗は既に蒙古に降つても、其後服従の態度不定であつたが、世祖の時には、全く元に服従した。其外今の後印度諸國も、世祖の遠征軍

後印度及び南洋諸國の降服

東征の失敗

元と高麗

蒙古人戦争の長短



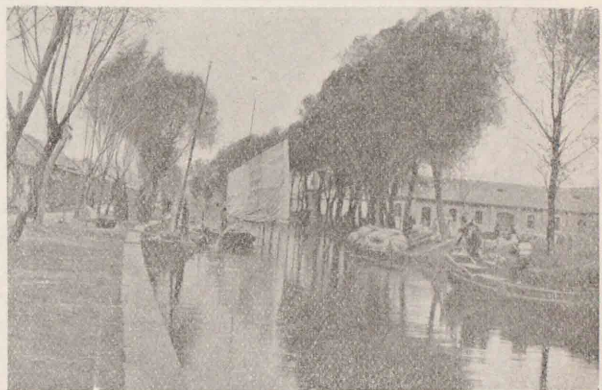
南洋征伐の蒙古古戦艦

に降服し、瓜哇、スマトラ等の南洋諸國も、亦皆元に來貢した。斯の如く世祖の外征は常に成功したが、我國に對する入寇(我國史上の文)は、非常の大失敗に終つた。

元寇弘安の役當時の高麗王は、其二十五世忠烈王である。是まで高麗も遼、金二國に對しては朝貢の禮をとるに過ぎなかつたが、此時に至りて、高麗の内外の政治共に元の干涉を受け、殆んど元の一諸侯の如く、高麗王の世子は元の都に質子となり、且つ元の皇女を娶るを常とした。

最大帝國 蒙古人の戦闘を觀察すると、大體彼等は大陸平野の戦に長じて、山險海洋の戦は不得手で、南

元の皇帝としての世祖



北支(天)津(地)方(方)の運河

方の暑濕は、特にこれを厭つた。而して太祖より孫世祖に至るまで、約七十年にして、亞細亞の大部分と歐洲東部とを征服して、世界空前の最大帝國を作るに至つた。但し此内には諸國征服に大功のあつた蒙古諸王の私領地の大なるものが、左記の表の如く四つあつた。
元・の・皇・帝・た・る・世・祖・は、支・那・本・部・蒙・古・遼・東・高麗及び其他の東洋諸國を直轄または統御し、蒙古の大汗として諸王の私領地をも監督するのであつた。また世祖は漢人の學者を任用して諸制度を定め、又曆法及び道路を改善し、且つ運河を修めて、大都と南支那との交通を便にした。

四大汗國

漢人の文化

東西通商の繁昌

國名	始祖	領地	首府
一、察合臺汗國 <small>Chagatai</small>	察合臺	中央亞細亞及び天山北路地方	アルマリク(天山北路)
二、窩闊臺汗國 <small>Oghuz</small>	窩闊臺	西部蒙古アルタイ山脈一帶地方	エミル(外蒙古)
三、欽察汗國 <small>Kipchak</small>	拔都	西亞及東歐の一部	サライ(露西亞東南部)
四、伊兒汗國	旭烈兀	西亞の大部分	マラゲア(波斯の西北部)

今や支那に君臨せる主權者は漢人に非ずして、文化は大體漢人に従つた。故に漢人主權の宋朝は亡びたけれども、漢人の文化は依然として存續して居たのである。

第三章 東西の交通 マルコ・ポーロ

東西の交通 元の領土は亞歐の兩大陸に跨つたから、東西の交通大に開けた。特に南支那の泉州(福建)は、一時繁昌の港となり、外國商人の來住頗る多く、上海(蘇江)も亦當時の貿易港の一であつた。

不平の漢人
朱元璋の優勢
元・明の革命



(代現) 僧 喇 喇

たから、帝位相續の際には常に多少の争を生じ、權臣の專横之に伴ひ、或は内亂を起すやうになつた事。(三)多年戰役の結果として、財政困難となつた事。(四)世祖以來、西藏より傳來の佛教の一派なる喇嘛教を尊信し、遂に僧侶專横となり、且つ佛事供養の費用多かつた事などである。

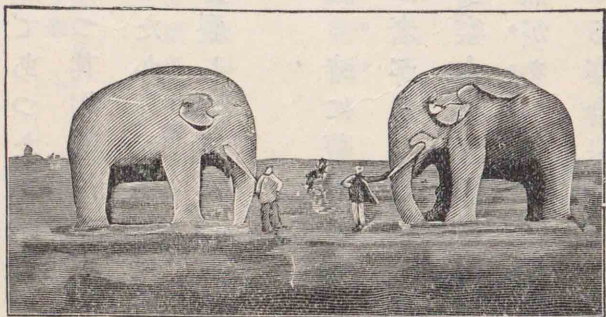
元の滅亡 かくて元朝漸く衰へた時、洪水飢饉地震等の天災地變相ついで起つたため、さなきだに北方異人種の壓迫に不平なる南方の漢人は諸方に革命運動を起した。中にも江淮(揚と子)地方に起つた朱元璋の勢最も強く、まづ南方を平定し、帝位に金陵(今の南京)に即いた。これが明の太祖(洪武)である。而して明軍が北征

韃靼の可汗

明の太祖の特色

して元の大都に迫るや、元の順帝は大都を棄てて、蒙古に奔り、其子孫は韃靼の可汗と號した。かくて元は世祖の國號制定以來十世九十八年にして滅びたのである。(二〇二八 足利義満 西紀一 三六八)

明の太祖洪武帝洪武は太祖の年號である。明代より天子一代一年號の制となり、従つて年號を以て帝王を呼ぶの風が起つた。は少時父母及び兄を失ひ、孤立依る所なく、佛寺に入り僧となり、乞食までしたことがあつた。嘗て漢の高祖が微賤より起つて天下を一統した偉業を聞いて、大に感奮し亂世の風雲に乗じ、つひに大業を成し、其一代をみると、一人にして窮民英雄賢君の諸性行を兼ねたやうな人物である。



(真寫) (京南ち即縣寧江道陵金省蘇江) 像石の前陵孝祖太の明

諸汗國の盛衰 蒙古の四大汗國中、太宗の後たる窩濶臺汗國の諸

窩潤臺汗國の滅亡

西方三汗國の衰頹

帖木兒の世界一統の霸氣

王は常に不平を抱き、世祖に至り、太宗の孫ハイヅ遂に叛し、其亂四十年に互つたが、亂の平定と共に同汗國は滅亡し、其他は察合臺汗國に併合された。

而して察合臺伊兒欽察の三汗國も各、一時盛であつたが、蒙古の諸王は、概ね戦争に長じて、治國の能に乏しく、且つ其相續法の不完全であつた爲め、王位繼承の際常に紛紜を起したから、元朝が東方に衰亡せる間に、西方の三汗國も亦漸く衰微分裂して、互に相攻め争つた。



帖木兒の雄圖 時に蒙古の疎族に帖木兒といふ者があつた。碣石(中亞)より起り、察合臺汗國に屬し、世界一統の霸氣があり、當時諸汗國中最も慄悍なる察合臺汗國人を率

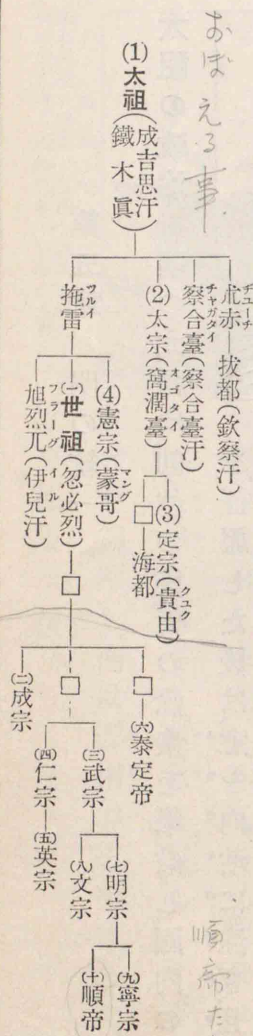
第二の成吉思汗 第二の蒙古帝國

帖木兒の大言

みて、まづ同汗國の分裂を統一し、元朝滅亡の翌年、都を撒馬兒罕に奠め、遂に伊兒汗國を併せ、欽察汗國を降し、ついで印度に入り、更に小亞細亞に進み、土耳其帝、バヂジッドを破つて之を擒にした。かくて中南西亞の大部分を平定し、埃及をさへ入貢せしめたから、第二の成吉思汗ここにあらはれ、第二の蒙古大帝國がまた起つたやうになつた(足利義持の頃)。

帖木兒常に「天に二日なく、地に二王なし」といひ、其意志極めて強かつた。擧兵の初め足を傷けて跛となり、チムール・レンク(チムール跛者の號を得たが、西人は之を訛りて、タルメランとよんだ)。

蒙古(元)の系圖 (西洋數字は元といふ國號制定前、日本數字は國號制定後の世數)



第五章 明の統一

太祖の政治

明の太祖は、即位の後、元の餘衆を撃破し、國內の群雄

を征服した後は、意を内治に注ぎ、且つ力

めて漢人的文物を振興し、法律を修正し

た。かくて太祖は武を以て亂を定め、文を

以て太平を致し、漢人はまた喜んで漢人

の天子を戴いた。太祖はまた諸王族を要

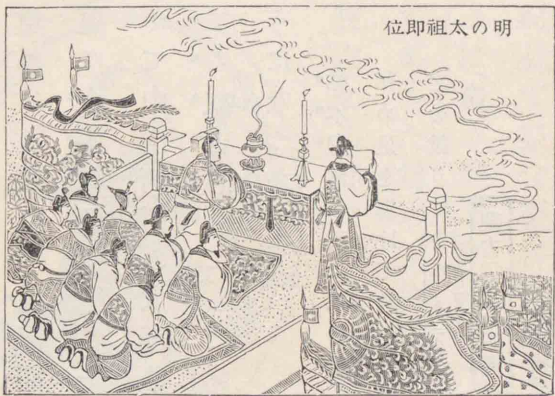
地に封じて、帝室の藩屏としたのはよい

が、死後の事を過慮して、多く功臣を誅し

たのは失策といはねばならぬ。

成祖永樂帝 太祖死し、その孫惠帝即位

したが、叔父諸王の強きを恐れ、之を抑壓したから、霸氣ある燕王朱



漢人の天下

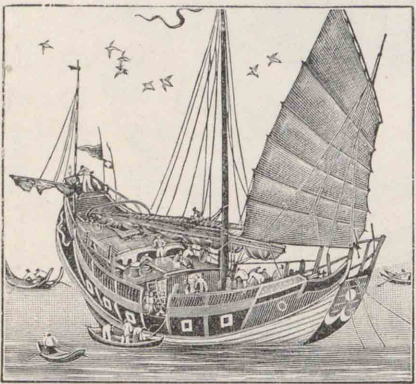
叔姪の争

棣(太祖)は、遂に兵を燕京(北平)に挙げ、君側の奸臣を除くを名として、金陵を攻めて之を陥れた。是に於て惠帝遂に出奔し、燕王代りて天子となつた(三〇)。これが成祖(永樂)である。

此事變に當り、方孝孺は節を守りて難に殉じた。方孝孺はもと惠帝の侍講にして、若し方氏を殺さば、天下讀書種子絶(三)矣と稱せられた學者である。成祖は即位の詔を草せしめんとしたけれども、方孝孺は成祖の不義を責めて之に應ぜず、磔刑に處せられた。

成祖の之を強ふるや、燕賊篡立の四字を大書し、終に磔刑に處せられた。

永樂帝はつひに燕京を以て北京とし、後之を以て首府とし、舊都金陵を南京とした。帝の時、内治頗る擧がり、外征の功亦大にして、北は長城を修築し、漠北に親征して、蒙古の餘衆を鎮壓し、南は安南地方を伐ちて、一時之を征服した。



鄭和の大艦を造る。長四十四丈、廣十八丈、汽船の未だ興らぬ時代の巨艦である。

方孝孺の義烈

北京に遷都す

永樂帝の外征

鄭和の海外經略

明初の盛事

また成祖は惠帝の或は海外に出奔せしやを疑ひ、宦官鄭和に命じて、海外を探らしめた。鄭和は前後七回遠洋諸國に使して、明の恩威を示したから、南洋及び印度洋方面の三十餘國明に來貢し、明人は國家の盛事として自慢した。

次にまた成祖の時、彼の中亞の帖木兒大王は、初めは遠交近攻の策

をとり、好を明に通じたが、すてに大國をたて、明の内亂をきくや、之を伐つて、再び蒙古人の勢力を東亞に回復しやうと思ひ、東征の軍を起したが、中途に病死し、^(三五)成祖と帖木兒との東西兩雄の對戦を見ることが出来なかつた。

宣徳の治 成祖の後、仁宗を経て、



(近附縣平昌兆京省隸直)陵の祖成の明

兩雄の對戦を見ず



支那の陶器

陶器は支那の世界的名産の一である。
我國の陶器工業の進歩も近古支那特
に明代以後の支那に負ふ所が少くな
い。

支那名産の陶器

宣宗(宣德)に至り、立國の基礎既に堅く、賢相多くして、國內は善く治

まつた。また此頃より、明は美麗なる陶器の製造を以てあらはれた。
日明交通 元寇弘安の役の後、日本と支那との間には、僧徒・商人等

永樂錢輸入



が私に通ずるのみで、公然の國際的交通稀となつたが、
足利氏に至り、屢、明と交通貿易し、明の永樂錢を輸入し
て、流通を助けた。其後足利時代の本邦と明とは、其交通
頗る繁く、明よりは藥種・顏料・錦繡・諸織物を輸入した。當時明にゆき
たる本邦人中最も有名なるは、雪舟及び絶海である。

雪舟と絶海

第六章 明の衰運 滿洲の勃興

宦官專横の由來

北人侵入 初め明の太祖は前代の弊に鑒みて、宦官の政事に與る
を禁じたが、成祖の篡立した時、宦官の内通したのを徳として、其禁
を解いてから、宦官漸く政に參與し、其弊は宣宗の次の英宗の世に

瓦剌の侵入
英宗の大敗
韃靼の入寇

所謂倭寇

倭寇と臺灣

北虜・南倭
日本刀の銳利

至りて漸く甚しくなつた。かくて其政治の亂れたのに乗じてバイカル湖西の瓦剌部といふ蒙古の屬部が南下して、明に侵入し、英宗Bayan之を親征し、反つて生擒の辱を受け、和議によりて放還せられた。其後も蒙古の餘衆たる韃靼の入寇つひに止まず、明はただ其防禦に苦んで居た。

南倭の患 明の北邊の患かくの如きが上に、其東南海邊も亦不穩となつた。我吉野の朝廷の頃より、我邊民の朝鮮及び支那の沿海を侵掠する者があつて、彼國の人は之を倭寇とよんだ。永樂帝の時、我足利義滿と修交し、倭寇の勢稍減じたが、足利氏の衰ふるや、また盛となり、明の奸民も多く之に加はつて、支那の沿岸を侵掠した。其後明の世宗の末年足利義晴時に至り、略之を平定したが、其殘黨はなほ臺灣に據りて其近海に出沒した。

明人は倭寇を畏れ、北方の蒙古と並稱して、北虜・南倭といひ、特に日本刀の銳利

八幡船

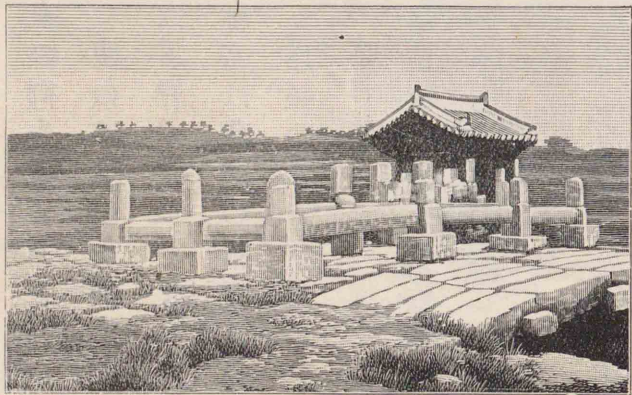
鄭夢周

高麗の滅亡

を恐怖して、倭人揮刀如神。人望之輒懼而走といつた。當時我國の海寇船は八幡大菩薩の旗を立てたから八幡船ともいつた。

朝鮮の興起 高麗は久しく元に臣服して居たが、元末明初に至り、内には姦臣の憂あり、外には倭寇の患ありて、其國勢漸く衰へた。時に李成桂は倭寇をうちて功を立て、漸く人望を收め、高麗王朝晩年の中心たる鄭夢周等の反對があつたけれども、自立して王位に即き二〇五二、足利義滿の時、西紀一三九二、高麗は四百五十六年にして滅びた。

鄭夢周は我國に使し、倭寇をやめんことを請ひ、九州探題今川貞世に優遇された。夢周の九州に在るや、詩を求むる者少くなかつた。後夢周は李成桂の黨與のために殺されて、國難に殉じ、九州の人傳聞して、之を悼惜した。今高麗の舊都たる朝鮮開城



(眞寫) 橋竹善の城開鮮朝

李王家の祖先

の城外に善竹橋といつて、鄭夢周殉難の地として名高い處がある。かくて李成桂は今の京城に都し、明の冊封を受けて其東藩となつた。これが朝鮮の太祖であつて、今の李王家の御先祖である。

萬曆朝鮮の役 北虜南倭の患、僅にやみて、明の邊境やや無事であつたが、神宗(萬曆帝)の世に至り、俄に東方に大事變が起つた。是れ即ち我豊臣秀吉の朝鮮の役である。此時、明の神宗は藩國の救援と、自衛との爲に朝鮮に出兵したが、大軍を動かさし、巨額の兵糧其他の軍需品を費し、而してつひに大敗したから、國力大に疲弊した。

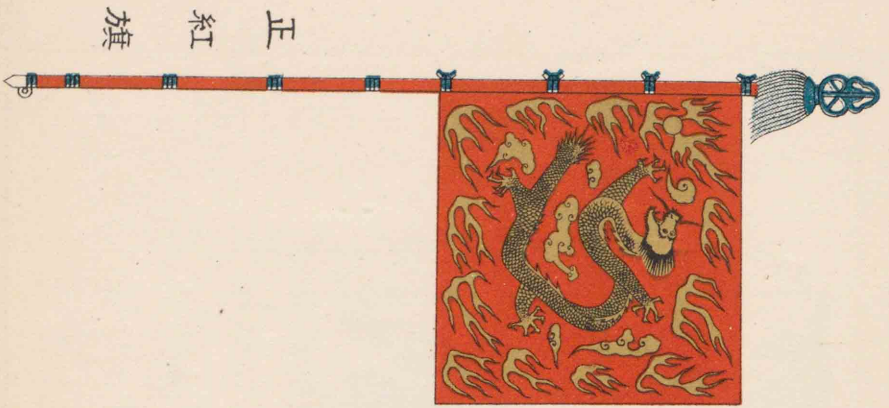
國力疲弊

滿洲と明

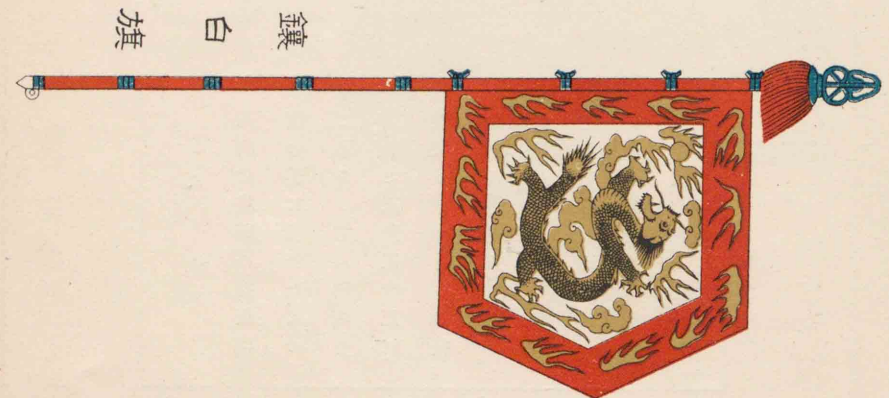
蒙古と南宋

滿洲の勃興 この時に當りて、やがて明朝を倒すべき強敵、滿洲人が明の東北に勃興した。其狀恰も中古史の末、南宋の衰弱した時に蒙古が東北方に勃興したと同様である。蒙古人が金を滅してより後、滿洲族の勢振はなかつたが、明の萬曆時代に至り、努爾哈赤といふ者が、兵を今の奉天の東方にある興京

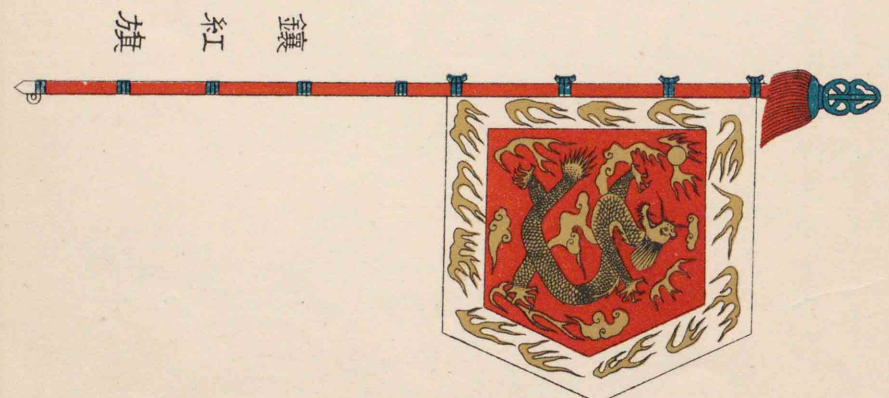
Neohachiu



正紅旗



鑲白旗



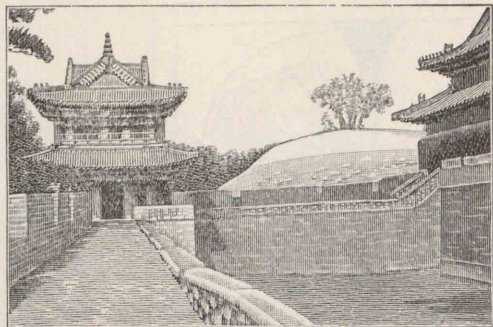
鑲紅旗

八旗
八旗は滿洲の兵籍編制の爲に設けたものである。初め四旗を設けて、正黄、正白、正紅、正藍の四つとし、其後四旗を増設して、鑲黄、鑲白、鑲紅、鑲藍の四つとし、黄、白、藍の三旗には紅い縁をとり、紅旗には白い縁をとつた。

後金

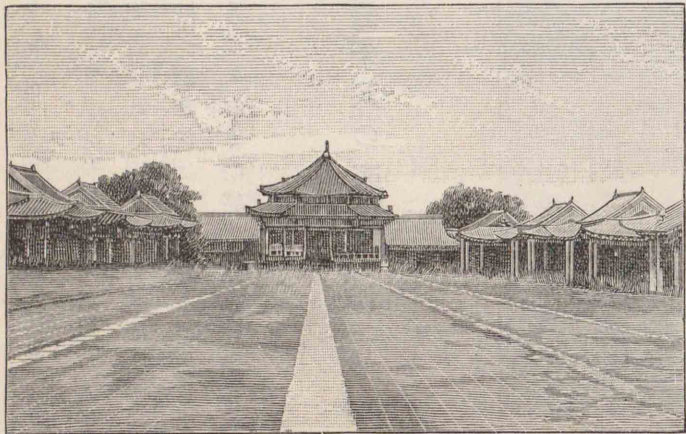
清の太祖

國號の改定
清と朝鮮



(天奉ち即縣陽藩省天奉) 陵の祖太の清

地方に起し、次第に滿洲族を統一し、遂に國號を建てて後金と稱し、帝位に即いた(七二六二)。
 德川秀忠時代(西紀一六一六)ころが清朝の太祖である。太祖はついで明と朝鮮との聯合軍を破り、愈勢を得て、今の奉天を取り、遷つて之に都した。是より太祖及び其子太宗は、益、遼東及び蒙古地方を征服し、太宗の時には、國號を改めて清と稱した(九二六二)。
 德川家光時代(西紀一六三六)時に朝鮮は猶明に心服し



(建創の宗太の清) 殿政大の天奉

事大主義
朝鮮人と明・清
二朝

て居たから、清の太宗は之を征して、全く屈服せしめた(九七)。

此時朝鮮、城下の盟をなしてより清朝に對して「事大」と稱し、毎年清朝に入貢し、京城の郊外には迎恩門、慕華館を建て、清の使者來れば、遠く之を鴨綠江邊に迎へ、使者入京の時には、朝鮮王之を迎恩門に迎へ、慕華館に休息せしめ、而して後京城に入らしむるを常とした。しかし朝鮮人は久しく明朝に好意を存して清朝に悦服しなかつた。

第七章 莫臥兒帝國 葡萄牙人の來航

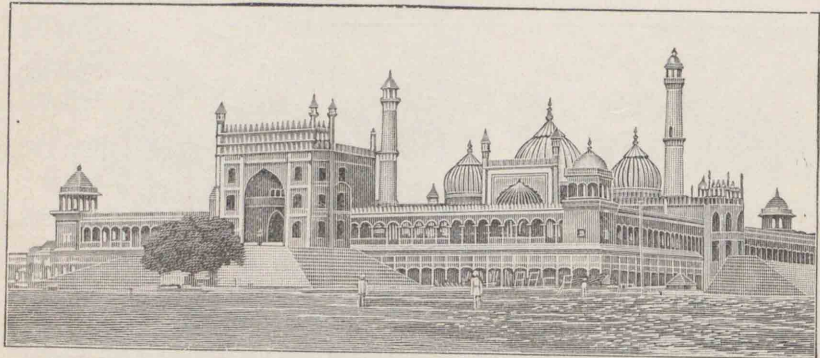
通商及宣教



像の王ルベバ



校將の朝ルーガム



寺大勢回のーリヂ

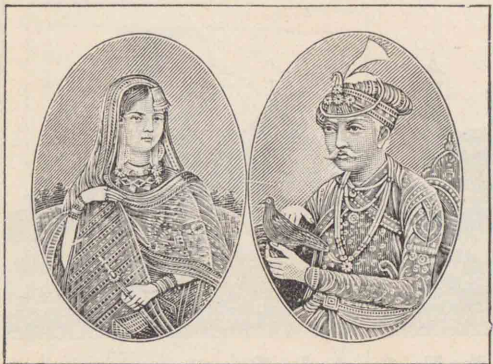
バベル王 帖木兒大王の死後、其大帝國は分裂し、帖木兒の遺業も衰へた。元來蒙古人等の北方民族は、性勇猛にして、破壊戦争の能力には富むけれども、建設守成の能力に乏しいため、大英雄が起り之を率ゐて起れば、一時盛に四方に雄飛するけれども、其人既に死すれば、其國忽ち衰へるを常とした。帖木兒王國の盛衰もまたこの例にもれないものである。

明の中世に至り大王五世の孫バベルは獅子王の如き勇氣を以て、中亞のフルガナより起り、祖業を恢復せんとして成らず、轉じて北印度に攻め入つた。時に印度は久しく

印度の衰弱

第三の蒙古帝國

アクバル



后皇び及帝大ルバクア

回教徒及び蒙古人等の外人の侵入があり、且つ印度の佛教は既に唐の中世より衰へ、婆羅門教の一變體たる印度・印度・印度教之に代つて居たが同教徒は外來の回教徒と和合しないで、其國勢の衰へた時であつたから、バベルは容易に印度の北部を定め、德里・德里・德里に都して、第三の蒙古帝國と稱すべき莫臥兒(なまり)帝國を興すことを得た(二一六)。足利義晴時代、西紀一五二六。時に帖木兒大王の死後百二十一年である。

莫臥兒帝國 バベルの孫アクバルは祖父の長所を傳へ、意志堅固にして、王者の徳に富み、また雄略あり、在位五十年中印度以北及びアフガニスタンAfghanistanを統一して、益莫臥兒帝國を盛ならしめ、此帝國第一の英主と稱せられ、莫臥兒帝國の名聲は



タージマハル

タジマハール (Taj Mahal.)

タジマハールは、アクバル大帝以後の莫臥兒帝國の首府であつたアグラ市附近に在る。アクバルの孫シャージハン及び其皇后の陵廟である。シャージハン時代は印度空前の繁榮な時代として名高く、此陵廟は、大理石の建築中に、青玉・瑪瑙・珊瑚等の珠玉を交へ入れて、甚だ美麗である。晴天の晝間此處に至るや、日光赫々、白石と相映じ、目を開け難い程である。月夜の觀望は特に美しいさうである。

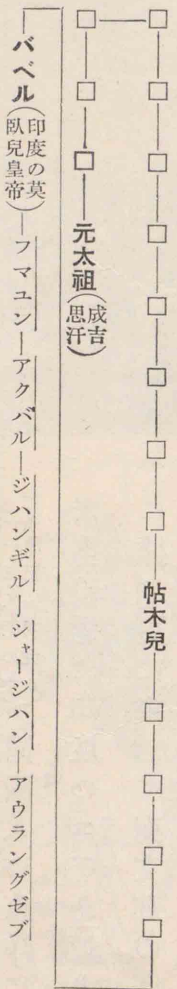
アウラングゼブ

莫臥兒帝國の衰微

歐洲の新機運

漸く西洋にも傳はつた。其後アクバルの曾孫アウラングゼブ Aurangzebの時(徳川綱吉時代)に至り、南印度を征して一時全印度を統一したが、國內の諸教徒を遇すること不公平にして、人民中には漸く反抗する者を生じた上に、其後暗君相つぎ、國勢の漸く衰へたのに乘じて、英國人等が印度を侵略した事は、次編にのべることにする。

帖木兒大王及び莫臥兒帝の系圖



西洋人の東來 亞歐東西二大陸の人は、漢代以來すでに相互に交通し、元の時にも、東西の交通一時盛であつたが、其後百數十年間、又殆んど中絶した。然るに明の中世の頃より、歐洲の機運大に開け、遠洋の航海、新陸地の發見、植民及び貿易の事業、漸く盛となり、西洋諸

國の人は、競ふて東洋に來り、國際的關係を起すやうになつた。
葡萄牙人と西班牙人 當時率先して東洋に來た者は、葡萄牙人で

ある。初め同國人 *Vasco da Gama* ポルチガル が喜

望峯を廻航して、印度に至りしより

（二一五八明の中世、西紀一四九八）同國人の東洋に來る

者多く、遂に印度の *Goa* を取りて之

のに據り、更に東して南支那の廣東近

海に入り、ついで *Macao* 澳門 を取りて、其

根據地とし（二一七五利義輝、時代西紀一五七）また我九

州の平戸にも來り、頗る長く東洋貿

易の利を占めた。次に *Spain* 西班牙 人も葡

萄牙人に次いで東洋に來り、*Philippine Islands* マニラ に

據つて、東洋貿易に従事した。

西洋人東洋に着
眼す

葡萄牙人と澳門

西班牙人とマニ
ラ



葡萄牙人に次いで東洋に來り、*Philippine Islands* マニラ に
據つて、東洋貿易に従事した。

明末の耶蘇教

耶蘇教の東傳 葡萄牙人の東來と共に、耶蘇教士も頗る多く來て、

布教につとめ、耶蘇教はここに三たび支那に流行した。中にも *Jesuit*

イト派の *Xavier* ザビエル 及び

リッチ最も有名である。
Matteo Ricci

ザビエルは印度と我國に

布教して、後支那に向つた

が、廣東近海の上川島に死

んだ。リッチは漢名利瑪竇と

稱し、北京に入り、明の神宗

の許可を得て會堂を建て、

布教に力め、明の徐光啓等其教を信仰した。



(左) 竇瑪利及び(右) 啓光徐の明

西洋人の漢名

第八章 元明の文物

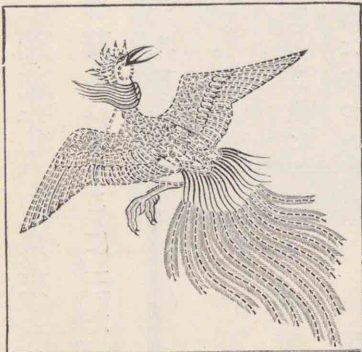
儒學 北方蠻族より起り、戰爭に長じ、喇嘛教の流行した元代にも、



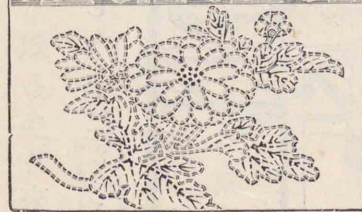
(像畫堂笑晚)明陽王の明

王陽明

り、王・守・仁(號陽明と號す)あり、博學にして獨創の識見に富み、始めて良知の說を唱へ、道は我心に求むべきことを説き、また知行合一の理を教へた。此説は朱子學



致良知



(書の樹藤江中)

學術が尊ばれたこともあり、又一代の名儒もあつた。しかし、皆宋儒には及ばなかつた。明初、方孝孺の凜然たる節義は既にのべたが、其學問も淺くなかつた。けれども明の學者は概して新説を出さず、ただその中世(足利義政頃まで)に至

陽明學

山中の賊と心中の賊

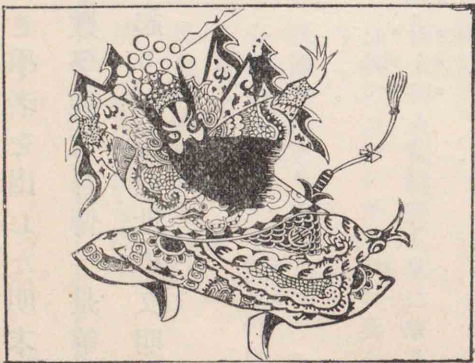
小説・戯曲の發達

に對し、陽明學として世に行はれ、我國の中江・藤樹・熊澤・蕃山・大鹽・中齋(平八郎)等も篤く之を信じた。

良知の知は、知事の知と同じく、主宰の義にて、良知とは天然自然善良なる知といふことを意味し、人の心中の主宰にして、善を知るは良知の端緒であるといふ。次に知行合一の大意は、知は行の始め、行は知の成るなりといふことである。又陽明曰く、破山中賊、易破心中賊、難と適切なる教訓である。

小説戯曲 元明文學の一特色は、小説戯曲

の發達である。三國志・演義・水滸傳などの小説も元代に出でた。北方蠻族を以て建國した元の時代に、小説戯曲の發達したのは、支那文學史上注意すべきことである。科學の進歩 次に此時代の學術の新潮流は科學の進歩である。元の時には東西交通の開けると共に、西方の學術支那に傳はり、



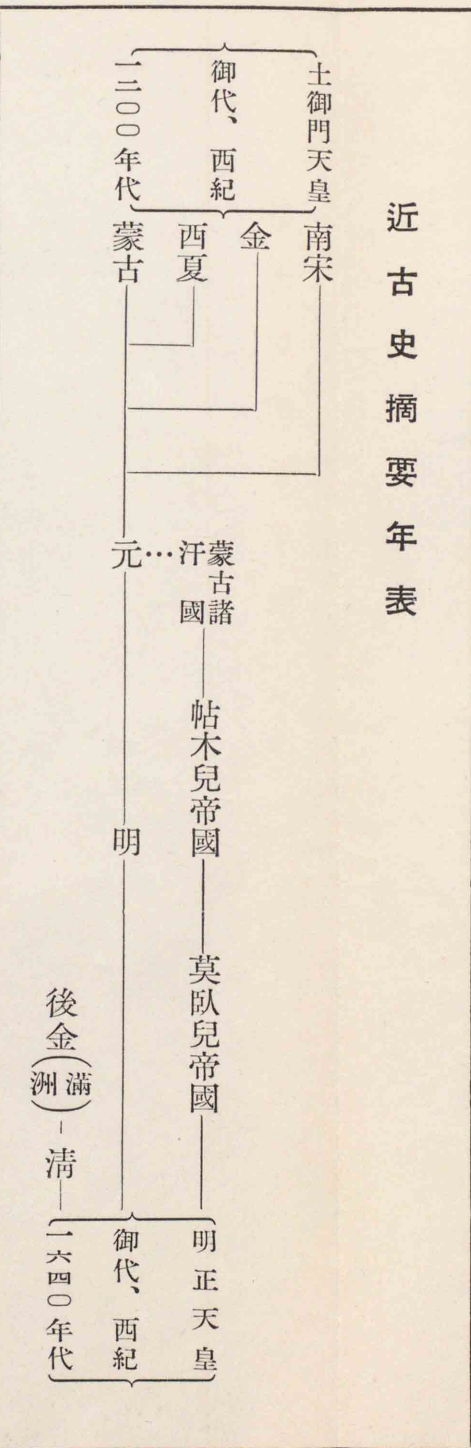
劇演の那支

天文・暦法の進歩
 洋書翻譯

特に其天文・暦法の進歩を助け、郭守敬の如き學者を出した。明末の耶蘇教士等は、布教の傍ら西洋の天文・暦法・數學・砲術を傳へ、是等の學術に關する洋書の翻譯も始めて支那に起り、本邦近世の文明にも影響した。

同 龜山 時宗	一九二〇	一三六〇	元の世祖即位元年	同 義輝	三三〇	一五〇	此頃鞏固、明に入寇す
同	一九三二	一三七三	蒙古國號をたてて元といふ	同	三二七	一五七	此頃「倭寇」明を攻撃す
同	一九三五	一三七五	マルコ・ポーロ元に来る	同	三三五	一五五	葡萄牙人澳門に據る
後宇多	一九三九	一三七九	南宋亡ぶ	同	三四〇	一五〇	西班牙人フィリピン群島を占領す
同	一九四一	一三八一	元軍我國に入寇して大敗す (弘安の役)	同 織田信長	三四三	一五三	伊太利人利瑪竇支那に来る
同	一九二八	一三六八	明興り元亡ぶ、明の太祖元年	同	三五三	一五三	滿洲のヌルハチ(清の太祖)兵を起す
後村上 足利義滿	二〇二九	一三六九	帖木兒中亞を平定す	同 豊臣秀次	二七六	一六六	我國朝鮮をうつ
同	二〇三九	一三九六	朝鮮の太祖(李成桂)元年	同 徳川秀忠	二七六	一六六	滿洲のヌルハチ、後金の皇帝と稱す
後小松	二〇五三	一三九三	足利義滿始めて明に通ず	同 明正 家光	三九六	一六六	後金國號を清と改む
同	二〇六一	一四〇一		同	三九七	一六七	清の太宗朝鮮を降す

近古史摘要年表

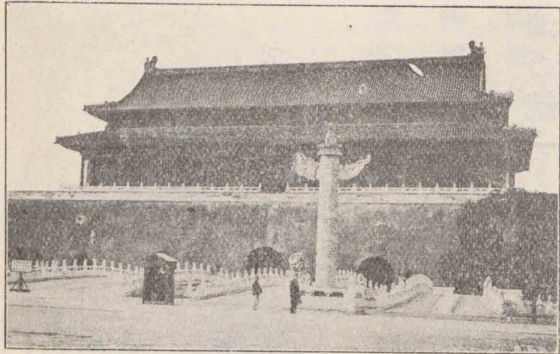


年	皇紀	西紀	重要事蹟
土御門源實朝	一八六六	一三〇六	元の太祖元年 <small>蒙古の鐵木眞成吉思汗と號す</small>
後堀河北條義時	一八八四	一三四	蒙古軍阿羅思に侵入す
四條北條泰時	一八九四	一三四	金の滅亡
龜山時宗	一九二〇	一三六〇	拔都の西征
同	一九三二	一三七三	元の世祖即位元年
同	一九三五	一三五	蒙古國號をたてて元といふ
後宇多	一九三九	一三七九	マルコ・ポーロ元に来る
同	一九四一	一三八二	南宋亡ぶ
同	一九四一	一三八二	元軍我國に入寇して大敗す <small>(弘安の役)</small>
後村上足利義滿	二〇二八	一三六八	明興り元亡ぶ、明の太祖元年
同	二〇二九	一三六九	帖木兒中亞を平定す
長慶	二〇三三	一三九二	朝鮮の太祖 <small>(李成桂)</small> 元年
同	二〇五三	一三九二	朝鮮の太祖 <small>(李成桂)</small> 元年
同	二〇六一	一四〇一	足利義滿始めて明に通ず
後小松足利義滿	二〇六三	一四〇三	明の成祖 <small>(永樂帝)</small> 即位
同	二〇六三	一四〇三	葡萄牙人印度に達す
同	二〇六三	一四〇三	バベル莫臥兒帝國を興す
同	二〇六三	一四〇三	明の王守仁死す
同	二〇六三	一四〇三	此頃韃靼屢明に入寇す
同	二〇六三	一四〇三	此頃「倭寇」明を攻撃す
同	二〇六三	一四〇三	葡萄牙人澳門に據る
同	二〇六三	一四〇三	西班牙人フィリッピン群島を占領す
同	二〇六三	一四〇三	伊太利人利瑪竇支那に来る
同	二〇六三	一四〇三	滿洲のヌルハチ <small>(清の太祖)</small> 兵を起す
同	二〇六三	一四〇三	我國朝鮮をうつ
同	二〇六三	一四〇三	滿洲のヌルハチ <small>後金の皇帝</small> と稱す
同	二〇六三	一四〇三	後金國號を清と改む
同	二〇六三	一四〇三	清の太宗朝鮮を降す

毅宗の殉難

流賊の蜂起

吳三桂の防禦



第四編 近世史

(皇紀二千二百六十年頃より現代に至る迄大約三百年間)

第一章 清の統一

明の滅亡

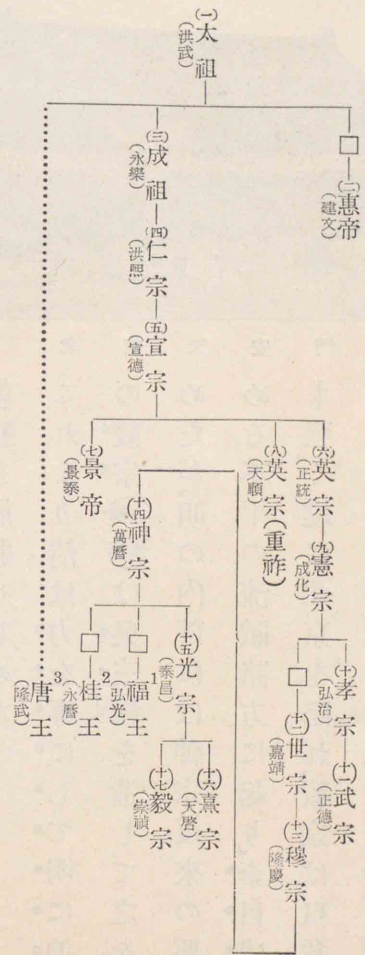
近古時代の末に興つた滿洲の清朝は、既に滿洲族を統

一し、遼東蒙古地方を征服したのみならず、朝鮮を屈服せしめた。

北これより清は力を專にして明に迫つた。明の毅宗(神宗)は吳三桂を遣して之を防がしめたが、明の内部には神宗以來の悪政に苦める不平の流賊諸方に起り、李自成の勢最も強く、遂に北京を陥れ、毅宗は自殺して國難に殉じ、明は十七世二百七十七年にして滅びた。(二三〇四徳川家光時代、西紀一六四四)

明の系圖

(括弧の内は年號なり) 123は明末南方の三王なり



清の統一 明の滅亡に先ち、吳三桂は北京防禦の爲め軍を還したが、其途中、北京の陥落を聞き、遂に清の世祖(太宗)に降り、清軍を導いて、李自成を伐ち、清は容易に北支那を平定した。世祖は乃ち都を北京に遷し、即位の禮を行ひ、(三)家光(四)時代、(五)辨髮の令を下して、滿洲の風俗に従はしめた。時に明の諸王なほ江南に據つて恢復を圖つたけれ

北京遷都
辨髮令

吳三桂清に降る

鄭成功及び其父
母

倭寇と臺灣

臺灣占領

ども、皆敗れ、清は支那本部を統一した。鄭氏の孤忠 時に明の遺臣鄭氏一族は、善く戦ふて、頗る長く清朝に抵抗した。中にも鄭成功最も有名である。其父は鄭芝龍、母は我平戸の人である。初め厦門(建福)に、後は臺灣に據りて、明朝の年號を用ひ、小國家の如き規模を備へた。臺灣は古より



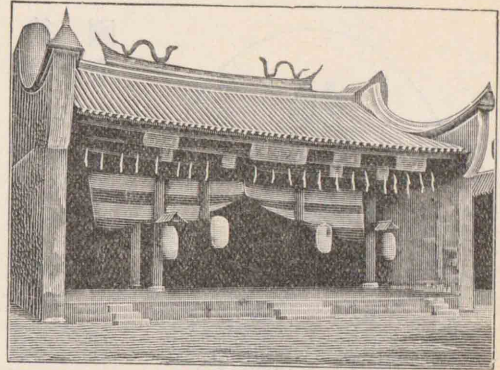
鄭成功の木像(臺灣臺南) 開山神社

支那に屬せず、明末倭寇之に據りて高砂と呼んだ。後和蘭人之を奪つたが(二)八、鄭成功は和蘭人を逐ひて之を占領し、其名聲は西洋にも



北京天壇

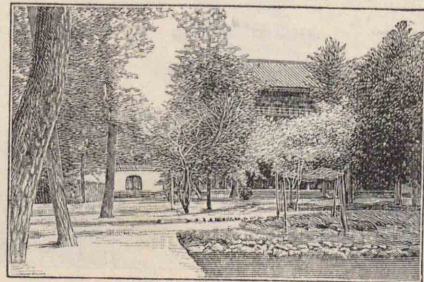
國姓爺



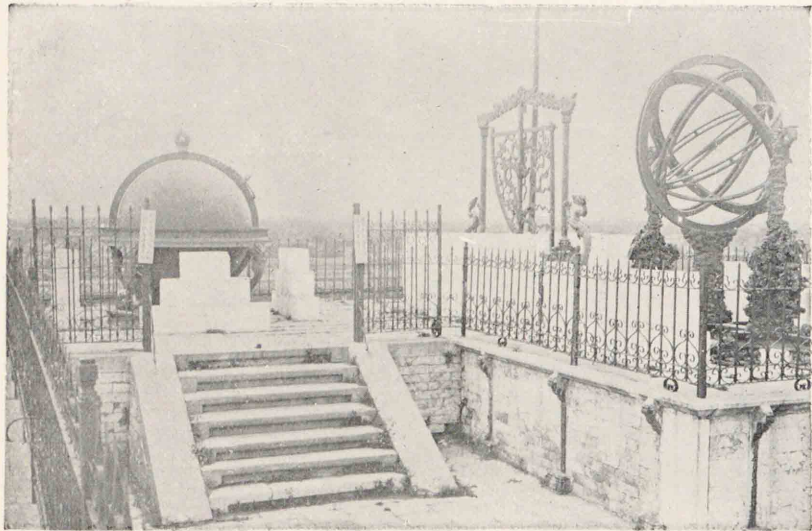
開山神社

傳はつた(二三二一、徳川家綱)。けれども、明朝恢復の志竟に成らず、其孫克塽(サツ)に至つて、遂に清に降つた(四三三)。

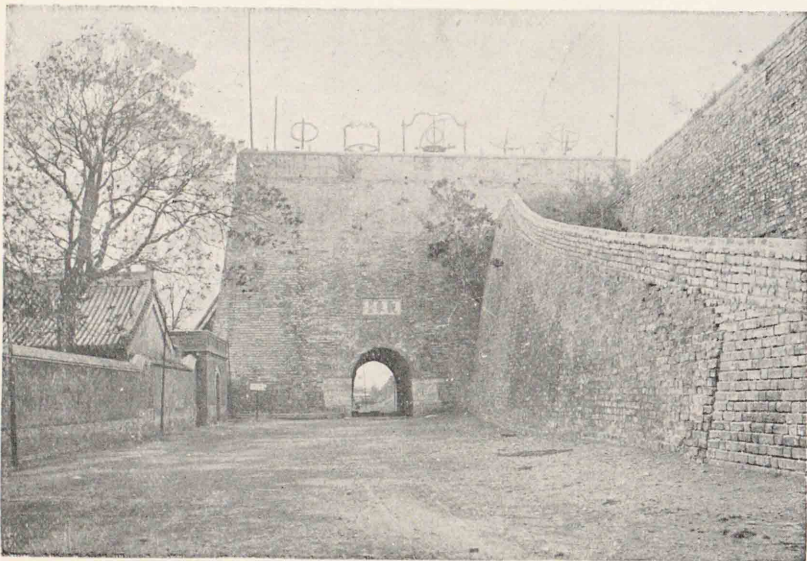
鄭成功は明王より明の國姓朱氏を賜はり、國姓爺と尊稱された。我近松門左衛門の戯曲「國姓爺合戦」は、即ちこの「父は唐土、母は日本の英雄を種として作つたものである。臺灣の臺南縣社開山神社は鄭成功を祭つた神社で、其後殿には成功の母田川氏を祭つてある。また明、清革命の際には、明の遺臣の我國に身をよせた者が少くない。中にも朱之瑜、即ち朱舜水、僧隱元等も有名である。



宇治黃槩山萬福寺



北平天文臺の機械



北平天文臺の外観

北京(今の北平)の觀象臺即ち天文臺は其城壁の上にある。其起源は金時代にさかのぼることが出來、元の世祖の時にも修理改造された。其後清朝時代に至りては、宣教師として支那に渡來した西洋人をして新機械を作らしめて、舊機械に代へた。最近世に至り、明治三十三、四年の北清事變の時、此天文臺を占領した獨逸軍隊は天文機械の一部を本國獨逸に持ち去つたが、世界大戰後の平和條約によりて北平に送還されたので凡て舊狀に復することとなつた。

生為遺臣歿為正神獨有千古

(此對聯は開山神社にある)

生きては遺臣明の遺臣となり、歿しては正神となる獨り千古有り。

今受大名昔受賜姓諒哉完人

今は大名を受け、昔は賜姓を受く、諒なる哉完人(完全の人)。

第二章 聖祖 高宗 清露の交渉

祖業の大成 清は第三世の世祖に至りて、略支那を統一し、其子聖祖(康熙帝)に至つて、ますます祖業を大成擴張した。

聖祖康熙帝 康熙帝は在位六十一年(徳川家綱・吉家宣の家繼・吉宗の時代)の間、まづ明の降將にて南方の大藩に封ぜられた吳三桂等の叛亂を平げ、又明の遺臣鄭氏を降して臺灣を取り、尋て親征して蒙古を併せ、更に西藏及び青海地方を征服した。

在位六十一年
武功

文德



帝はまた大に内治に注意し、親ら孔子廟に謁し、且つ明末以來の學者を重用して、漢人の心を收めた。特に明の太祖の陵に謁し、敬意は表はした事などは、尋常の君の所爲でないと思ふ。

在位六十年文武の功業

高宗乾隆帝 康熙帝の子世宗(雍正)を経て、其孫高宗(乾隆)の代となつた。帝も亦在位六十年(徳川吉宗家重家治家齊時代)の久しきに及び天山南北兩路を平げ、緬甸安南及び明末に我山田長政が武功を立てた暹羅等の後印度諸國を降し、其武功赫々たるが上に、學術獎勵の事業も亦大であつた。けれども、戦役行幸の爲に金穀



(帖眞寫洲滿)帝隆乾宗高

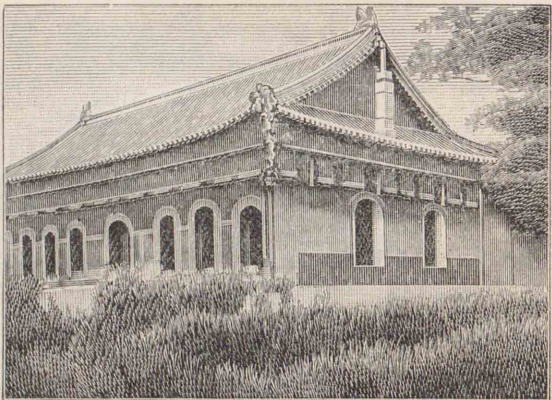
明の中世以前の露西亞

滿洲北部侵入

康熙帝とピーター大帝

を費すこと多く、清朝財政難の一原因は此時代に起つた。清露の交渉 清朝極盛の時、既に將來の清國のみならず、他の東洋諸國にも大關係のある露西亞の東方侵略漸く甚しくして、遂に清露の交渉を見るやうになつた。

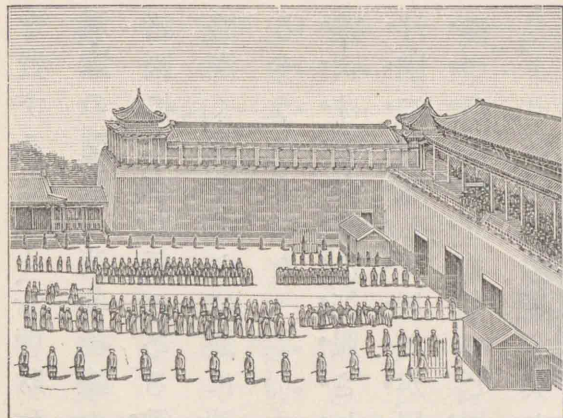
露國は蒙古人に征服されし後、多年欽察汗國に屈服して居たが、同汗國の衰ふるや、つひに獨立して(明世)同汗國を滅した。是より露國の勢漸く興り、コサック部をして次第に地を西伯利亞に拓かしめ、清初に至りては、つひに滿洲北部に侵入した。



(眞寫)(京北)宅住教主會教正亞西露の來以熙康

康熙帝は乃ち支那本部平定の餘威を以て露人をうち、且つ書を露國のピーター大帝に送りて、境界の協議を求め、清露の使臣は尼布

礎(外カルバイ州)に會して、外興安嶺を兩國の界とし(二三、四九、德川綱吉、以て露人の南下を防いだ。この交渉が大體清國に有利にして、近世支那の外交史上頗る榮譽の條約を結んだのは、當時清國の國力が充實して居た爲である。)



乾隆時蒙古人北京入京の圖

第三章 邊外の征服 清の文物

邊外の征服 前章にのべしが如く、康熙帝以來一百數十年間に征服して、清の領地としたのは、内、外、蒙、古、西、藏、青、海、天、山、南、北、兩、路、及、び、臺、灣、で、安、南、暹、羅、緬、甸、等、の、諸、國、も、之、を、降、し、て、清、の、勢、力、範、圍、と、し、た、の、み、な、ら、ず、朝、鮮、も、既、に、朝、貢、の、國、と、し、た、か、く、て、清、國、の、面、積、は、大、體

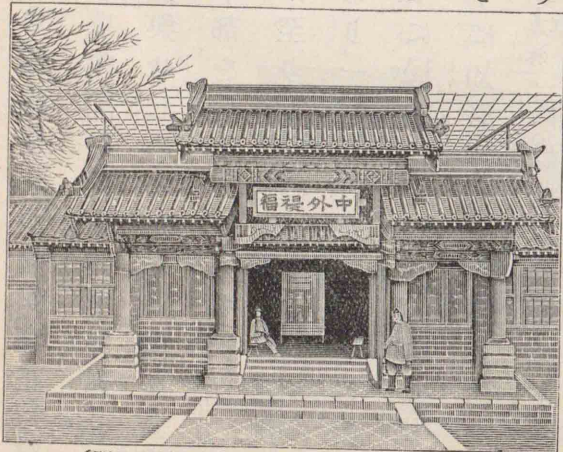
清國の全盛と其
惡弊

虛榮と實利

内閣

東亞大陸の十分の九を占め、邊外諸國皆其國威に服し、一時の隆盛は漢唐の上に出た。けれども其國運隆盛の結果、支那人をして、益々驕慢自尊、外國輕侮の惡習慣を生ぜしめた。且つ清朝の征服諸國に對するや、ただ朝貢的虛榮を喜び、植民、通商の實利を重んじなかつたのは、漢唐二朝以來の慣習で、ひとり清朝を責むべきでないが、近世に於て實益に力めなかつたのは、失策であつた。

制度 清朝が右の大領地を統治せんが爲に設けた制度は、大抵康熙、乾隆の間に大成された。中央政府初めは内閣に大學士、協辦大學士を置いて、天下の政を總理せしめ、其下に、吏、戶、禮、兵、刑



總理事務衙門(通稱總理衙門)

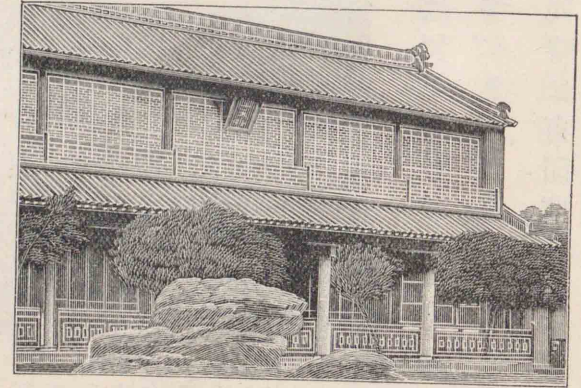
六部
軍機處と軍事内閣
十八省
新疆省
東三省
藩部
明末及び清朝の新學風

工の六部(長官を尙書、次官を侍郎とす)ありて、政務を掌つたが、雍正以後、特に最近世界大戦中の英佛二國の軍事内閣に比すべき軍機處を設け、軍機大臣をして天下の樞機に參與せしめたから、内閣の實權は大抵此に移つた。(地方行政)支那本部を分ちて十八省(直隸、山東、山西、河南、江蘇、安徽、浙江、江西、福建、廣東、廣西、湖南、湖北、陝西、甘肅、四川、雲南、貴州)とし、最近世に至り(明治十一年)天山南北兩路も之を一省(新疆)とした。省の下に府、州、縣あり。一省又は二三省毎に總督を置きて、文武の權力を握らしめ、其下に民治の巡撫と軍務の提督あり、共に毎省一人を常とした。尙其下に知府、知州、知縣等ありて、其管内を治めた。次に滿洲の東三省(盛京、吉林、黑龍江)には將軍及び府尹(尹)を置いたが、後支那本部と同じく、總督、巡撫を置いて之を治めしめ、藩部(蒙古、西藏の外藩)は、皆理藩院に屬せしめた。

學術 宋代以來の儒者は、哲學的説明を主とし、やや空論の弊を生じたが、明末以後、其反動として、古典を緻密精確に研究する考證學

日・支の西洋學術
西洋人の東漸

風起り、顧炎武、黃宗義等は、新學風の首唱となり、清の史學、地理學、文字學、考古學等大に發達した。また康熙、乾隆の間には、勅撰の大著、少からず、中にも康熙字典の如きは、我國にも廣く行はれて居る。尙また康熙帝は西洋の人南懷仁(原名フエール)を天文臺の副長とし、西洋の學術にも注意した。かくて支那近世に於ける西洋學術は、我國より早く開けたが、其發展利用は、つひに本邦に及ばなかつた。



(縣杭道塘錢省江浙) 庫書閣濶文

第四章 英國の東方經略

蘭英二國 明の中世に起つた西洋人東漸の勢は、近世に至りて益々

烈しくなつた。

和蘭人は明末より東洋貿易に従事したが、先來の葡萄牙・西班牙兩國人と競争して之に勝ち、瓜哇

ジャバ

和蘭人と瓜哇

のバタビヤに其政廳を置き

（二二九）更に一時臺灣を占領し

蘭人と長崎

（八二四）德川家、我長崎の出島

に居留して、盛に貿易

英吉利人と印度

を行つた。英吉利人も和蘭人と

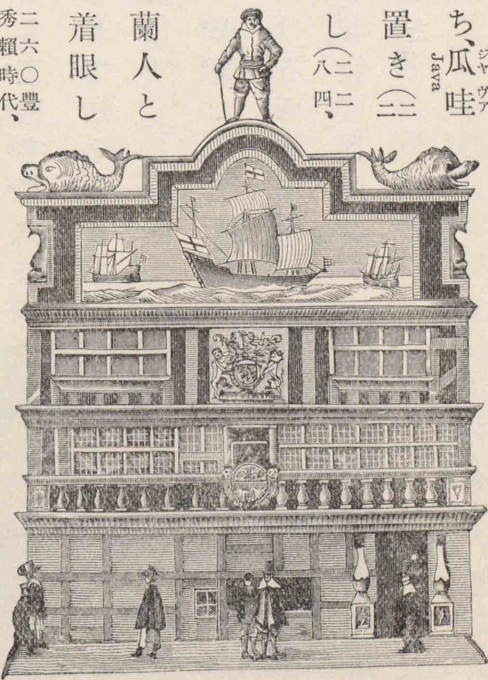
略、同時に、東洋の利權に着眼し

て、東印度會社を立て

（二二六〇）西紀一、着々葡萄牙人を壓倒した。此會社は貿易會社たるとともに、

後には、統治機關となつたこと、特に注意すべきである。

英佛競争 佛蘭西人も亦英人も殆んど同時に東印度會社を立て

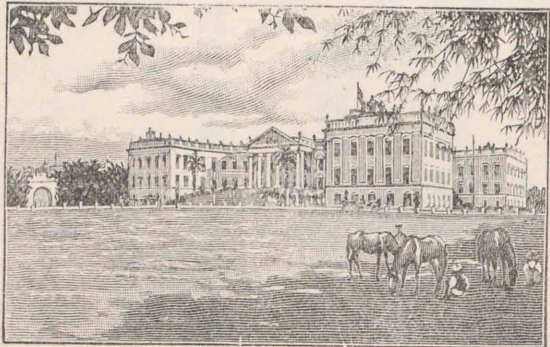


（初清末明）社會度印東國英

東印度會社の特色

英人クライヴの勝利

莫臥兒帝國の滅亡
印度女皇
英人と後印度諸國



カールカッタ印度政廳

（二二六四）德川家、各莫臥兒帝國の衰運に乗じ、競ふて印度を侵略した。競争の初は、佛人が優勢であつたが、其後英國東印度會社書記出身のクライヴ善く戦ひ、大に佛軍をブラッシーに破り

Plassey

（二四一七）德川家、英人の威力を印度に輝かした。時に清朝の乾隆年間である。

英領印度 クライヴ及び初任のベンガル

總督ヘステイングス以後の諸總督は、漸く莫

臥兒帝國を蠶食し、つひに其皇帝を廢して

（二五七四）西紀一八五七同帝國を滅し、つひに英國女皇ヴィ

クトリアは印度女皇の位を兼ねるに至つ

た（明治）其後英國は緬甸を併せ

（明治）馬來半

島の諸國をも保護國とした。

古來全印度に完全なる統一なく、英國の統治に至りて、始めて、普遍的統一に近

英領印度と土地王侯領

き施設あることとなつた。けれども印度と稱する語は、英領印度と土地王侯領とを包有する者で、後者の數は、全印度を通じて、六百餘に達し、其面積は全印度の約三分の一を占めて居る。

第五章 阿片戦役

阿片戦役

康熙乾隆の全盛時代の後は、清の憂患時代となり、阿片戦役に至りて、始めて一大外侮を受けた。此戦



林役は實に前章の英國の東方經略と關係する則者である。英人は既に印度に勢力を得てから、徐盛に印度の阿片を清國に輸入した。清人は其金錢を費し、時間を失ひ、また心身を害するこ

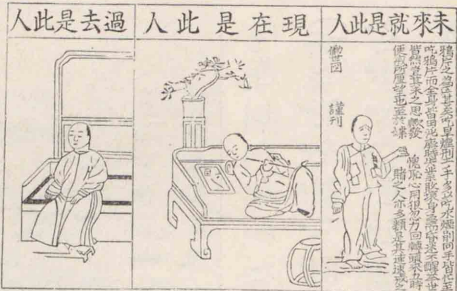
と甚しきを以て、其輸入を禁じたが、猶密輸入が行はれたから、乾隆帝の孫宣宗(道光)の時、欽差大臣林則徐は廣東英商の阿片を焼き、遂に其通商を禁じた。

林則徐の決斷

英領印度と阿片阿片の害

英・清の開戦

香港英領となる



未(惡意)來(衰弱)現在此(健康)去過の烟吸片阿
人此是去過 人此是在現 人此是就來未

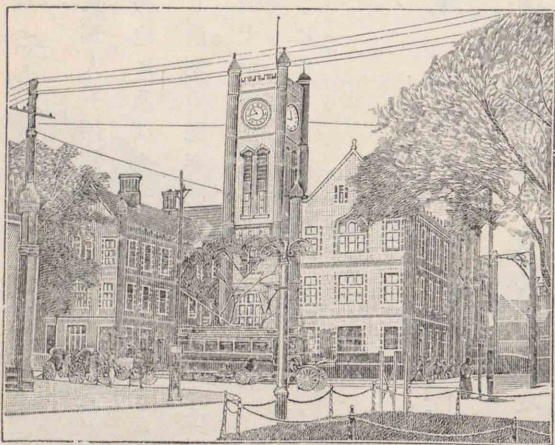
阿片戦役 是に於て、英國艦隊は、貿易保護を名として、廣東、廈門、寧波、Amoy, Ningbo, Hangzhou等の諸港を攻撃し、遂に南京に迫つた。

南京條約 清朝も是に至りて大に恐れ、南京

に於て和約を結び償金(二百萬)を出し、五港(上海、寧波、廈門、福州、廣東)を公

開し、且つ香港を割譲した。Hongkong

然るにこれより後も阿片の禁止行はれないのみならず、清朝の國威漸く衰へた。又この後清國と西洋諸國との條約次第に締結せられ、國際關



上海海關

係愈密接となつた。

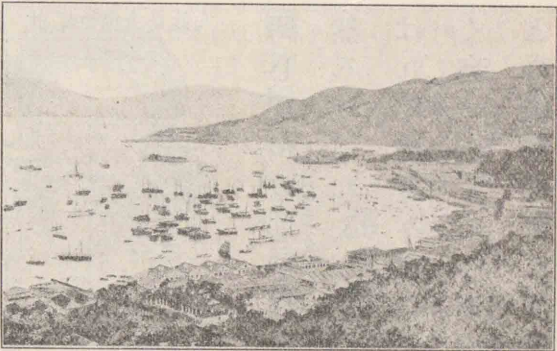
近年に至り、支那人も阿片吸烟の心身の兩者と經濟上、風俗上其他に及ぼす害毒の甚だ大なることを痛切に感じ、清朝の晩年、既に阿片嚴禁の上諭を下し、(四一)禁烟大臣を任命し、人道の爲め賀すべき傾向あるやうになつたが、禁烟の實績はまだ擧がらない。

三学期

第六章 長髮賊 英佛軍の侵入

長髮賊 清朝既に外國に敗れて、また内亂

に苦しめられた南京條約後八年に至り、洪秀全は亂を廣西に起し、(三五)清を討ち、明を興すと稱して、漢人の心を收め、耶蘇教に附會して、外人の意を迎へ、國を太平天國と號し、其勢頗る猛烈、遂に南京を取つて之に都した。これが即ち長髮賊(剃頭辮髮しない故に)である。時に官軍弱



香港

洪秀全の策略

太平天國

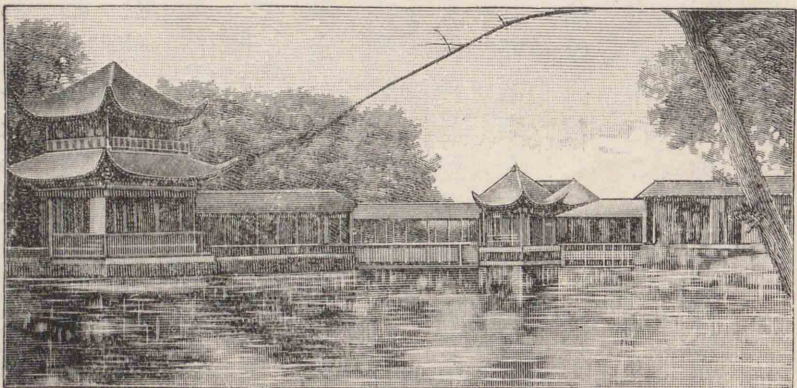
洪秀全南京に據る

くして之を平げることが出來ず、宣宗の子文宗(咸豐)の時に至り、曾國藩首として義勇兵を起して、賊軍を破つたが、賊勢はまだ挫けるに至らなかつた。

曾國藩等の諸名臣

曾國藩は文正と諡し、近世支那の文武兼備の名臣である。湖南の出身にして左宗棠、胡林翼等の諸名士も同地より出た。安徽の李鴻章も實に曾國藩の推擧によつて立身したものである。曾國藩は奉公の精神に富み、且つ平生修養に注意し、勤儉自ら持し、勞に習ひ、苦に習ひ、早起を貴び、恒心を貴び、意を克己の工夫に致した。

英佛の聯合 時に廣東の官吏が英船(ア)を搜索し、乗組清人の犯罪者を執へた



曾國藩の祠 (湖南省湘江道長沙縣)

英・佛聯合軍北京を陥る

ワルド及びゴル
ドン

亂後の清國



ゴ
ドル
ン
軍を助け、曾國藩・李鴻章等奮
戦して南京を恢復し(三二五)洪
秀全は自殺し、餘賊も次第に
平定された。この亂の前後十
五年、其禍を被つた處は十六
省に互り、清の國力の疲弊す

事があつた上に、佛國の宣教師も廣西で殺されたから、英・佛は聯合して、北清を攻め、遂に天津に迫つて、清國と和議の假條約を結んだ(二二八)。然るに其翌年、清國は其批准交換の公使を砲撃したから、二國の兵は天津、北京を陥れ、遂に北京條約を結び(二五二)孝明天皇(御代西紀一八六〇)清國は償金を出し、基督教の布教を許し、新に七港(牛莊、芝罘、漢口、九江、汕頭、瓊州、臺灣)を開いた。

長髮賊平定 此外患の爲めに、長髮賊の平定が大に後れたが、文宗の子穆宗(同治)に至つて、米人ワルド・英人ゴルドン(文宗等相ついで官

るとともに、外國の壓迫は、益、甚しくならうとして來た。

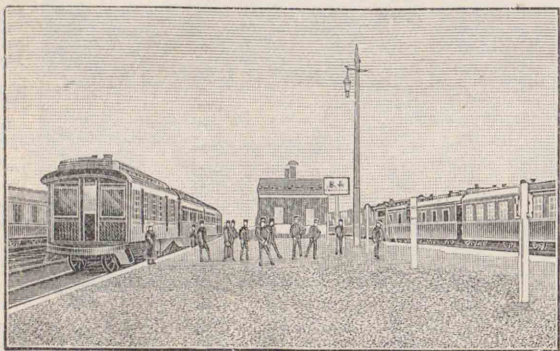
當時官軍を助けたる西洋人の率ゐた義勇的砲兵隊は、到る處に勝利を得た故に常勝軍とよばれた。ゴルドンは特に大膽にして勇氣あり、其戰に臨むや、常に一鞭と一雙眼鏡とを携へ、戰線に出入して、號令指揮平生のやうであつたといふ。

第七章 露國の滿洲經略

滿洲經略 露國東略の鋒も、康熙帝の世、一

ムラヴィヨフ總督

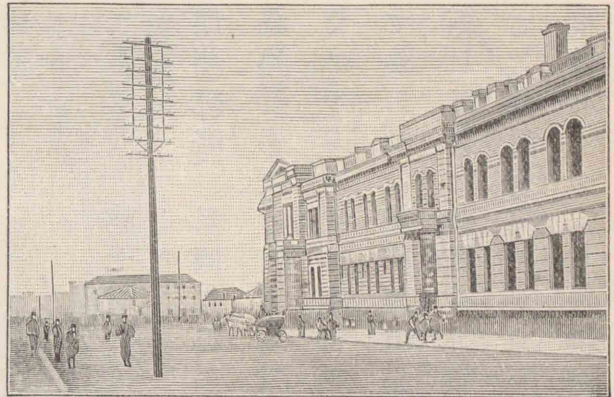
時挫折したけれども、常に好機を窺つて居た。ムラヴィヨフが東部西伯利亞總督となつてから、頻に滿洲經略を計り、遂に長髮賊の亂に乗じて、黒龍江北の地を占領し(二二八)尋で英・佛聯合軍が北京を陥れるや、露國は講和の事に周旋した報酬として、烏蘇里江以



滿洲・長春停車場

浦蘆斯德

露領樺太を占領す

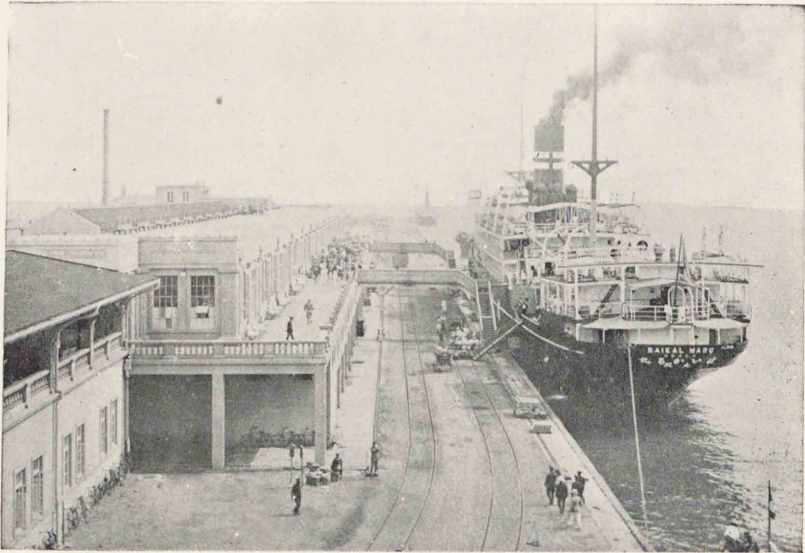


東の地を取り(三五)其南端に浦蘆斯德港
 浦を開き、つひに東方經營の根據地とし
 潮た(明治五)。

斯満洲經略の餘波 是に於て露國は漸く
 朝鮮の北境を壓するやうになり、なほま
 の露國は我國と交渉し、千島と換へて樺
 太島を得たから(明治八)日本海北部沿岸の
 露領樺太及び一大島は悉く露國の領地とな
 行つたのである。

第八章 露國の中亞細亞經略 伊犁事件

中亞經路 露國の地慾は東方の經略に満足しないで、中亞にも及



大連埠頭汽船碇泊の狀



大連市役所前の壯觀

露國の地慾益、
大となる

露國の伊犁占領

伊犁條約

アフガニスタン
問題

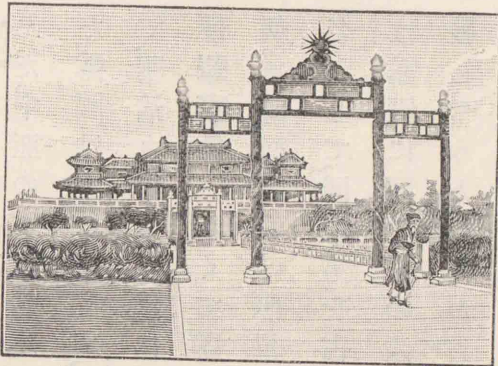
んだ。中亞の地は帖木兒大王の死後分裂紛争して、強い國がなかつた。露國は之に乗じて、康熙帝の頃より之に着眼し、漸く之を侵略して、明治九年の頃迄には、Amu河以北の地は、悉く露國の有とした。**伊犁事件** かくて露國は次第に清國の西北境に接近した。そして偶、清國同方面の伊犁北路山に回教徒の亂あるや、露國は邊境鎮撫を名として、同地方を占領した(明治)。清の將左宗棠は其亂を平げ、清國は露國に同地方の還附を求めたが、露國は之に應ぜず、兩國將に開戦しやうとしたが、曾紀澤(曾國藩の子)は露國に使用して協議し、Khovosゴルゴス河(伊犁河の支流)を兩國の境界とし、且つ清國より償金(九百萬ルーブル Rouble)を出して局を結んだ(明治)。**英露衝突** 露國は更に中亞侵略の鋒を南に進めて、印度洋方面に向はうとした。印度を領せる英國は無論之を喜ばず、アフガニスタンAfghanistanの後援となつて、之に反對し、遂に英露二國の委員は會議して境

パミール問題

界を定めた(明治)。また中亞のパミール地方も清英露特に英露二國の利害衝突の地となつて、紛議を生じたが、二國は協議して同地方に於ける二國の勢力範圍を定めて、其局を結んだ(明治)。

第九章 佛國の印度支那經略 清佛戰爭

佛帝ナポレオン三世の東方經略



安南の首府エヌ宮殿

佛國と安南 さてまた佛蘭西は清朝の初から安南に着眼し、遂に其地の王族阮福映を助けて、越南國を建てさせ(二四六二徳川家齊時代)、且つ基督教布教に力めた。されども、安南人は佛人に親まず、また其布教に政治的意味ありとて、排外の心を起し、屢、其宣教師を虐待したから、佛帝ナポレオン三世は柴棍を占領して越南に迫り、終に交趾支那の地と償金を

佛領印度支那の成立

印度支那半島と西洋列強

を得(二五)且つ柬埔寨も其保護國とした。これより佛國は愈々侵略を逞しうしたから、越南王は長髮賊の殘將劉永福をして佛軍を伐たしめたが、國都順化府の陥るに及んで、佛國の保護國となり、且つ東京地方を割いて講和した(明治)。

清佛戰爭 然るに、清國は越南を以て其外藩なりとして、此講和を黙視せず、劉永福を助けて佛軍を攻撃した爲め、清佛二國の和親忽ち破れ、佛國の海軍は福建地方を攻め、且つ臺灣の諸港を封鎖した。李鴻章は乃ち佛國公使と會議して、和約を結び、清國は佛國の東京地方占領を承認した(明治)。是に於て佛領印度支那成立し、さきに印度に於ける英人との競争に失敗した佛人も、此方面に於ては成功した。

佛暹關係 ついて佛國は、メコン河東の地は、曾て越南及び柬埔寨に屬せりと主張して、暹羅に迫り、同河を以て佛國領地と暹羅との

境界となさしめた(明治二六)是に於て一時は大體清朝の藩屬のやうであつた印度支那半島方面の諸國も、暹羅を除くの外、西洋強國の領土となつた。

第十章 清國に對する諸強國の壓迫

(一) 北清事件に至るまで

總説 清國は外患を被ること、道光以來既に五十餘年である。最近世に至つて西洋列強の壓迫益甚しく、清朝前半の隆盛と、後半の衰弱とは、相對して、非常の相異がある。今之をのべるについて、東洋諸國の關係より説き起さう。

臺灣征伐 清國は第十世の同治帝に至つて、明治維新の我國とも新に和好の條約を結んだが(明治四)我琉球の漁民がたま／＼臺灣に漂着し(明治五)生蕃に殺されたので、我國は清國を責めたが、要領を得

日本の清との關係

大院君の鎖國主義

日本と朝鮮の開國

ぬために、生蕃を征服した(明治七)清國は俄に異議を唱へたが、遂に償金(五十萬兩)を出して和議を結んだ。其後我國の琉球に沖繩縣を立てた時、清國は又異議を唱へた。かくて日清兩國の感情和合せず、遂に朝鮮に於て衝突するやうになつた。



朝鮮開國 さて朝鮮は、明治維新のはじめ、第二十六世の國王(後の李太王)位にあり、年なほ幼にして、生父大院君(李顯)政君を攝し、固く鎖國主義を執り、我國より開國通商を勧めても之に應じないの

みならず、反つて我軍艦(雲揚號)を江華島(仁川灣内)に砲撃したので、我國は使節を朝鮮に使い、遂に朝鮮をして通商條約を結び、釜山及び元山、仁川を開港せしめ、且つ其獨立國たることを確認した(明治九)是に於て歐米諸國も亦我例に倣つたが、朝鮮はなほ清國に對して外藩の

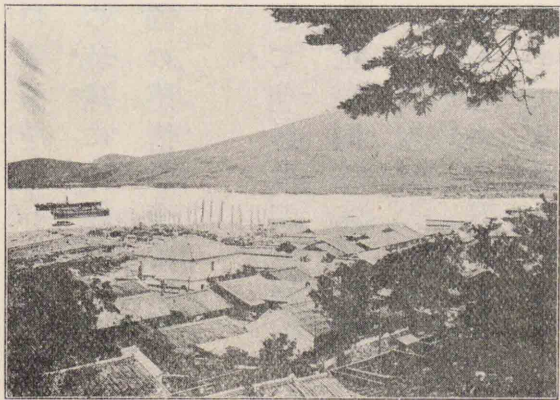
朝鮮の二黨



禮式を執つて居た。
朝鮮の内訌と日清の交渉 此頃朝鮮
金 玉に獨立黨事大黨の二黨あり。獨立黨は
均 大體我國に依つて、獨立開國の實を全
くしやうと

獨立黨と事大黨との争

し、事大黨は所謂大國(清)に事へて、其國を
保たうとする者である。
既にして獨立事大二黨の争益甚しく、獨
立黨の金玉均・朴泳孝等兵を擧げて、事大
黨を撃ち、國王を擁して、我公使の援を求
めたのに對して(明治)清國は事大黨を助
けて獨立黨を破つたのみならず我公使
館を襲つた。是に於て我國は使節を朝鮮



(眞寫) 山 釜

天津條約
事大黨の勝利

日清戦役の導
火線



李 鴻 章

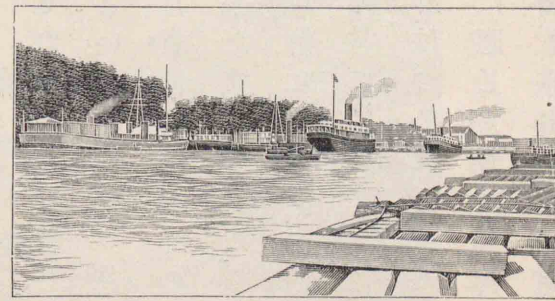
に遣はして、善後策を講ぜしめ、また特に伊藤博文を清國に遣して、
李鴻章と天津に會議して、日清兩國の朝鮮守備兵を撤去し、且つ將
來に於て軍隊の派遣を要するが如きことの起れる時は、兩國は互
に通知すべき事を約した(明治)之を天津條約といふ。時に獨立黨は
多く國を去り、事大黨要路に立ち、清國の駐在官袁世凱は朝鮮の政
治に干渉し、朝鮮に於ける清國の勢力は一時甚だ盛であつた。
日清戦争 天津條約の後、約十年を経てから朝鮮に東學黨の亂が

起つた(明治)その勢は非常に猛烈にして、制
し難いことを知り、朝鮮はつひに援を清國
に乞ひ、李鴻章はこれに應じて直に大兵を
發した。こゝに於て、我國も亦出兵して、朝鮮
在留の國民を保護することとなり、且つ日
清兩國協力して、朝鮮の政治を改善せんこ

下、關係約

獨・露・佛三國の
干涉

とをしたしく清國に勸告した。
然るに清國はなほ朝鮮を藩屬の如くに觀て、我勸告を拒絶したの
みならず反つて我國に對して撤兵をすら求
めるに及んだので日清の國交ここに破れて、
其の戦端陸は成歡驛に、海は豊島沖に始まり、
山縣有朋、伊東祐亨等の率ゐた我陸海軍は連
戦連勝して、非常の優勢をしめした。
清國はそこで、李鴻章等を我國に遣し、伊藤博
文・陸奥宗光と下、關に會議し、清國は朝鮮の獨
立を認め、償金(大約三億圓)を出し、遼東半島及び臺
灣、澎湖列島を割譲し、且つ沙市(湖北)、重慶(四川)、蘇州
(蘇江)、杭州(江浙)を開放することを約定した(明治二八年)。
三國干涉 かくて我國は名譽ある戦勝國となつた。然るに歐洲列

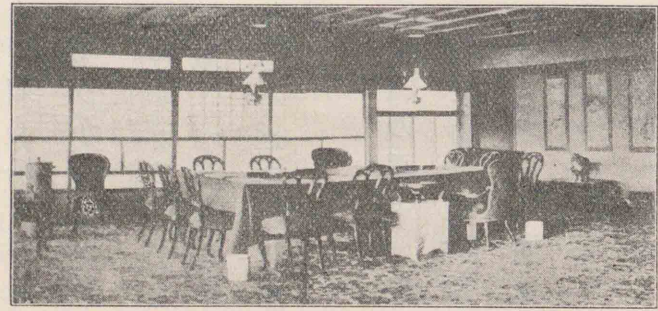


天津紫竹林泊舟處

遼東半島還附

歐洲諸強國の支
那の要地租借及
び利權獲得

國中、我國の隆盛を悦ばぬ者があり、露獨佛三
國は協同して、遼東半島の還附を勸告したか
ら、我國は深く時局の大勢(遼東還附の詔の中の字句)を察し
之に従ひ、代償金(大約四百萬)を受けて、遼東半島を
清國に還附した(明治二八年)。
諸強國の壓迫 日清戦争後、歐洲列國は清國
の弱點を看破し、競ふて清國を壓迫し、佛國は
先づ佛領印度支那に近き廣東、廣西、雲南の鑛
山採掘權を得(明治二八年)、露國は滿洲鐵道の敷設權
を得(明治二九年)、獨逸は其宣教師の殺されたのを口
實として、償金の外に九十九年間膠州灣(山東)租
借の權を得(明治三一年)、ついで露國は更に旅順口(奉天)及び大連灣(奉天)の二港
を(明治三一年)佛國は廣州灣(廣東)を借り受けた(明治三二年)。



日清講和談判場(上樓樓帆春關、下)

英國も其清國に於ける勢力平均の上より列國の進取を傍觀せず、威海衛(東)を租借して(三一治)權衡を保つた。是に於て清國南北の良好なる軍港は、多く西洋列強に租借せられた。かくの如くにしてどうして一國の完全なる國防を談ずることが出來やうか。

北米合衆國と東洋及び西洋

當時、從來亞細亞方面に其領地のなかつた北米合衆國も、東洋及び南洋に着眼して、布哇國を併せ(三一治)、また西班牙と戦ひ、之に勝ちて、遂にフィリッピン群島を得た(三一治)、又伊太利の如きも、浙江省の三門灣を要求したけれども、清國

は之に應じなかつた。

康有爲の改革計畫の失敗



康有爲の改革黨 かくて清國の國歩益、艱難となり、有志の清人は大に憤慨して、改革、自強の說を唱へた。德宗(光緒帝)は、つひに廣東の學者康有爲の說を納れて、政治の改革を計つたが(三一治)、清廷の老臣及び滿洲人多く之

義和團と保守派

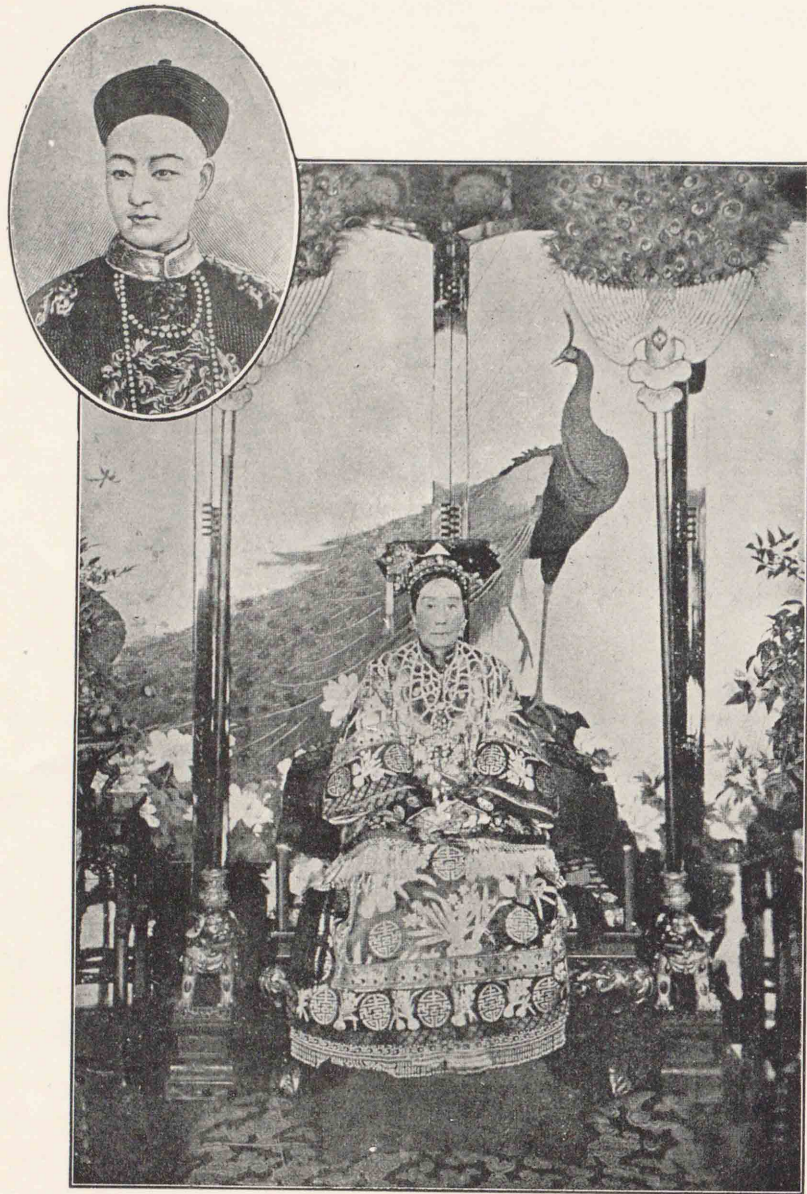
を悦ばず、西太后(咸豐帝妃)を擁して政を聽かしめ、帝を幽し、改革黨を除き、排外保守の氣運また盛となつた(三一治)。

義和團の亂 既にして山東地方に耶蘇教の撲滅と、外人の排斥とを旨とした義和團といふ暴徒起り(三一治)、皇族端郡王等の保守派は、寧ろ之を保護する狀があつたから、團徒益勢を得て、遂に北京に入り列國の公使館を攻撃した。

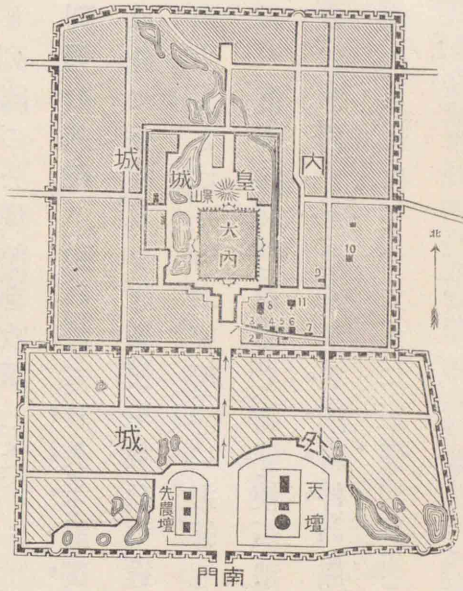
列強の進撃 是に於て、日・英・米・露・獨・佛・奧・伊の東西八強國の聯合軍は、急に公使及び居留民を救ひて、遂に北京を占領した爲め、德宗と西太后とは、一時西安府(陝)に避難し、慶親王、李鴻章は列國代表者と議し、償金(四億五千萬兩)を出し、謝罪使派遣、各國の北京駐兵、公使館保護等の事を約して、此所謂北清事件の局を結んだ(三四治)。而して清朝の運命はこれによつて大に短促されるやうになつた。

列國と清との講和

北清事件の際、我國軍隊の精銳にして、其規律の嚴肅なることは、廣く各國に認



光緒帝及慈禧太后



(門南 北)

解 說
 北京城總周圍……九里許
 內城周圍……六里許
 外城周圍……四里許
 皇城周圍……二里半許
 大內周圍……一里許

- 一 列國公使館等位置
- 二 獨逸
- 三 北米合衆國
- 四 露西亞
- 五 西班牙
- 六 日本
- 七 佛蘭西
- 八 伊太利
- 九 英吉利
- 十 白耳義
- 十一 清國總理衙門
- 十二 清國總稅務司
- 十三 羅巴
- 十四 軍隊進入路

められたが、清國も亦我國の義勇に感じて、我國に依頼するの念を起し、或は官吏を派して、我制度・文物を視察せしめ、或は多く留學生を遣して、我諸學校に入學せしむるやうになつた。

光緒帝及び西太后

- (一) 德宗光緒帝は、其在位三十四年(自明治八年至四十一年)、國家内外多事の時にあたり、天資聰明にして進取の氣象あり、政を勤め民を愛するを本とし、特に其進歩的思想によりて、政治の改革を圖り、大に爲す所あらうとしたが、平素多病、其志を果さずして崩じた。其遺詔の中にいふ、庶幾はくは九年以後、立憲を頒布し、克く朕の未だ果さざるの志を完うせば、在天の靈よりて以て稍や慰めん。と以て其素志を察することが出来る。
- (二) 西太后は、もと咸豐帝妃であつた。同帝の崩後、大約五十年、垂簾の政を聽き、國歩艱難、内憂外患、頻に至るの時にあたり、よく人心を收め、人才を統べ、政治家的才智のあつた皇太后として有名である。

朝鮮國號を韓と改む

露國と朝鮮

露國滿洲を占領す



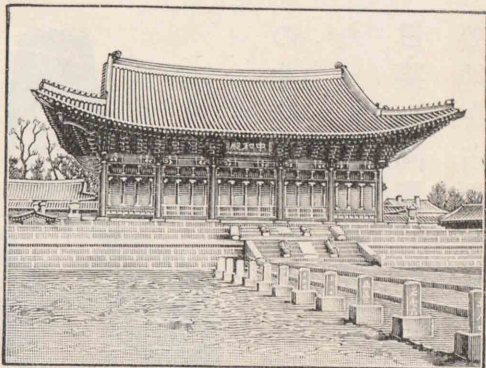
韓 國 皇 帝 (後李太王)

(二) 北清事件以後

朝鮮の獨立 さて朝鮮は日清戰役の終局を告ぐるや、下關條約の結果、我國のために獨立國の名義完全し、清國に對する朝貢の禮をも廢することとなり、國號を韓と改めた(明治)。而して我國は益熱心に之が扶植に力めた。しかるに、これより先、英佛軍の北清侵入の頃より、漸く韓國の北境を壓迫した露國(頁四十八参照)の勢は、次第に朝鮮に加はるやうになつた。

日英の同盟 ついて露國はかの義和團の亂に乗じて、著々滿洲の要地を占領してやまず、その志す所測る可からざるの様子を示す

日・英同盟の目的
滿洲撤兵の宣言



宮 運 慶 城 京 國 韓

に至つた。
ここに於てかその利害について共通一致の點を有する日・英兩國は、同盟を結んで(三)清・韓の保全に加へるに又東亞の平和を(五)圖るを以て目的とするに及び、露國もつひに十八箇月間に於て必ず撤兵すべきことを宣言した(三)明(五)治。

露國の不誠實

實行しないのみならず、韓國に於ける我國の權利を侵害し、韓國の安全をも危くするやうな狀があつた。是に於て我國は誠實なる妥協によつて時局を解決しやうと切望したが、露國は之に應じなかつたから、



日露の戦役

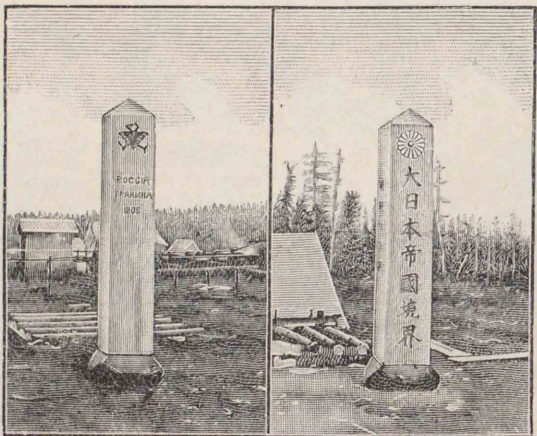
然るに露國は撤兵の宣言を

日勝・露敗

ポーツマス條約

我國は自國の安全と、東亞の平和との爲に、遂に宣戰を公布することとなつた(三)明(七)治。

開戰の初、我海軍よく機先を制した後、大山・嚴・東郷・平八郎等の率ゐた我陸海軍の連戰連勝に、露國の勢全く屈した。乃ち我全權大使小村・壽太郎等は、露國の全權ウキツテ等と、米國のポーツマス(三)明(七)治。



界 境 露 ・ 日 の 太 樺

スに講和會議を開き、露國は韓國に於ける日本の宗主權を認め、遼東半島の租借權と、長春(吉)以南の鐵道を日本に讓與し、兵を滿洲より撤し、且つ樺太南部を割讓すること(三)明(八)治。

戰後の滿洲 日露戰役後、滿洲の大部分は、露國の勢力範圍より脱

滿洲南端の日本租借地



伊藤博文

し、滿洲の南端は我國の租借地となり、我國は關東都督府を開いて、之を經營した(明治三九年九月)。此租借地は日本が外國に租借地を有する始となつた。

なつた。ついで旅順鎮守府が設置された(明治三九年十月)。是れ即ち我帝國が亞細亞大陸の一角に國法上の海軍根據地を置く始となつたものである。

日本の韓國併合 日露戰役後、ポーツマス條約の結果として、我國は韓國に對する宗主權を得たから、先づ日韓協約を結び、新に統監府を置き、伊藤博文をして始



朝鮮總督府新廳舍



日韓併合の功臣

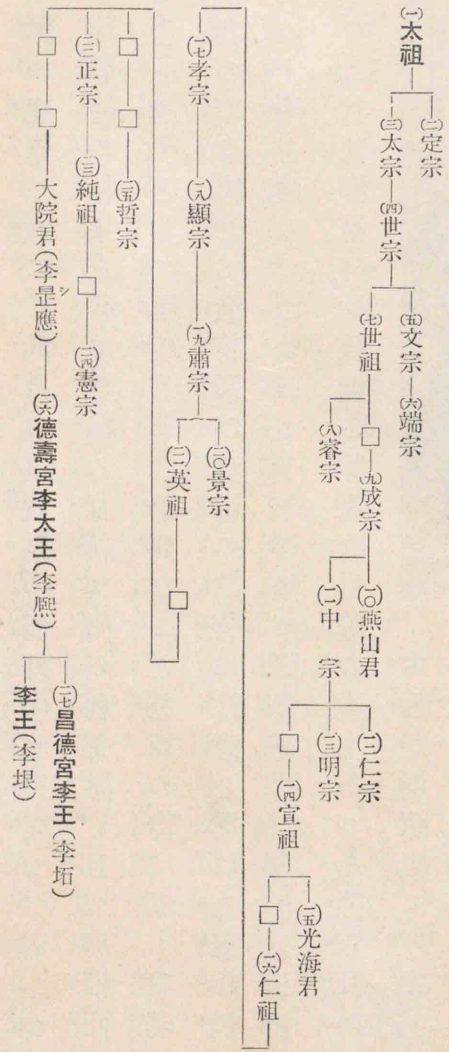
(日韓併合紀念朝鮮高麗真帖)

韓國統監伊藤博文

韓國を改めて朝鮮と稱す

めて韓國統監の重任に就かした(明治三八年)。爾來韓國保護施政改善の實益、舉がつたが、なほ更に日韓相互の安寧を増進し、東洋の平和を永遠に維持せんが爲に、つひに韓國を我帝國に併合することとなり(明治三三)、韓國を改めて朝鮮と稱し、朝鮮總督を置いて、諸般の政務に當らしめた。

朝鮮の系圖



小村壽太郎

桂太郎

伊藤博文

山縣有朋

寺內正毅

李完用

會根荒助

山縣伊三郎

清國の覺醒

清國の晩年 次に清國は、日露戰役中、局外中立を守つて居たが、我帝國戰勝の結果を視て、益、深く日新文明の利を感じ、且つ利權回收の念を起すと共に、國政改革の緊要なことを認め、特に深く我明治維新の事に感じて、教育及び政治の改善に注意し、遂に立憲政體採用の上諭を發し(三明治)、ついで十年の後に國會を開くべきことを約し(四明治)、其他纏足阿片吸烟の弊風改良等の議もあつた。德宗及び西



(中) 攝政王親王

太后が崩殂して(四明治)、其年僅に三歳の幼天子宣統帝の位に即くや、其父醇親王が政を攝し、銳意國事に當り、國勢稍回復の兆が見えた。其後輿論は益、國會の速開を希望し、遂に宣統五年

兩皇崩殂

(大正)には國會を開くべき旨の上諭發布せられ(三明治)、且つ新内閣官制の發布と、其組織とを見るやうになつた(四明治)。しかし、その閣員は皇族が多數を占めてゐた。そこで全國の志士は、皇族内閣は列國に無き所、國家に益のないのみならず、また皇族の幸に非ざる故、別に立憲責任内閣を組織せんことを要求したが、攝政王は之を許さぬため、人心はつひに清朝より離るるやうになつた。

第十一章 支那の革命

革命の國 支那は其國體我國と異なり、古來屢、主權者の革命興亡があり、政治上歴代の國號は有れども、一定せる地理的國名なく、國人が自稱する所の中國、または中華は、外に對する自尊的美號にして、嚴密の國名でない。支那といふは、衆説に従へば、今より二百餘年前に全國を統一した秦朝の威名遠近に震ひ、諸外國は秦を

和・漢(日・支)國體の相異

中國・中華・支那

漢唐

轉訛して支那と呼んだのである。また漢といひ、唐といふは、漢唐二代は、歴代中の盛時にして、その國運頗る長久、その威名四方に傳はつたからである。清朝も太祖以來十二世、約三百年の命數を保つたが、天命人心二つながら、清朝を去つて、清朝も亦遂に革命の哀史に記さるる事となつた。

孫文

革命軍勃興 光緒十八年(明治)廣東人孫文(逸仙)興中會を創立して、革命の機關とし、清朝を倒し、漢人の天下を興さうとした。その會員には廣東人多く、米國及び南洋諸島に寓居する者、相ついで入會した。日清戦役の起るや、革命黨は兵を廣東に擧げやうとしたが、密謀露顯し、孫文海外に遁れ(明治)至る所に於て益々革命を鼓吹し、その名聲は漸く世界的にあらはれ、黨員も漸く盛となり、北清事件の頃より革命黨員の兵を起す者少くなく、廣東省内に事を起せし黃興も、其一人であつた。而して清朝は改革日新の氣運に伴つて、内閣制

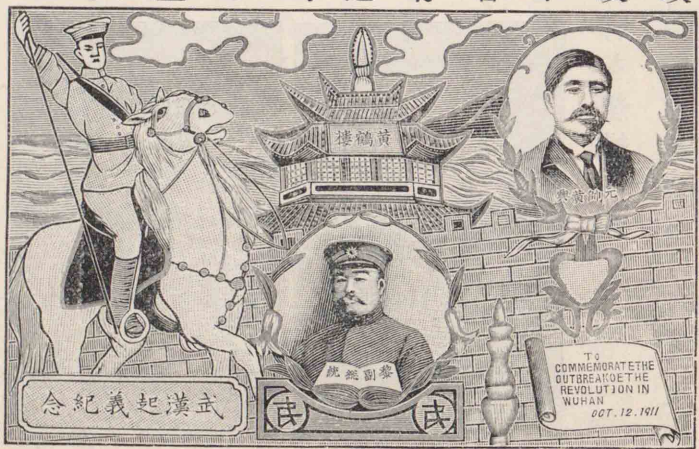
黃興

革命の近因

黎元洪

度を定めたけれども(明治)徒に立憲政治を口にして、實行の誠意に乏しく、政治は依然として振はず、廣東の革命軍また起つた。謀洩れて黨員の死する者七十餘人もあつた。時に清朝鐵道國有政策を斷行するや、各省の人民多く之に反對し、四川地方の反抗特に烈しく、官吏の壓制も亦最も激しかつた。而して湖北の地方官亦嚴に革命黨を抑壓したから、黨員は湖北の軍隊と結び、兵を起して武昌を占領し、黎元洪を擧げて革命軍の都督とし、やがて漢口、漢陽を陥れた(明治)。

支那共和國 清朝は武漢の事變を聞き、大に驚き、陸海軍をして、漢



樓鶴黃の昌武び及(下)洪元黎と(上)興黃きかは繪念記軍命革

口を攻めしめた。相對すること十日許、湖南、江西、山西、陝西の諸省も、また既に革命軍に應じ、北方の軍隊も亦政體改革を唱へるやうになつた。清帝已むことを得ず、己れを罪するの詔を下し、又憲法信條を頒つた。けれども人心の共和に向へるは、つひに之を防ぎ難く、漢口方面の清軍亦利あらず、清廷大勢日に去るを以て、使を遣して民軍即ち革命軍と和を議し、民軍代表者伍廷芳は、清使唐紹儀と談判し、國會を召集して政體を解決しやうとした。時に各省の代表者南京に會し、孫文を擧げて臨時大總統とし、臨時政府を組織した。清朝の内閣總理袁世凱はなほ民軍と和議を計つた。けれども、民軍



文 孫 と 凱 世 袁

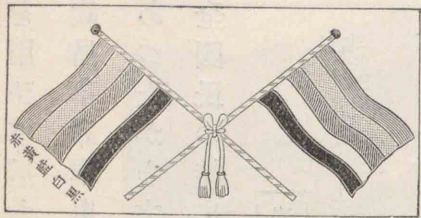
南北の和議

南京の臨時政府

清帝退位

第一回民國國會

支那共和國の正副大總統



旗 國 民 華 中

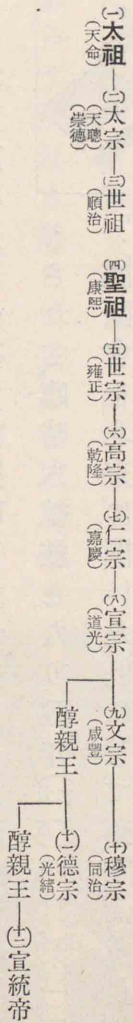
の意氣甚だ盛であつたから、清朝も爲すべき策なく、袁世凱に命じて、民軍と清朝皇室優待條件を議決せしめ、清帝は退位の詔を降し、一切の政權を去り、ただ依然皇帝の尊號を存した(明治四五年)。かくて清朝は太祖より十二世二百九十七年、世祖の北京即位より十世二百六十九年にして滅亡した。

この報南京に至るや、孫文は辭職し、袁世凱は參議院(支那地方代表者の集會)に推されて、臨時大總統となり、翌年(二年)四月、第一回民國國會を北京に開いた。既にして舊革命黨員等、袁世凱の專横を憤り、同年七月第二の革命軍を起したが大敗し、孫文、黃興等海外に奔つた。かくて同年十月、國會の選舉によりて、袁世凱は大總統に、黎元洪は副大總統に就任し、支那共和國(即ち中華民國)が正式に成立し、列國之を承認した。支那はこれまで陰曆

改曆と國慶節

を用ひて居たが、民國政府成るや、改めて陽曆を用ひた。而して上記武昌革命軍舉兵の第一日たる陰曆八月十九日は、陽曆十月十日であつたから、之を記念するが爲に、毎年十月十日を以て國慶節とし、全國民の特に慶祝する祝日とした。

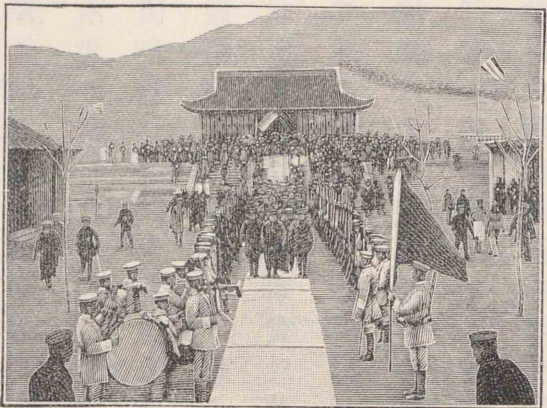
清の系圖 (括弧の内は年號なり)



第十二章 東洋近事

日獨開戦と日支交渉 東洋平和の維持は、我國外交の大方針である。是を以て大正三年(西紀一九一四年)七月、歐洲の大戦起るや、我國は此大方針に基き、獨逸に對し、其日本海支那海方面にある艦艇の撤退と、膠州灣租借地の還附を勸告したが、應ぜざりしにより、遂に戦を

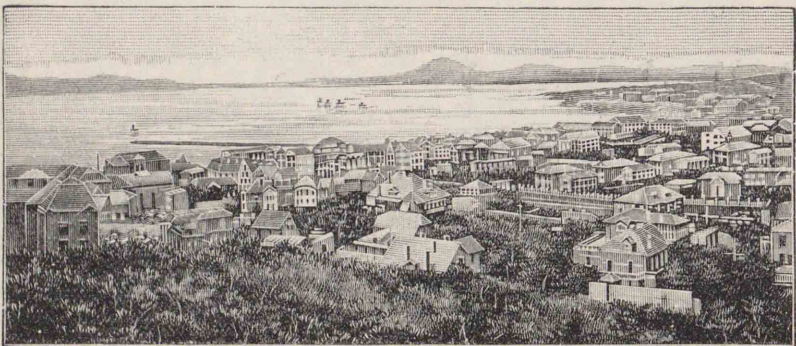
膠州灣占領
日・支條約



(真寫)景光の謁進に陵祖太の明の京南等文孫

宣し(大正三年八月三)膠州灣を占領した(同年十一月十)。又我國は此大方針により、翌年五月、日支條約を結び、遼東半島の租借期限を延長し、南滿洲及東部蒙古に於ける我優越權を認めしめ、山東省に於ける獨逸の利權を我國に於て

繼續する事などを承認せしめた。
袁氏失敗 袁世凱は大總統となつて益、專



部一の街市島青

第三革命軍

袁氏の悶死
黎氏就任

横を逞しくし、つひに共和制を廢して、自ら皇帝とならうとした。是に於て、唐繼堯・蔡鍔等第三革命軍を雲南に起し、南北の諸省之に應じ、其大勢袁氏に不利となつた爲め、袁世凱は帝制宣言を撤回したが、革命派は堅く袁氏の引退を主張してやまず、袁氏は困惑憂悶して、遂に病死した。(大正五年六月)是に於て黎副總統は大總統となり、帝制首唱者を懲罰し、一時和局を結んだ。

世界大戦参加及び清帝復位 上に記した世界大戦の支那に及ぼした影響は小さくない。黎元洪の大總統となる



（真寫）會集の者表代民國全那支るけ於に京南
興黃（二）文孫（一）

張勳と清朝復興

世界大戦参加

や、國務總理段祺瑞等は聯合國に加はつて、獨逸二國に宣戰せんと主張し、國會は之に反對し、内閣と國會との間が不和となつた。この時、かねて清朝復興を企てて居た安徽督軍張勳は、時局調停を標榜し、黎元洪に勧めて、國會を解散せしめ、ついで自ら軍隊を率ひて北京に入り、一時宣統帝を復位せしめたが、(大正七年七月)段祺瑞等に討たれて、忽ち失敗し、(同年八月)民國は依然として存立した。

此事變後、黎總統は責を引いて辭職し、馮國璋之に代り、つひに支那も獨逸二國に對して戰を宣し、(大正八年六月)ついで新國會を召集し、(同年八月)馮總統の退職するや、徐世昌が新國會より選舉されて、大總統となつた。(大正七年十月)

南北對立 上記の如く、國會の解散された時、議員は多く南方に避難したが、彼等は國會の復活を主張し、遂に孫文を大元帥として、廣東に軍政府を開き、(大正六年九月)西南五省(廣東、廣西、雲南、貴州、四川)之を助けたから、今や

南北兩政府

支那は、南北の兩政府と、新舊の兩國會が對立するやうになつた。其後、兩政府は列國の勧めに従ひ、上海に和平會議を開くこととなつたが（同八年）其効なく、孫文はつひに南方政府の大總統となつた（同月四）。されども南方政府は、孫文と廣東省長兼廣東軍總司令陳炯明との内訌等によつて、瓦解するやうになつた。

山東問題 從來支那人は、大正四年の日支條約（一七三）に不満であつた故、世界大戰終つて、巴里講和會議の開かるるや（大正八年一月八）、支那は獨逸に宣戰したといふを理由として、この條約を無視し、獨逸より直接に山東の還附を受けんと盡力したが、其目的を達しなかつた。是等の事情よりして、支那の一部に、所謂排日運動が起るやうになつた。

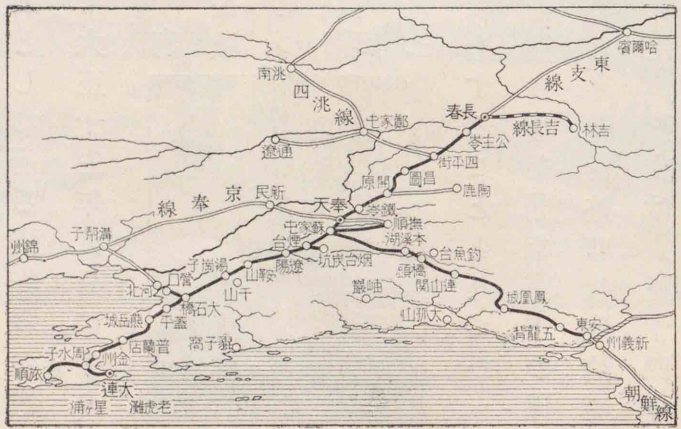
華盛頓會議 大正十年（一九二一）十一月に至り、日英米佛伊の世界の五大國は、米國の華盛頓に會議し、各國軍備の制限、太平洋問題及び

山東問題の解決

極東問題等を協議し、將來の平和の保障を計つた。支那もこの會議に参加し、遂に我國と協議して、山東の還附を受け、支那は膠州灣を開放し、山東鐵道を我國より譲り受け、もと獨逸の採掘權を有して居た鑛山は、日支兩國にて經營すること等を議決した（大正十一年二月十一）。



是等の内外多事の際、大總統であつた徐世昌は、在職四年にして辭職し（大正十一年五月十二）、黎元洪之に代つたが、直隸派軍閥の壓迫を受け、在職僅に一年を以て



南滿洲略圖

奉・直戦争

孫文の永眠



辭職し、曹錕之に代つた(同年)。彼は即ち直隸派軍閥の首領である。是れは奉天に據つて滿洲を勢力範圍として居る張作霖の悦ぶ所でない。かくて大正十三年九月に至り、張

力者吳佩孚とは、兩雄並び立たずして、長城方面に開戦し、所謂奉直兩派の戦争となつた。その結果、曹錕は幽閉され(同年十一月)、段祺瑞

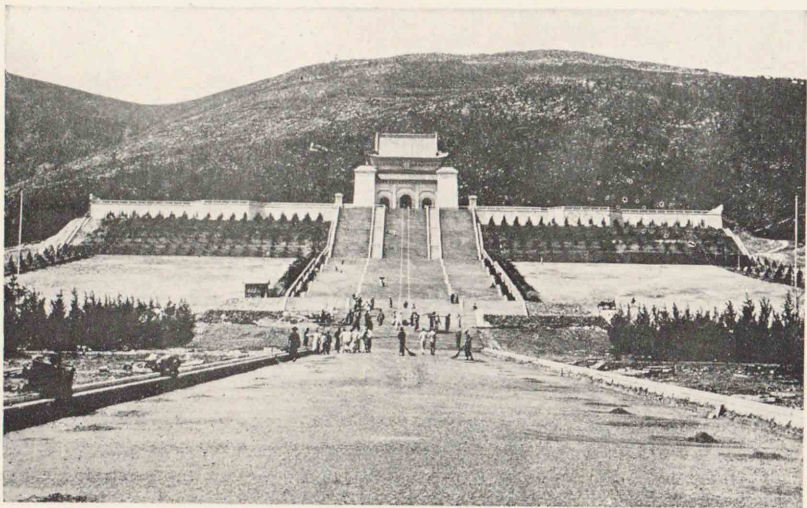
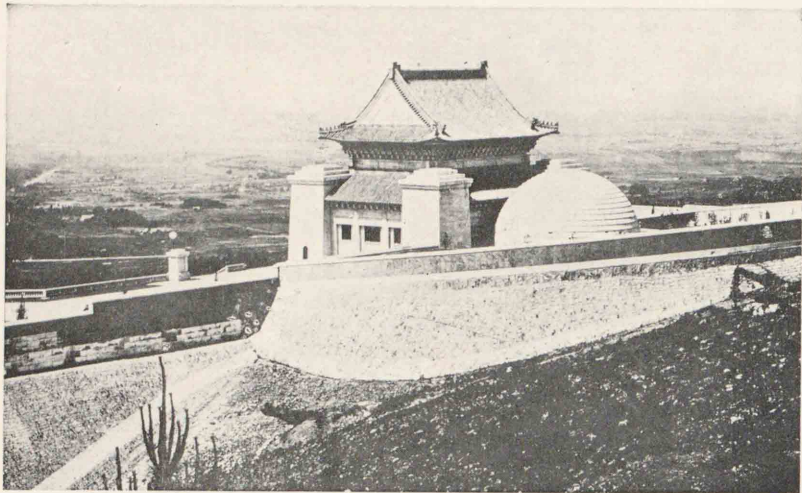


が臨時執政となつ



張作霖

て(同年)、時局を收拾することとなつた。段氏はそこで善後會議を開き、南方の孫文等の有力者を集め、時局を整理し、政治の改善を議せんとしたが、孫文は大正十四年三



(號の文孫は山中)陵山中の外城京南
景全陵山中(下) 所安奉樞靈(上)

段執政退職

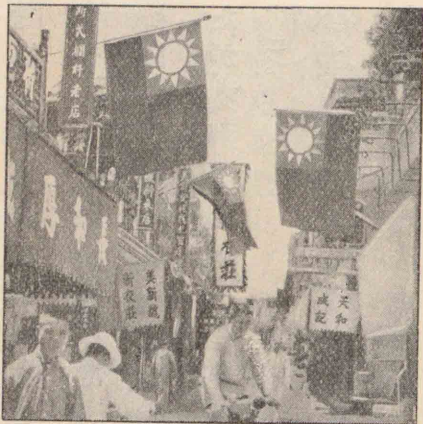
張作霖大元帥と
なる

三民主義の宣傳



段 祺 瑞
月、北京に病死し、また張作霖、馮玉祥（直隸派、國軍首領）、吳佩孚等の勢力争奪などの紛擾が續いて起り、段執政もつひに執政退職の已むなきに至り（大正十五年四月）、張作霖はつひに北京に中華民国軍政府を建

てて、その大元帥となつた（昭和六年六月）。



青天白日滿地紅旗

又一方には孫文の遺志を奉じて彼の主唱せる民族、民権、民生の三民主義を宣傳して、次第に人民の共鳴を得たる南方の總司令蔣介石は、廣東を發して、軍を揚子江流域に進めて、益、勢を得、つひに



蔣 介 石

に大賢偉人を要して居る。誰かよく支那をして世界列國とともに、

平和隆昌ならしむるであらうか。

印度の近狀 次に英領印度に於

ては、明治四十四年(西紀一九一一年)印度總

督政廳所在地をカルカタより、デ

リーに遷し、その統治は益々堅實と

なつた。大約三十年前頃より、一部

の士人の間に自治及び國産使用

の説を唱ふるやうになつた。けれ

ども印度に對する英國政府の統

治の方針は、依然として確定不變

政廳移轉

統治方針の確定
不變



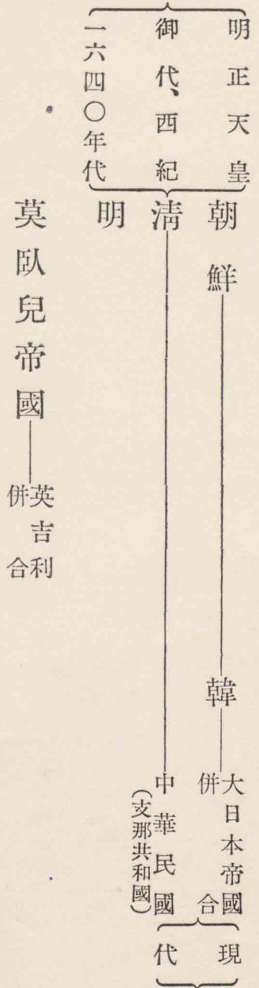
印度の二人偉人
ガデン - デルゴタ

であるといふ。

八訂新編外國歴史教科書 東洋之部 終

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
一六三	一六三	一六三	一六三	一六三	一六三	一六三	一六三	一六三	一六三
清の聖祖康熙元年	臺灣清の有となる	清・露二國の尼布楚條約締結	外蒙古・青海等清の有となる	清、西藏を平ぐ	清の高宗乾隆元年	同	同	同	同
三四	三七	三八	三九	四一	四三	四五	四七	四九	五一
二五二	二五二	二五二	二五二	二五二	二五二	二五二	二五二	二五二	二五二
一九二	一九二	一九二	一九二	一九二	一九二	一九二	一九二	一九二	一九二
清、列國と和し北清事件局を結ぶ	日・露戰役起る	日・露の講和條約成る○日・韓協約成り始めて統監府を韓國に置く	清國立憲政體採用の上諭發布	清の德宗光緒帝及び西太后の崩殂	○清の宣統帝即位	日本の韓國併合			

近世史摘要年表



年	皇紀	西紀	重要事蹟	年	皇紀	西紀	重要事蹟
後陽成	三六〇	一六〇〇	英人東印度商會を建つ	明治二八	二五五	一八九五	日・清下、關係約成る
豐臣秀頼	三六〇	一六〇〇	蘭人瓜哇に據る	同 三〇	二五五	一八九七	朝鮮國號を韓と改む
後水尾	三六九	一六〇九	蘭人臺灣に據る	同 三一	二五五	一八九九	獨・露・英の三國清國の港灣を借る
徳川秀忠	三六九	一六〇九	明の鄭成功臺灣に據る	同 三二	二五五	一八九九	佛國の廣州灣租借○清國改革派の失敗
同 家光	三六九	一六〇九	明の鄭成功臺灣に據る	同 三三	二五五	一九〇〇	義和團の亂○東西八列國の北京占領○露國滿洲を占領す
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 三四	二五五	一九〇一	清、列國と和し北清事件局を結ぶ
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 三七	二五五	一九〇四	日・露戰役起る
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 三八	二五五	一九〇五	日・露の講和條約成る○日・韓協約成り始めて統監府を韓國に置く
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 三九	二五五	一九〇六	清國立憲政體採用の上諭發布
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 四一	二五五	一九〇八	清の徳宗光緒帝及び西太后の崩殂
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 四三	二五五	一九一〇	○清の宣統帝即位
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 四四	二五五	一九一〇	日本の韓國併合
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 四五	二五五	一九一三	支那の革命戰爭起る
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	大正 二	二五三	一九一三	清の滅亡
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 三	二五四	一九一四	支那共和國成立す
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 四	二五四	一九一五	世界大戰起る○日・獨開戦
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 五	二五五	一九一六	日・支條約締結
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 六	二五五	一九一七	袁總統死し袁元洪之に代る
同 家光	三六九	一六〇九	臺灣清の有となる	同 六	二五五	一九一七	宣統帝の一時復位○馮國璋代行大總統となる○廣東の軍政府成立す

近世史摘要年表

明正天皇
御代、西紀
清
一六四〇年代

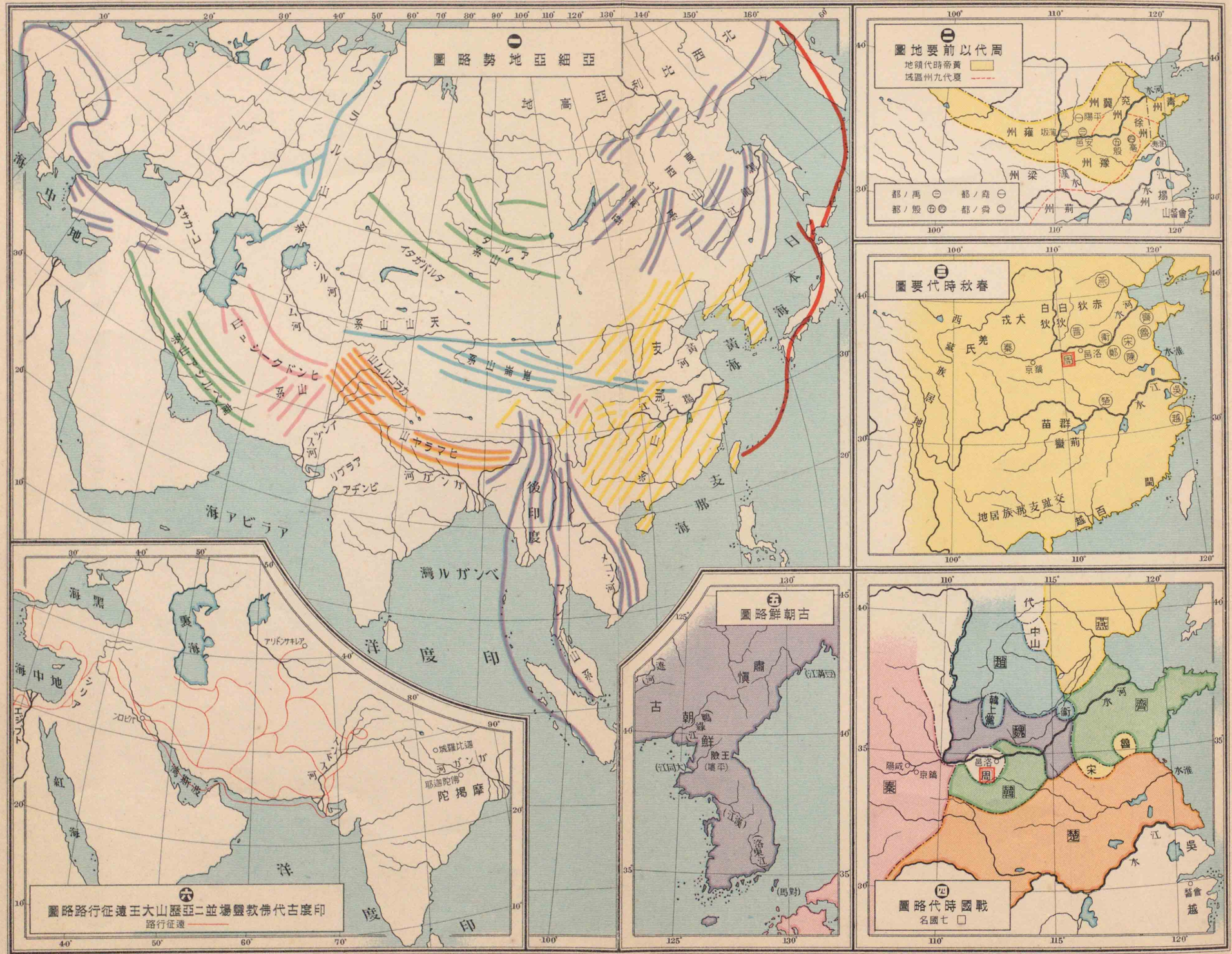
韓

大日本帝國
併合
現
中華民國
代
(支那共和國)

莫臥兒帝國—英吉利

年	皇紀	西紀	重要事蹟	年	皇紀	西紀	重要事蹟
後陽成	三六〇	一六〇	英人東印度商會を建つ	明治二八	二五五	一八九五	日・清下、關係約成る
後水尾	三七九	一六九	蘭人瓜哇に據る	同三〇	二五七	一八九七	朝鮮國號を韓と改む
德川秀忠	三三四	一六四	蘭人臺灣に據る	同三一	二五八	一八九八	獨・露・英の三國清國の港灣を借る
同	三三四	一六四	明亡ぶ	同三二	二五九	一八九九	佛國の廣州灣租借○清國改革派の失敗
後光宗	三三四	一六四	明の鄭成功臺灣に據る	同三三	二六〇	一九〇〇	義和團の亂○東西八列國の北京占領○露國滿洲を占領す
同	三三四	一六四	清の聖祖康熙元年	同三四	二六一	一九〇一	清、列國と和し北清事件局を結ぶ
同	三三四	一六四	臺灣清の有となる	同三七	二六四	一九〇四	日・露戰役起る
同	三三四	一六四	清・露一國の尼布楚條約締結	同三八	二六五	一九〇五	日・露の講和條約成る○日・韓協約成り始めて統監府を韓國に置く
同	三三四	一六四	外蒙古・青海等清の有となる	同三九	二六六	一九〇六	清國立憲政體採用の上諭發布
同	三三四	一六四	清、西藏を平ぐ	同四一	二六八	一九〇八	清の德宗光緒帝及び西太后の崩殂
同	三三四	一六四	清の高宗乾隆元年	同四三	二七〇	一九一〇	○清の宣統帝即位
同	三三四	一六四	清の高宗天山南北路を平定す	同四四	二七一	一九一一	支那の革命戰爭起る
同	三三四	一六四	暹羅、清の高宗に朝貢す	同四五	二七三	一九一三	支那の革命戰爭起る
同	三三四	一六四	安南、清の高宗に朝貢す	大正二	二七三	一九一三	支那共和國成立す
同	三三四	一六四	阿片戰役起る	同三	二七四	一九一四	世界大戰起る○日・獨開戰
同	三三四	一六四	清・英一國の南京條約締結	同四	二七五	一九一五	日・支條約締結
同	三三四	一六四	長髮賊起る	同五	二七六	一九一六	袁總統死し孫元洪之に代る
同	三三四	一六四	莫臥兒帝國亡ぶ	同六	二七七	一九一七	宣統帝の一時復位○馮國璋代行大總統となる○廣東の軍政府成立す
同	三三四	一六四	露國、黒龍江北北を取る	同七	二七八	一九一八	徐世昌大總統となる
同	三三四	一六四	清と英・佛一國の北京條約締結○露國ウズリ江東を取る	同八	二五九	一九一九	世界大戰の平和條約成立す
同	三三四	一六四	佛國交趾支那を得	同一〇	二六一	一九二一	孫文南方政府の大總統となる
同	三三四	一六四	朝鮮王李熙(後の李太王)元年○長髮の亂平ぐ	同一一	二六三	一九二三	山東問題解決す
同	三三四	一六四	日・清修好條約締結	同一二	二六三	一九二三	曹錕大總統となる
同	三三四	一六四	露國樺太を得	同一三	二六四	一九二四	奉・直戰爭起る○段祺瑞臨時執政となる
同	三三四	一六四	日・韓通商條約成る	同一五	二六六	一九二六	段執政退職す
同	三三四	一六四	英國女皇印度女皇を兼ね	昭和二	二五七	一九二七	蔣介石の北伐起る
同	三三四	一六四	清・露の伊犁問題定る				國民政府南京に成立す
同	三三四	一六四	アフガニスタン方面の英・露境界問題定る				
同	三三四	一六四	日・清戰役起る				

圖一第



① 亞細亞地勢略圖

② 周代以前要地

地領代時帝黃
 域區州九代夏

郡/禹 ⊖ 郡/舜 ⊖
 郡/殷 ⊕ 郡/周 ⊕

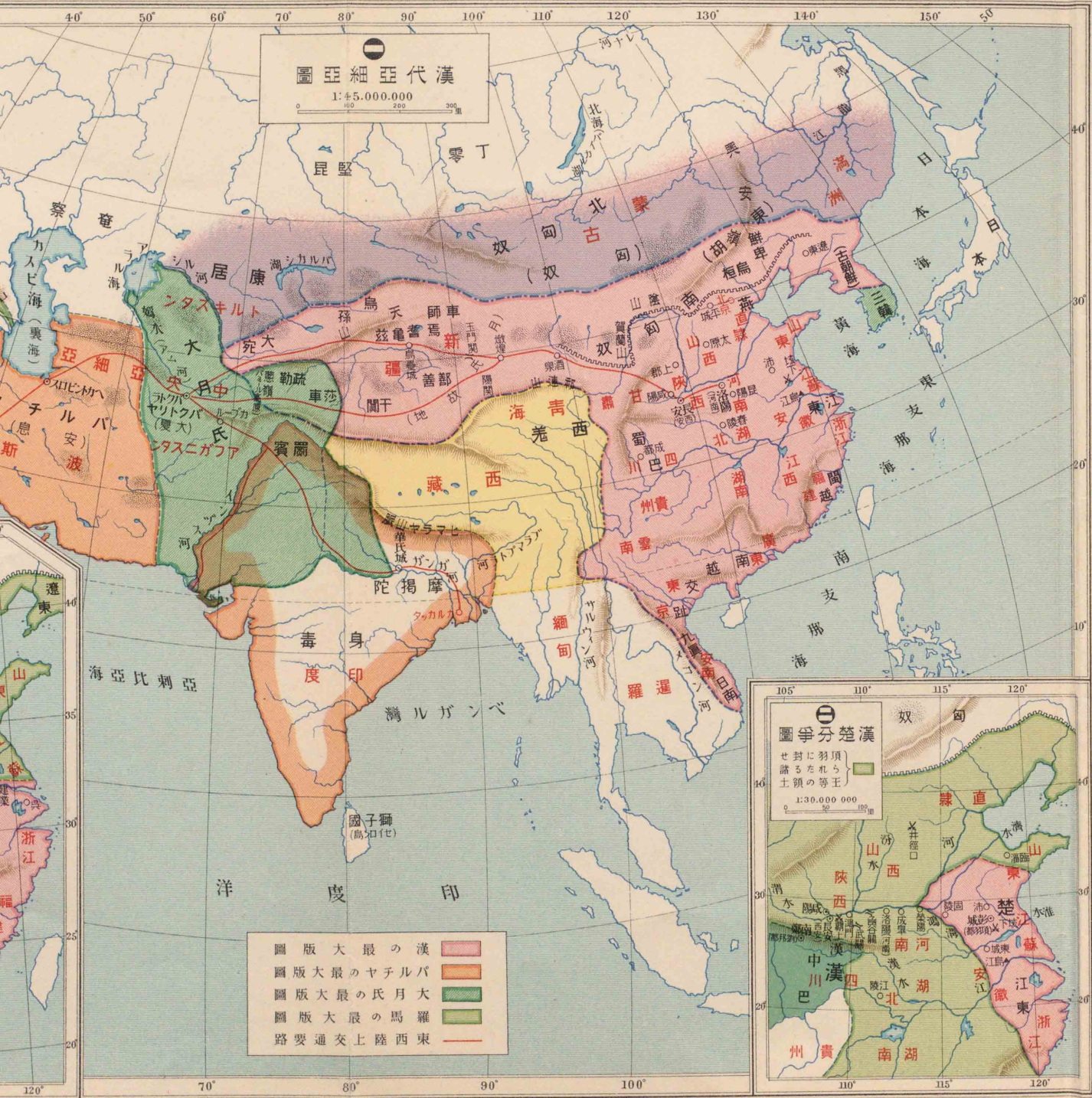
③ 春秋時代要圖

④ 古朝鮮圖

⑤ 戰國時代略圖

⑥ 印度古佛敎場並亞歷山大王征路略圖

圖二第



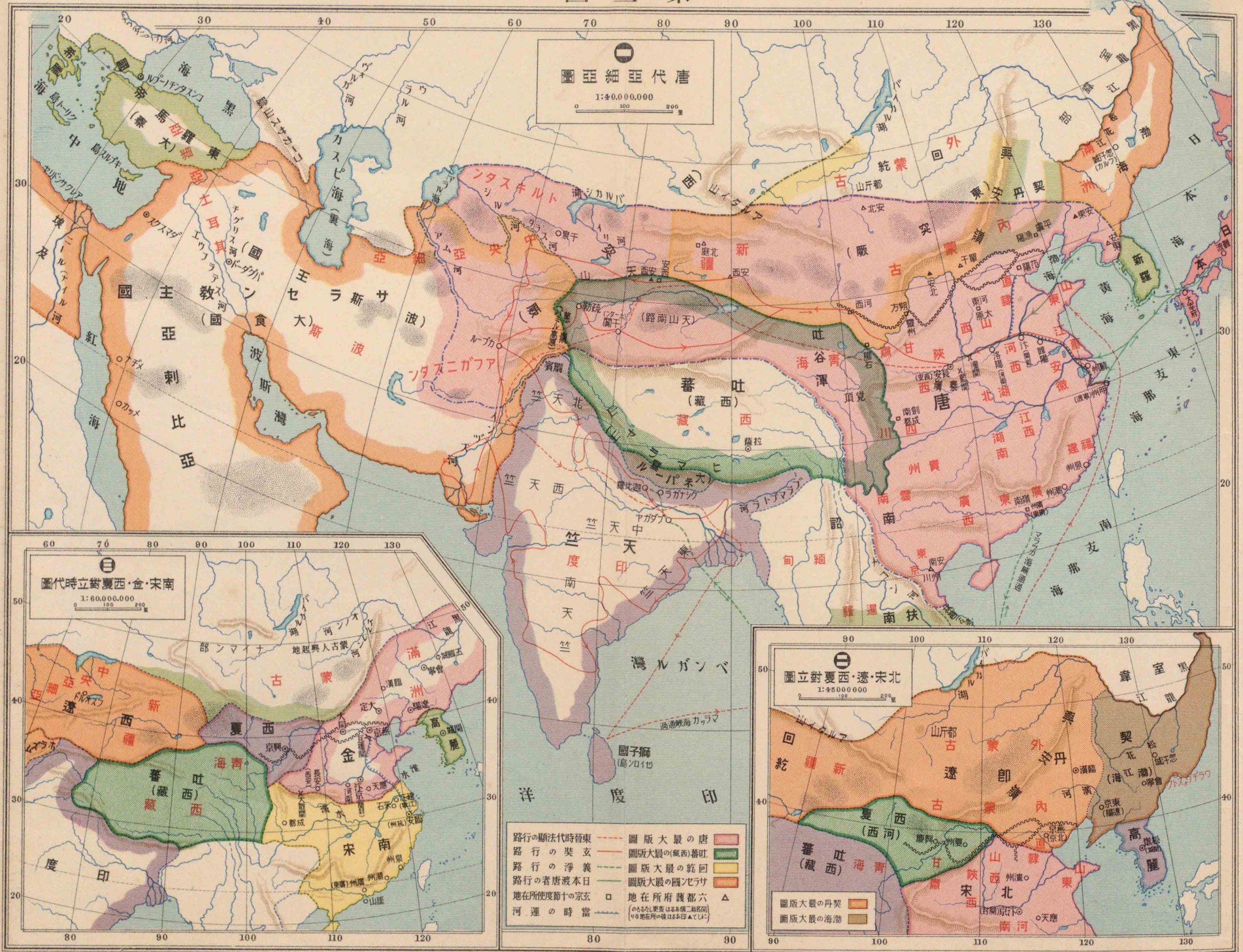
圖二第



圖三第



圖三第



圖四第



圖四第



圖五第



① 圖亞細亞初清
域領最大の部ルガンス
1:45,000,000

② 圖洲滿初清
(城長の種一) 薩邊
1:12,000,000

圖五第



圖六第



昭昭昭 大正大正 明明治治
 和和和 七四二四 四四四
 六六五 年年年 年年年
 一八八 年年年 年年年
 月月月 十月十月 十月十月
 十三廿 日廿廿 日廿廿
 七四七 日廿廿 日廿廿
 日日日 日廿廿 日廿廿
 修修修 大正大正 大正大正
 正正正 十四十三 十四十三
 十十十 年年年 年年年
 六六五 月廿廿 月廿廿
 版版版 日廿廿 日廿廿
 發發發 日廿廿 日廿廿
 行行行 日廿廿 日廿廿
 日日日 日廿廿 日廿廿
 修修修 大正大正 大正大正
 正正正 十四十三 十四十三
 十十十 年年年 年年年
 六六五 月廿廿 月廿廿
 版版版 日廿廿 日廿廿
 發發發 日廿廿 日廿廿
 行行行 日廿廿 日廿廿

大正大正 明明治治
 八編新 外國歷史教科書之東洋
 訂一編新 外國歷史教科書之東洋
 定價金一圓四十一錢

不許 複製

編纂者 中山久四郎

發行所 東京市神田區通神保町一番地
 三省堂

印刷所 東京市外蒲田
 三省堂蒲田工場

發行所 東京市神田區通神保町一五五(振替口座大坂八二三〇〇六)
 三省堂大阪支店

【本製鳥飯】

師一
西本
雪枝



広島大学図書

2000082107

